定価二、四二〇円 本体二、二〇〇円

ISSN 1342-6516
雑誌 14905-11

4910149051107
02200

発行所｜株式会社新建築社｜東京都千代田区霞が関三丁目２番５号
霞が関ビルディング 17 階｜〒100-6017
電話｜03-6205-4380 大代表　振替｜00150-6-30658

2020年11月号（第415号）昭和51年7月8日　第三種郵便物認可　令和2年10月19日発行　毎月1回19日発行
住宅特集
新建築
415
2020
SHINKENCHIKU
JUTAKUTOKUSHU
11
特集／スケールとディテール
住宅を環境に開く思考と挑戦
作品／十二題
長谷川豪
中村拓志
大室佑介
三井嶺
森田一弥＋小寺磨理子
椎名英三＋椎名祐子
川口通正
伊礼智
城戸崎博孝
加藤渓一
小泉誠
神谷勇机＋石川翔一
記事
住み継がれる住宅の行方
連載
建築家自邸からの家学び
第36回吉岡賞発表
審査員／篠原聡子　藤本壮介

座談月評

新建築住宅特集2020年10月号

特集／別荘
自然を愉しむ持続可能な暮らし

批評

評者

塚本由晴
建築家
東京工業大学大学院教授

平田晃久
建築家
京都大学大学院教授

増田信吾
建築家
明治大学特任准教授

『新建築住宅特集』では、毎月、さまざまな作品や論考、記事を掲載し、広い射程をもって住宅から明日を拓く建築の可能性を伝え記録しています。しかし重要なことは、議論の場をつくることにあります。限られた誌幅の中で示されたものから何を考えていくべきか、それぞれの読み解きや発見を共有し、建築を取り巻く多くの事象や環境と共に議論を重ねること。この座談月評は、その場を広げていくことを目的に掲載します。
2020年1～12月号は、塚本由晴さん、平田晃久さん、増田信吾さんを評者として、1年を通して前号への批評を座談形式で議論いただきます。それぞれの個別の評と共に、それが相乗して新たな示唆に展開する連載記事として毎月掲載いたします。どうぞご期待ください。
（編集部）

増田　今月号は、余暇を愉しむ別荘と生活機能の最低限に近い移動可能な建築という対比的な特集の掲載が面白かった反面、それぞれにおいて掘り下げられるべき概念がまだあるように思えました。前半の別荘には、保養所やホテル、集会施設など、異なるプログラムを挿入して現代の価値観とのバランスを取る作品が複数ありますが、それは利回り的な論理で、別荘本来のあり方における概念的な進歩には繋がらない気がします。そもそも拠点を複数もつことの意味を、建主も建築家も使い方が分からないまま、流されてつくってはいないでしょうか。戦後の住宅供給が達成されたあたりから、余暇という概念が大衆化され、商品として産業全体を維持してきました。それが、切実な価値基準がない虚無と化し、余暇が文化にならない実情なのかもしれません。
塚本　別荘という建築の類型の起こりは、ヴェニスの商人や貴族がベネト地方の平野に荘園をつくり、食糧生産に投資し始めた時に、彼らが荘園管理や自然に親しむために建てた館であるヴィラにまで遡れるのではないでしょうか。ヴェニスの資本が大量に投下されていたコンスタンチノープル（現イスタンブール）の覇権が、オスマントルコに奪われたために、行き場を失った投機的資本が一気に荘園建設に流れ込んだそうです。それは都会人が田舎に住むことの始まりで、商人や貴族が納得するような建築として開発されたのがヴィラでした。そこで頭角を現したアンドレア・パラディオは、建物の前にギリシャ神殿のオーダーを用いたり、横に広がるロッジアと前庭を組み合わせて、限られた資金で堂々とした構えをつくるのが得意でした。その中心軸に沿って農地や林を配すなど、周りの風景までつくって地域に貢献していました。しかし自動車の登場は、手付かずの自然を生け捕りにする方向に、別荘の意味を変えていった。日本では軽井沢がその走りで、富裕層や知識人のコミュニティが避暑に訪れる場所として、別荘を次々と建てました。でも初期の別荘は質素なもので、都市との対比で暮らしの切り替えを実感できるものが多かった。現代の別荘は、増田さんが指摘されたように、どんな生活をするのかが曖昧で移動するのが目的になっていないか、と感じます。豪邸になればなるほど、周囲の資源から遠ざかる感じがあって、何のために都市を脱出するのかなと。たとえば大島芳彦さんの「**陽明館**」のように、庭をつくることまで含めて別荘であるという認識が、現代の別荘には欠けているかもしれません。自然を生け捕りにするという想定は、環境を消費するばかりになる可能性があります。
平田　自分の存在が1カ所に縛られていることに対するそこはかとない違和感は、みんな感じていると思います。今、それをどうしていいか分からない状態で、その捌け口を見出すことができずに、どこまで住むか分からない別荘をつくってみている人もいるはず。物理的にそこに住むというよりは、心の住む場所というか、仮想の場所があることで、自分の存在が少し自由な気持ちがもてる、という意味的なことの方が大きいのではないでしょうか。新型コロナウイルスで家に閉じ込められ、その感覚がより強くなりましたね。通常とは少し違う意味でのバーチャルなリアリティというか。この号だと特に千葉学さんの「**瀬戸内の別荘**」や武井誠さん鍋島千恵さんの「**森の離れ**」は、心の領域に向けられた割合が多い建築な気がします。「森の離れ」は区画割りまで設計できるなら、壁の入れ方を工夫することで隣地との視線の干渉を避けられ、狭い敷地の中にひしめいているけど、それぞれが広く感じるようなプランニングもできたはずです。しかし、そこに関心があるように見えないのは、全方位が緑に開かれている別荘であるという象徴化作用の役割の方が大きいからではないか。「瀬戸内の別荘」は、瀬戸内海の島々に開かれた、集落のようにさまざまな場所がひしめきあった自分だけの場所がここにある、という想像上の存在の方が重要に見えます。住むことよりもバーチャルなイメージの方に重きが置かれているようで、現代的な気もしますが、そういうことがパラディオのヴィラとは違った卓越性にどう結びつくのか、とも思ってしまいます。
増田　心の住む場所というニュアンスには共感します。ただ、それは主体性のない見栄と紙一重な危険性もある。仮に象徴化作用の別荘だとすると、環境全体を使って生活を前に進める必要性はなくなり、それは千葉さんのいう床・壁・天井という建築のプリミティブな要素以外で立ち上げる必然性が見当たらない裏返しとしてもとらえられます。
平田　僕はつくっている建築に自分の場所を投影して、なんとなくやっていけていて、コロナのことで初めて、現代の個人にとっての想像上の「自分の場所」問題に気づきました。半動産的な建築ってそういうことが関係していたのか、と気づいたり。吉村靖孝研究室の「**半動産建築年表**」は作品やプロジェクトを含め、ここまで突き詰めていることに持続性の強さを感じます。グラフィカルにも秀逸。一方で、ユニットで動けることが自由なのかというと、どこかで違うなという感覚もあるんですが。

「陽明館」

「瀬戸内の別荘」

「森の離れ」

「軽井沢の住宅」

塚本　地面に接地しインフラに接続する建物は課税対象です。税収によりインフラを整備・維持していくことに紐づいています。半動産建築はそこから外れる自由と、価格破壊が大事な主張と理解しています。しかしそれはタダ乗りになりはしないか。別荘で風景を生け捕りにするタダ乗り感と半動産建築がもっているタダ乗り感は、似ているかもしれない。今はグレーゾーンだけど、普及していくと法律で縛ることになるでしょう。もちろん硬直した制度への揺さぶりという意味は認めたい。私は社会制度を疑わずに建築を自由に考えましょうという主張には、上部構造と下部構造との関係性を見ないでおきたいという非政治性を見がちです。吉村さんはそういうことにも自覚的ですね。軽トラックをカスタマイズして暮らしている若者に先日会ったのですが、自分たちのネットワークでセルフ・リノベーションする面白さに気付いている人たちはすごくエネルギーがありますね。彼らの建築に対する関心は高いですが、それは建築家の作品についてではない。そのギャップはどんどん広がっている気がします。

増田　伊藤暁さんは「**軽井沢の住宅**」において、セルフビルドを望む建主に手を貸すという立ち位置ですが、もう少し違った建築家の介入の仕方はないでしょうか。地方へ移住して生活を見直したり、セルフビルドする動きは四半世紀前から起こっていることです。建築家がそこに介入するのであれば、土留めや基礎、構造、窓など産業化されたさまざまなエレメントのあり方を積極的に再解釈するようなチャレンジが必要です。藤野高志さんの「**動築1号器／2号器**」は、停止時の斜行角度を考慮して荷台の床や窓を丁寧に調整していますが、トレーラーまで含めて設計してほしかったです。今は、自由に部屋を運び景色を獲得するところに止まっていますが、動くことと止まることに別の意味が出てくると、新しい建築の発見になるかもしれません。たとえば、吉村さんの特集論考にある感染者隔離施設は、半動産建築が集合した時のひとつのあり方を示していますが、集まることを前提にしたハブづくりを深めることも価値の幅を広げる気がします。ひとつひとつが屋根を備えたものが集まった時にできる建築とはどんなものか、また余白を大きく必要とするハブとしての敷地は、車がない時はどうあって、それが都市の風景にどう影響を与えるのか。もっと突き詰めていけそうです。論考が興味深かった一方で、「**GPT TAISHO**」は、コンテナが単体で建築になってしまっているような、ジレンマに陥っている印象でした。

平田　伊藤さんが、磯崎新さんの「住宅は建築ではない」という言説に触れて、その話をもう一度どう引き受けられるかという問いを発していることは面白かったのですが、結局結論として何をいいたかったのかな。ある種の流動性や目に見えない仕組みとの動的な関係をもった建築の姿みたいなことを示唆しているのかもしれないけれど、それだけでは建築の空間になっていかないのではないか。翻ってそこには触れずに象徴化作用だけで建ったような別荘が巻頭にあるこの状況をどう考えていくべきなのか。伊藤さんや吉村さんの方向だけでも建築の問題になりにくいのかもしれませんが、象徴化作用だけで考えても、今の状況を照らし出した新しい建築にはならないように思います。

塚本　象徴化作用を用いた作品が、建築の確かさや産業としての正統性からのアプローチだとすれば、生活者によるセルフビルドも半動産建築も、産業的にはまったく不確かなオルタナティブです。このような確かさと不確かさが分裂しているのが現代の状況で、そのギャップの中に面白い建築があるはずです。プレカリアートという社会的に立場の弱い人たちは、ある意味今の世界の不確かさの映しでもあって、個人的背景から社会制度、産業構造などが彼らの存在には多重に関わっています。プレカリアートのための建築だけが不確かさに向き合う建築ではないですが、そういうことに建築的な思考を使いたいです。たとえば、事物連関には経路依存性があって、そこを丁寧に辿っていくデザインのプロセスが不可逆であることに、これまで見落とされてきた価値を感じています。

増田　何かの目的に向かってつくってみて、思った通りに解決することと、予想外の問題が新たに生じることがある。それ対して次の一手をどう打つか。一手一手が読み替えられ重層化されていくと、設計し続けることが価値となり、伊藤さんのいう時間を取り込むという概念的なことが物理的に現れてくると思います。

平田　「太田市美術館・図書館」(『新建築』1705)の時、小規模ながらも数段階で不可逆に決めていくというのをやってみました。確かに、いろんな人がいろんなことをいうのに対してはある効果があって、議論を共有して決めた場所は変えないようにして進めていくと、それなりに深まっていきます。ただ、際限なくそれをやると、建築家という職業がやたらと大変になっていきませんか。

塚本　でもそれが、対象の中にある建築を掴んでいくやり方ではないでしょうか。そこには不可逆性の問題があるだろうなと思います。建築が安定した立場からいろいろなものを吸収して見かけを変えていくのとは違います。

平田　「対象の中にある建築」という言葉はとてもいいですね。しかしそれを掴むことは、対象を含めた状況の中に自らを投げかけていくことによってしかできない、とも思います。魚谷繁礼さん魚谷みわ子さんの「**西橋詰町の長屋**」は、土間も打たず土のままで、剥がした以外ほとんど何もやってない様相に、寒々とした中にある快適感というか、ある境地が垣間見えました。

増田　別荘というと、吉村順三さんの「軽井沢山荘」(1962年)のように湿気対策のために床を大胆にもち上げる印象がありますが、佐藤文さん鹿嶌信哉さんの「**森の小屋**」は、中から地面が見えないギリギリの高さにもち上げています。さらに、景色を取り込むことをガラス張りという方法で終わらせず、家具や機能、窓を一体的に構成する中で試みていて、全体として環境に浮遊するような感覚を無理なくつくり出しています。

平田　室内のように囲ってフレーミングした外部とか、ちょっとル・コルビュジエっぽさを感じますが、この面白さはさらに高められる気がします。しかしここまで統一された素材感で後から廻り縁を打ちつけたような扱いにしなくても、素材の方向を意識的に変えて組み合わせた方がもっと建築として徹底した姿になったのではないでしょうか。森屋隆洋さんの「**SETOYAMA**」は、東側の1点で支えていて、ぎりぎり成立しているような緊張感はよいですが、西側の外観はもう少し考えられそうですね。

塚本　早草睦惠さんの「**屏風絵の家**」は、窓の凹凸が絶妙に気持ちよくて、吉村別荘のよい継承といえますね。外壁の斜面側に山の水を切る側溝がないのが少し心配。寺田雅史さん中山陽州さんの「**アーキペラゴ豊中**」は、コンテナが剥き出しだと住むには寂寥感を感じます。ほとんどコンテナと気づかれないようにする手はないのかな。設計者としては組み立ての方にカタルシスがあるのでしょうね。

平田　坂 茂さんの「**1HrSBシステム**」。坂さんはいつも、とても言語的というか、究極的にロジカルな感じがあって、ひとつの定点を形成している気がします。操作的にかっこよくしようなどとは全然考えずに突き進めていくところに、ひとつの姿を見ます。

塚本　プレカリティに向き合う建築のひとつの姿ですね。フレームで3角形を使うのは合理性が高い一方、クラディングが特別なものになる難しさがありますが、それも含めたシステムになっています。

「動築1号器／2号器」

「GPT TAISHO」

撮影：雨の森社 笹倉洋平
「西橋詰町の長屋」

「森の小屋」

撮影：GEN INOUE
「SETOYAMA」

「屏風絵の家」

「アーキペラゴ豊中」

提供：坂茂建築設計
「1HrSBシステム」

衣類乾燥機とつくる新しい暮らしの空間

新築住宅にガス衣類乾燥機「乾太くん」を提案する

日々生活を営むなかで、欠かすことのできない家事のひとつに洗濯・乾燥がある。着用した衣服を洗濯機で洗うまでは誰しも同じだが、乾燥の仕方は人それぞれ。天日干しはもちろんのこと、室内で干したり乾燥機を使ったり、外に出てコインランドリーを活用する人も一定数いることだろう。その乾燥機にも、全自動洗濯乾燥機、浴室暖房乾燥機、衣類乾燥機（ガス式・電気式）といった種類がある。今回はガス衣類乾燥機「乾太くん」を活用することで、暮らしと空間の可能性がどう広がっていくのかを探る。

家事の時短化と清潔乾燥

「乾太くん」の魅力は、まずその機能性と快適性にある。ガスならではの80℃以上の強い温風によって、衣類は電気式乾燥機の約1/3の時間で乾燥できる。*1 天候に左右されることなく、1日に何回も洗濯する必要がある家庭でも洗濯をしながら乾燥機を使うことができ、スムーズに仕上げられる。経済的にも優しい。*2

パワー温風で一気に乾かされた洗濯物は、シワも伸びてアイロン掛けの手間が省けるうえに、生乾き臭の原因菌の発育を抑制し、雨の日や花粉の季節、黄砂やPM2.5など大気汚染が気になる日の洗濯も安心して行うことができる。さらに生乾き臭の原因菌を99.9％除去し、外干しでも発生する嫌な臭いを元から防ぐ。*3

「ホームランドリー化計画！」が導く暮らし

高い機能性を誇る「乾太くん」だが、導入することで実際にどのように暮らしが変わるのだろうか。

ひとつには家事の効率を高め、共働き世帯をはじめとする家族を助ける「ラク家事」に繋げることができるだろう。だが2020年、さまざまな社会の変化が起きるなかで、働き方や生活のリズムを見直して暮らしを整えて豊かにしたいという思いを抱く人が増えている。また在宅勤務が増えたのに、部屋干しによってずっと室内がジメジメしたりしないよう、家にいる時間が長くなりがちな昨今では、いかに在宅時間を楽しんで過ごしながら、身の回りを整えていけるかが問われている。

そんな人たちに「乾太くん」が役に立つことを知ってもらいたいと、リンナイは「ホームランドリー化計画！」を打ち出した。「ホームランドリー」とは、「コインランドリー」品質の仕上がり＋憧れの「ランドリールーム」の言葉を掛け合わせた造語。洗濯をして、乾かして、畳んで仕舞う。ひとつのエリアでこの一連の作業を行えることは、家事動線の効率化と合わせて、家族の家事参加にも繋がるという。みんなで協力して衣類を整える空間は、家族のコミュニケーションツールのひとつになり得ると、リンナイは期待を寄せている。

新築時の設置がおすすめ

「ホームランドリー化」の実現を目指すには、いくつかの注意点がある。衣類乾燥機というと後付けでも設置可能なイメージがあるが、リンナイによると「乾太くん」については是非新築時に設置を検討して欲しいと言う。ガス式のため排湿用ダクトを通す必要があり、後付けの設置の場合、手間を要することがあるためである。これらのダクトは屋外へ排出して室内には湿気がこもらないようにするという、快適性を担保する大事な役割がある。はじめから設置する場所が決まっていれば、2階であろうとスムーズに取り付け可能であり、本体上部の排湿用ダクトや排湿トップを前提にして空間や家具を設えることができるだろう。

「乾太くん」と考える新たな空間づくり

これまでの衣類乾燥機は、専用の置き台で洗濯機の上部に設置する方法が主流だった。床面積が小さい日本の住宅において、狭い脱衣室で洗濯機と合わせて2台置きするためには、そうした置き方をせざるを得ないことも多い。ただ最近はランドリールームがゆとりある広さで設計される事例が増えてきた。そのなかで、リンナイは「乾太くん」を床へ直置きすることを提案する。新築住宅の設計時に、洗濯機と隣り合わせで配置し、合わせて洗面台や棚といった造作

衣類乾燥機をスタイリッシュに扱う欧米スタイルの提案。

ガスのパワーで洗濯物をスピード乾燥する。

それぞれ天日干し（左）、全自動洗濯乾燥機（中）、「乾太くん」（右）の仕上がり。

4-5頁写真提供：リンナイ

衣類乾燥機と洗濯機を横並びに設置したランドリールーム。新築であれば、洗面台や棚と一体のデザインで納めた空間づくりの可能性も広がる。

家具と一体的にデザインを施せば、こうした設備機器もランドリールームのインテリアとして空間に取り込んでいくことが可能になる。
欧米をはじめとする諸外国では衣類乾燥機は直置きされることが多い。景観条例から屋外に物干しができないことから、衣類乾燥機も日本以上に普及しているという。現在アジア圏へ販路を伸ばすリンナイは、そうした世界の動きを見据えつつ、円窓の扉として海外販売用と共通のデザインを施している。
海外に倣い、洗濯物は「乾太くん」で乾燥させる。そう決めてしまえば、日本の都市部の住環境では小さくなりがちなバルコニーやテラスも、物干しの要素をあえてなくし、寛げる居場所に特化した場として有意義に活用する。そんな設計手法も説得力を持つのかもしれない。

今こそ見直したい暮らしのかたち

2020年は新型コロナウイルス感染症が蔓延し、これまでと異なる行動様式が求められている。現在、働き方や暮らし方、そして住環境そのものを見直そうとしている人も増えているのではないだろうか。ガス衣類乾燥機「乾太くん」は、決して贅沢品ではなく、家族の生活を365日サポートしてくれるものである。新築住宅を検討しているのであれば、設計時から設置を予定すれば洗濯機との2台置きでも、十分に空間を生かしつつ効率とデザイン性を両立できる。新しい生活のかたちをつくり出したい、そして家族を守りたいと願った時に、高温除菌の機能を持つ「乾太くん」は、きっと一役買ってくれるだろう。（編）

ガス衣類乾燥機「乾太くん」の詳細仕様

＊[1]：8kgの洗濯物を約80分、5kgの洗濯物を約52分で乾燥。
＊[2]：1回の乾燥コストは8kgで102円、5kgで63円。
＊[3]：試験機関：愛知学院大学薬学部　試験対象：モラクセラ・オスロエンシス
　試験方法：菌付着布の生菌数測定。緩衝液中で菌を洗い出し、寒天平板にて培養。
・洗面所や脱衣室などの室内から、ベランダや軒下などの屋外まで、状況に合わせて設置可能。
・前扉の左開き・右開きは、設置場所に合わせて選択できる。
・製品型式：RDT-54S-SV　希望小売価格 ¥128,000（税抜価格）

リンナイ（株）　https://rinnai.jp/lp/kanta/

繊維が根元から立ち上がり、ふんわりとした仕上がりになる。

照明の光に反応する光触媒で抗菌・消臭・分解する無垢材フローリング

光触媒フローリング・壁板「エアー・ウォッシュ・フローリング（ひのき・すぎ）」

(株)日東／日東フローリング(株)
https://www.k-nitto.co.jp/

日東／日東フローリングは、ヒノキ材のフローリング・壁板生産量30年連続日本一を誇る宮崎県都城市の企業である。2017年から発売開始した「エアー・ウォッシュ・フローリング」は、蛍光灯やLEDの光で光触媒が反応し、抗菌・消臭・アレルギー物質（VOCなど）を分解するフローリングとして、これまでに延べ9万坪が出荷された。今回、日東フローリング常務取締役の東宗一郎氏とエアー・ウォッシュ（光触媒）の開発者であるウエルクリエイト代表取締役社長の中原信子氏に、開発の経緯やその特徴についてお話を伺った。　（編）

安心安全な室内環境を提供する

――エアー・ウォッシュ・フローリングを開発された経緯をお聞かせ下さい。

東　今から4年前、中原社長から弊社に最新型の光触媒を採用した塗料があると声を掛けていただきました。これまでも私たちはホルムアルデヒドなどのVOC（揮発性有機化合物）を含まないハードコートの塗装を施してきましたが、最新の光触媒塗料はハードコートの傷つきにくいという部分は残しつつ、室内のウイルスやVOCまで分解するという画期的な技術でした。これはアレルギーのある子どもたちをはじめ、世の中のためになるはずだと、タイアップを決めました。3年前からヒノキやスギの国産材を用いたすべての商品をこの塗料に切り替え、現在は住宅のほか、保育園・幼稚園、教育施設、老健施設、公共施設へ約9万坪分を納品しています。

中原　私自身が幼い頃、アレルギーや小児喘息を患っていて、引っ越すたびに体調が悪くなったり、体育館で咳が止まらない症状などに苦しみました。ある日、それがシックハウス症候群というもので、当時建材にたくさん使われていたVOCが原因だと知ったのです。そんな幼少期の経験から、VOCやカビ、菌を軽減する塗料を開発しはじめました。しかしそれぞれの有害物質に効く塗料をハイブリッドすると値段が上がってしまうので、ひとつの材料であらゆる有害物質をカバーできないかと研究し、たどり着いたのが光触媒です。光触媒は有機物を分解する力を持ちます。菌やウイルス、VOCなどアレルギー物質はすべて有機物ですが、この塗装に光が当たると光触媒が反応して有機物を無害化します。当初は光触媒の技術も未熟でしたが、材料、分散技術、塗料化、塗装技術等の開発を経て、現在のエアー・ウォッシュ・フローリングが完成しました。

室内の光で有害物質を除去

――使用されている最新可視光応答型光触媒とはどんなものでしょうか。

中原　従来の光触媒は屋外用で、太陽光エネルギーによる光触媒反応で外壁の汚れを分解するものが主流です。しかし室内には太陽光が3%程度しか入りませんし、私たちが目指すのは住まいのなかの問題を解決することでした。そこで蛍光灯やLEDなどの弱い光（可視光）にも反応する光触媒を開発しました。フローリングに室内の光があたるだけで、自然に落下・蓄積する有害物質を除去し、空気の浄化に繋がる技術です。

触媒作用で長時間効果が持続

――安全性やコスト等についてはいかがでしょうか。

中原　材料はルチル型の酸化チタンで、化粧品にもよく使われる人体に安全な光触媒を使っています。コストについては、産学官連携研究開発補助事業のため、開発費は値段に載っていません。コストアップを最小限にし、安全で安心な空間が手軽に手に入ることを目指しています。また触媒という特性上、自らが反応する材料ではないので、その機能は半永久的に持続します。長期間、機能を発揮することもコスト面で優しいと言えるでしょう。

東　実際、3年前からハードコートの上にエアー・ウォッシュ塗料を塗布しても、値段を変えることなく発売することができました。これだけの付加価値がついて同じ値段はすごいねと、お客様からも喜びの声をいただいています。

平常時も緊急時も、清潔な床と空気を

――エアー・ウォッシュ・フローリングが今後どのように使われていくことを望んでいますか。

東　私たちは本物の材料と共に健康をお客様にお届けしたいと思い、無垢材に光触媒の塗料を塗ったエアー・ウォッシュ・フローリングを製造・販売しています。今は感染症対策としても抗菌という安心を提供できると考えています。

中原　今は大雨・台風の脅威も迫っていて、九州は先日、体育館や文化施設が避難所として一時満員になりました。そんな時もエアー・ウォッシュ・フローリングがあれば、光エネルギーで常在菌やウイルスを分解し、空気清浄機の役割を期待できます。平常時に安心できる空間をつくることは、非常時の備えにも繋がります。住宅・住宅以外の両方で、アレルギーを持つ人はもちろん、すべての人にこの商品が届いて欲しいと願っています。

（2020年9月7日、オンラインにて　文責：本誌編集部）

2点写真撮影：MIMCRAFT 徳留宇

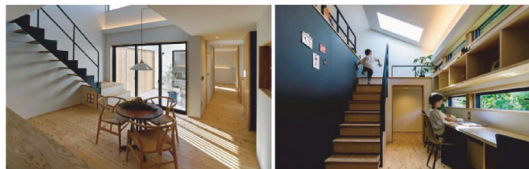



写真2点：MIMCRAFTによる「HouseKz」（2018・左）と「House-HR」（2019・右）。床板にエアー・ウォッシュ・フローリングが使用されている。

ノロウイルスの場合（エンベロープなし）		
照射時間	0時間	8時間照射（1,000ルクス）
エアー・ウォッシュ・フローリング	6,200,000個	100個以下（検出限界値）
インフルエンザウイルスの場合（エンベロープあり）		
照射時間	0時間	8時間照射（1,000ルクス）
エアー・ウォッシュ・フローリング	1,100,000個	830個

抗ウイルス性能試験結果。神奈川県立産業技術総合研究所にて測定。

58 Public Spaces in Tokyo

Cooperative Design for New Urban Infrastructures

豊富なイラストや写真で、東京のパブリックスペースを紐解きます!!

本書は，東京にある魅力的な58カ所のパブリックスペースをまとめた特集号です．東京に数多くあるパブリックスペースの中でも比較的新しく都心部にあるものを紹介し，高密度化した東京でいかにして良質なパブリックスペースが生まれたのか，そのつくられ方や仕組みを紐解きます．立場の異なる関係者が意見を擦り合わせることで，生き生きとした場所が実現されており，さまざまな想いが積み重なった協調型のデザイン（Cooperative Design）が実践されています．58のパブリックスペースの実例を紐解くことで，これからの日本・世界での都市づくりのヒントになるのではないでしょうか．

■誌面イメージ

■誌面イメージ

K11 Art & Cultural Center,
photo courtesy of SO–IL

© 新建築住宅特集2020年11月号／第415号
2020年10月19日発行　毎月1回19日発行
定価2,420円　本体2,200円
振替：00150-6-30658

［編集発行人］吉田信之
［編集長］西牧厚子

［表紙・誌面フォーマットデザイン監修］　K2
［発行所］株式会社新建築社
東京都千代田区霞が関三丁目2番5号
霞が関ビルディング17階　〒100-6017
tel. (03)6205-4380（代表／総務・出版）
(03)6205-4381（編集部直通）
(03)6205-4382（広告部）
(03)6205-4392（写真部）
fax.(03)6205-4386（代表／総務・出版）
(03)6205-4387（編集部・広告部・写真部）
青山ハウス
東京都港区南青山二丁目19番14号　〒107-0062
tel. (03)6455-5596
fax.(03)6455-5583
e-mail　jt@japan-architect.co.jp
URL　https://shinkenchiku.online
［印刷所］大日本印刷株式会社
［取次店］トーハン　日販　楽天ブックスネットワーク
鍬谷　西村

表紙の写真　尾根の屋根
長谷川豪建築設計事務所

CONTENTS

スケールとディテール——住宅を環境に開く思考と挑戦

特集作品12題

記事

連載

CONTENTS

篠原聡子 推薦作品

Thong House
西澤俊理（本誌1906）

敷島のパン屋
藤野高志／生物建築舎（『新建築』1907）

daita2019
山田紗子建築設計事務所（本誌1908）

荏原台地の家
三家大地建築設計事務所（本誌1908）

メガシティの小さな躯体1・2
雨宮知彦／ラーバンデザインオフィス（設計）
岡部明子　エリサ・エヴァワニ（プロジェクト監修）（本誌1910）

吉岡賞について

吉岡賞は『新建築住宅特集』の新人賞として、住宅作品を通して建築設計の新たな展開に大きな可能性を感じさせる新人の奨励のために、その作品の設計者を表彰するもので、1987年より年1回の選考が行われてきました。賞は本誌の母体である『新建築』誌を創刊した故・吉岡保五郎の業績を顕彰して設けられ、故人が設立した財団法人・吉岡文庫育英会の主催により開催されています。
今年も本誌2019年1〜12月号までの間に掲載された住宅作品に加え、『新建築』誌に掲載された住宅に関連した作品（集合住宅など）を受賞対象としました。　（編）

第36回 吉岡賞 結果発表

審査員　篠原聡子　藤本壮介

14〜19頁特記なき撮影：新建築社写真部

藤本壮介 推薦作品

6つの小さな離れの家
武田清明建築設計事務所（本誌1902）

daita2019
山田紗子建築設計事務所（本誌1908）

まれびとの家
VUILD（本誌1910）

シャンティニケタンの住宅
佐藤研吾／In-Field Studio（本誌1910）

審査方法

審査員のおふたりからそれぞれ推薦作品を挙げていただき、その中から1次審査で最終審査に進む4作品を選定しました。去る9月15日に最終審査が行われ、4組がそれぞれ5分のプレゼンテーションと20分の質疑による面談で作品について伺いました。その後、審査員おふたりの協議によって最終的に吉岡賞受賞作品が決定しました。第30回より吉岡賞は1組に授与しています。　（編）

第36回吉岡賞受賞作品

daita2019

山田紗子建築設計事務所

南西側全景。

作品概要

住宅街の三叉路の角地に建つ設計者の自宅兼事務所。多角形の敷地を2分するように、北東側に住居、南西側に庭を配置。庭は、ϕ=48〜60mmの細い鉄管で樹木とバランスを取りながら組み上げ、可能な限り小断面のH鋼のテラスを外部階段で繋いで立体的に構成。テラスや階段、それら支える鉄骨部材、樹木、自転車などによって庭の密度を上げ、住居と街のバッファーをつくっている。

受賞コメント

建築を志してから憧れ続けていた賞です。自分がつくっているものは何なのかと不安が頭を過ることもありますが、大きく大きく背中を押された気持ちです。

daita2019は独立して初めて完成した建築で、右も左も分からず試行錯誤する中、構造や施工で協働した方がたに毎日のように相談し、着想そのものからどう実現するかまで、多くの重要な助言をいただき完成しました。着工してからは現場の職人の方がたと話しては事務所に戻って模型を直すことを繰り返す日々でした。この建築に関わったすべての方、そして忍耐強く私を信じてくれた家族に心から感謝しています。

私はいつも、自分が提案する建築はバナキュラーになり得るだろうかと自問自答しています。この建築をつくっている時も、そのことをずっと考えていました。建築に限らずバナキュラーなものには、その時代にその場所で確かに求められた合理性があり、ストイックでありながら歓びに満ち、かたちを変えながらも受け継がれていくしぶとさがあります。この家は見方によっては非合理的な部分もあると思います。しかし東京郊外の住宅地の角で、建築が自然と共に一体の環境を構築していくことができるのか、そこに3世代の住人がどう暮らすのか、その環境がいかに私たちを優しく包みまた奮い立たせるか、その答えのひとつとしての合理があると考えています。私たちを囲む常識ではなく、明日のバナキュラーに繋がる新しい合理性を提案したい。そのような思いで建築をつくり続けています。

（山田紗子）

水回りのある1階とダイニングテラスと外階段で繋がる物干しテラス。

団欒の場として各部屋への動線の中心に配置されたリビング。

4〜5人が同時に準備できるキッチン。

審査経過

審査員：篠原聡子 × 藤本壮介

今回の1次審査では、審査員のおふたりに2019年の『新建築』『新建築住宅特集』で発表された住宅および集合住宅を読み込んでいただき、それぞれに受賞候補となる推薦作品を挙げていただきました。
審査は2段階として、まず1次審査で最終審査に進む作品を4つに絞りました。その後、各建築家との面談を経て最終審査を行い、2019年の吉岡賞を決定しました。

1次審査

藤本壮介（以下、藤本）　1年分の本誌を通して読んで、多様化、複雑化する建主の暮らしに挑戦的にアプローチする住宅の多さと、その完成度の高さに驚きました。一方で、その巧みさは厄介でもあって、建主の魅力的な個性と裏腹に、いわゆる「建築家の設計する住宅」の枠の中で建築的に遊んでいるだけのように見えるものが大半だと感じました。吉岡賞は、これからの住宅を切り開く勢いのあるものを選びたい。社会からの要請の幅も広がる中で、そのような枠から一歩を踏み出しているかが判断軸になると思います。
武田清明さんの**6つの小さな離れの家**は、新古材の対比や、離散させたヴォリューム配置など、現代のリノベーションの潮流を汲む住宅です。新旧の材を混在させるバランス感覚が優れていて、完成度を高めた徹底ぶりは素晴らしい。山田紗子さんの**daita2019**は、これまでに見たことのない住まいのかたちで、提案の思い切りがよいです。一見乱暴とも取れる内部のつくりが、木材と鉄管の素材の差を繋げています。そうした材の取り合いも含めて、ひとつひとつ手探りで設計を進めた若い建築家ならではの力強さを感じました。秋吉浩気さんの**まれびとの家**は、デジタルファブリケーションを活用した合掌造りの立ち姿が新鮮です。誌面では意匠についてあまり言及されておらず、彼の設計意図は表立っていませんが、誰でも組み立てられる構法やクラウドファンディングによる資金調達など、開発したプロセスによってある程度必然的に定まってくる建築のかたちやそれをよしとする姿勢が、建築のつくり方の原型を感じさせ共感できます。佐藤研吾さんの**シャンティニケタンの住宅**は、建築の手がかりとして、壁や開口ではなく家具や部分から始めてみようとしているのが面白い。謎めいた作品で、家具と建築の間のような佇まいに不思議な魅力を感じました。
篠原聡子（以下、篠原）　私たちの世代が多く手がけた1990～2000年代の住宅と比較して、住宅に求めるものが大きく様変わりしたのだと改めて実感しました。私たちの世代は、それまでの住宅や都市、家族のあり方に疑惑の眼差しを向け、批評性を背負い、切り込んでいく、ある意味肩肘張った側面があります。それに比べて今はしなやかに新たなライフスタイルを実現しようとする建主が育ち、それに若い世代の建築家が協調して、その先に最適解を見出していくような姿勢がある。その中でも、近代から続く形式に疑問を投げかけていたり、新たな可能性に飛び込もうとしている住宅を推薦しました。藤本さんのも含め、今回の推薦作品には核家族のための専用住宅がひとつもありません。やはり時代を反映する暮らし方に応じた住宅が、住宅の概念を更新させていくのだと思います。**daita2019**は私も推しています。都市住宅が街に対してどのように接するかというのは普遍的なテーマですが、ここでは庭を立体的に構成する鉄管のフレームが、都市との緩衝材として機能しています。発想の原点として設計者の母がゴリラの研究者であることが語られていますが、まさに鉄管のジャングルがさまざまな活動を想起させます。三家大地さんの**荏原台地の家**も、接道する階段が独特に作庭され、懐かしくも見たことのないような風景をつくり出しています。山田さんのように2世帯が住まう家族構成とは異なり、成人した複数の大人のための居場所が巧みに設けられており、床のレベル差や、中庭を介することでバラバラにすることと一体にすることのバランスを操作しています。西澤俊理さんの**Thong House**は、ベトナムの都市部で主流のチューブハウスの形式ですが、半屋外のスペースを挿入し、地域性や文化を体現しながら気持ちのよい空間に仕上げています。雨宮知彦さんの**メガシティの小さな躯体1・2**は、ジャカルタ・カンポンチキニの気候や文化、経済性、施工技術などの調査をもとにシンプルに解かれていて驚きました。確かにこうしたスラムでは建物同士の隙間が不衛生に陥りがちです。一方で、提案されたヴォイドがそのまま保たれ、機能しているのかが気になりました。藤野高志さんの**敷島のパン屋**は、パンを焼く釜の上に屋根を架けただけのような即物的な構成と、結果として周辺に居場所が生まれている様がほかにはないものです。
藤本　住宅の未来を切り開くには、人間と建築、人間と場所、あるいは社会と場所など、人間の活動の場としての広い視野が必要です。数年前、海外の建築雑誌の住宅部門で審査員を務めた時に、日本の住宅がほかの審査員から見向きもされず衝撃を受けました。すでに確立された枠の中で、その枠を疑うことなくただバリエーションの差異のように住宅がつくられている感じがあって、本質的な提案に繋がらないと見られてしまっていたのです。歴史の中では時として、パワフルに枠組みを壊したり拡張したり無化したりしながら新しいものが生まれる。その瞬間にはとてもワクワクする建築が現れる。一方で、一度枠組みが確立してしまうと、その中でいくら差異を競っても本質的な面白さにならない。そうした意味では、**6つの小さな離れの家**は、器用すぎるがゆえにスタイリッシュにも見えて、枠の中でのみ研ぎ澄まされている感じがするので、今回の最終審査に残すべきなのか疑問に思いました。
篠原　そうかもしれません。リノベーションとして、古材の取捨選択の塩梅が見事ですが、誌面を通して迫りくるような暮らしの切実さを感じられませんでした。空間が綺麗すぎてフォトジェニックに見えてしまうがゆえの誤解なのかもしれませんが。**シャンティニケタンの住宅**は、竣工時の写真には不思議な魅力があるけれども、人が暮らし始めた途端に普通の住宅に見えて、佐藤さんの実践が生活レベルにまでに落とし込まれていないように思います。

6つの小さな離れの家

daita2019

まれびとの家

提供／In-Field Studio
シャンティニケタンの住宅

藤本　**メガシティの小さな躯体1・2**は、ヴォイドが空間として効いているのかが写真からだと分かりづらい。白く綺麗に塗られてるため、内装との差がなくなっている。既存のまま活用できるようなガイドラインを残していれば、スケルトンインフィルの躯体の中に、インフラ、内装、ヴォイドの構成が明確に見えてきたのではないでしょうか。ですが、現地の立地特性から導かれたプロトタイプが、今後どのような展望をもって転用されるのか、会って聞いてみたいですね。

篠原　**まれびとの家**も、細かい材に分解する構法自体は施工性の観点では有効のようですが、建築家が中山間部に入り込んでこうした試みをすることで、今後の建築の枠組みをどのように広げることができるのか話を聞いてみたいです。**daita2019**はふたりとも推していますが、2世帯の関係性はシェアハウスのような空間で、家というものを手探りで探し当てようとしたプロセスを聞いてみたいと思います。

藤本　**荏原台地の家**は、僕も気になっていました。これまでに見たことのない道路面の構えに対して、奥の棟は一般的な住宅の形式に収まっているのが気になりますが、住宅地にさまざまな異なる居場所が展開されているのはとても面白く、住宅の所有の問題にも提案があり、詳しく聞いてみたい。**Thong House**は、住まいとしての質が高く、気持ちよさそうなのですが、同じベトナム内の西澤俊理さんが設計した「チャウドックの家」（本誌1711）と比べると弱いと感じます。**敷島のパン屋**は、プログラム自体は面白いのですが、屋根面から延長された垂木をはじめとして、軒下がそれほど心地よく見えないのが気になりました。

篠原　同感です。それでは、**daita2019**、**まれびとの家**、**荏原台地の家**、**メガシティの小さな躯体1・2**、この4作品で最終審査をやりましょう。

最終審査

面談審査通過作品
「daita2019」山田紗子
「荏原台地の家」三家大地
「まれびとの家」秋吉浩気
「メガシティの小さな躯体1・2」雨宮知彦

藤本　1次審査の時は、都市や社会から住宅を考える雨宮さんの**メガシティの小さな躯体1・2**と秋吉さんの**まれびとの家**に対して、比較的正統な住宅建築の山田さんの**daita2019**と三家さんの**荏原台地の家**、という対比を感じていたのですが、直接話を聞いてみると、そう単純でもなくて面白かったです。まず、三家さんからは、懐かしいともいえるような「建築家の言説」を聞いた気がしました。使う言葉やロジックがこれまでの建築家の延長にあるようで、実際つくったものとの間にズレを感じました。雨宮さんにも同じことを感じて、ジャカルタのスラムというユニークな都市のコミュニティに根差していますが、住宅スケールのアイデアが都市に広がっていく、王道のマスタープラン的な思考です。それに対して、秋吉さんと山田さんは、建築家というより社会の一員としてそれぞれが向き合ってるものから建築の話をしていると感じました。雨宮さんと三家さんが従来の建築家的で、秋吉さんと山田さんは当事者的というか。

篠原　たしかに**荏原台地の家**は、このファサードの不思議さとは裏腹に、建築家の言語できっちり説明されていましたね。小さなヴォイドを発見しながら都市の中にうまく配置をしていく柔らかさがある一方で、いちばん気持ちのよい階段の上に閉鎖的なヴォールトのヴォリュームを置いてしまうのか？という不思議さ。普通であることに抵抗しなくてはいけないという感覚に、建築家としての態度を感じます。一方で、**daita2019**は大きな課題に向き合うというよりも、試行錯誤しながら気持ちのよい暮らしや環境をつくり出すしなやかさがあると思いました。同じくしなやかなプロセスは**まれびとの家**にも感じました。自ら開発した技術で家具をつくっている間に、その可能性と面白さを次々と発見し、皆で共有しているうちにいつの間にか家をつくってしまった、というような。今社会が抱える課題や、建築ができることの可能性はものすごく多様ですが、秋吉さんはプロセスの中でそれを発見し続けているのだと話を聞いて分かりました。**メガシティの小さな躯体1・2**は、直面する問題が居住改善やインフラ整備など明らかなので、今回の発見から次にどのように展開していけるのか。都市に点を打つようにプロジェクトを挿入していくことから何を変えていくのか。都市スケールで展開しようとするなら、もう一歩踏み込んだ戦略が必要ですね。

藤本　その指摘はすごく面白いですね。**荏原台地の家**は、建築的な思考の枠組みが強すぎるのか、いろいろな場所を自由につくっているように見えて、俯瞰的な視点ゆえの不自由さが垣間見えてしまう。その不自由さが多様な豊かさの中に、硬いしこりのようなものとして残っている感じがします。**メガシティの小さな躯体1・2**も都市の中のツボを押すといいながら、当事者性よりも俯瞰的な大枠を与えて成立させようとしています。両者とも元を辿ると設計図を書く前に最初に頭で考えた枠組みがあるようです。**daita2019**と**まれびとの家**は、その中に入り込んで試行錯誤し、葛藤して突き進んでいるうちに、道が拓けていく。その違いはありますね。

篠原　プロセスの過程で判断を重ねているので、後者のふたつの住宅は、かたちはできていてもまだ途中である感覚があります。

藤本　今回の吉岡賞をどういう賞にするべきかに繋がりますが、葛藤しながら手探りで進んだ結果、住宅の枠組みを打ち破っているような、そんな新しさが、方法だけではなくて空間の質やあり方にも現れている後者のふたつはとても新鮮です。

篠原　そうですね。今、コロナ渦の悲劇的な状況にあって実感するのは、課題を自分なりに探りながら、立ち止まらずにつくり続けていかなくてはならないということです。新しい建築の探り方はそんな状況下でも求められているように思います。

藤本　その観点で見ると、**メガシティの小さな躯体1・2**は、俯瞰的な枠組みを与えることに止ま

荏原台地の家

撮影：大木宏之

Thong House

撮影：NUWALARUPA

メガシティの小さな躯体1・2

敷島のパン屋

らず、当事者的な視点、その状況の一部であるという視点をもつことで、もっと可能性が広がる気がします。都市あるいはストリートスケープと建築の境界は曖昧になり始めているので、そのあたりも含めて現地の人と協働していけると、一気に状況を変える可能性があります。それはジャカルタだけではなく、世界中の既存の都市に建築家として介入していく時のヒントにもなりそうです。

篠原　一緒につくっていける素材の発見があると面白いのではないでしょうか。雨宮さんが長い時間をかけて現地に通い、活動を続けていることは称賛されるべきですが、どこで建築家の手を離すか、何をどのように進めると効果的に状況を変えることができるか、この辺で手法を整理する必要がありそうです。荏原台地の家はある意味、かなり新しい景色をつくり出していますね。プログラムもよく解けていて、住まい手のように仕事も落ち着いた大人たちのための家をつくる時に何を考えるべきかにも答えている。分棟にして居室を離すことで、いろんなライフステージにおける柔らかな住み替えが可能になることが分かります。そのあたりは巧みですね。

藤本　三家さんは、この階段の風景をつくっただけでも何かを成し遂げていると思います。全体の構成も含めて家としてとても面白い。ただ、巧みなだけに、何かを突破しようとするような切実さがそれほど感じられませんでした。話を聞いて、ある時には建築的思考は建築的言語によって束縛されるのだと感じました。感性としては自由なものを感じ取っているにも関わらず、それを建築に落とし込む時に、彼の思考や使う言語が制限をかけている。建物も要所要所でどこか堅い。全体のコンセプトがとても柔軟でさまざまな場所が巧みに展開しているにもかかわらず、意識的に何かをブレイクスルーしようとしているというよりも、自分の使う言葉に絡め取られている感じを受けました。

篠原　確かに、もっとも気持ちのよい場所に閉鎖的な空間を配置したり、空間に大きく影響する天井の梁の扱いを一律にしていたり、いろんなことができそうなのにあえてその部分を手放すような不自由さを感じます。

藤本　そういう意味では、建築家としてもぎりぎりの状況にいながらも、なんとか突破したというリアリティの強さがdaita2019とまれびとの家には現れています。秋吉さんは、デジタル木工機械「ShopBot」の普及から家具的なものづくり、コミュニティに関することまで非常に広い視野をもって取り組んでいます。ただ、最初の一手となるこの家の架構が、試行錯誤しているうちに教会のようにとても美しくでき上がった。僕には、その美しさに自らが絡め取られて建築への思考が停止してしまったように見えました。佇まいも内装も素晴らしいのですが、ShopBotを使って2次部材まですべてを切り出して構成するくらい、最後まで当事者としての徹底さを見せてほしかった。

篠原　この建築単体が今までないような生活を生み出すかというと、そういうイメージではありません。材料の調達に始まる彼が活動するフィールドを含めた社会的なものづくりの仕方という点をセットにして評価をするべきものですね。

藤本　まれびとの家は合掌づくりでしたが、今後は自由に木材を刻めるからこそ可能となる、従来のタイポロジーにとらわれない次元での建築ができるのではないでしょうか。まだまだ可能性を感じます。daita2019は、庭に組まれた単管と室内をつくる木の部材の間の関係を組み立てていくようなつくり方で、個々の小さな発見とそれにひとつひとつ対応していく忍耐力が見えます。だからつくり出されたものが建築家としての全的な関わり、つまり頭でとらえる枠組みだけではなく、そこからこぼれ落ちるような、あるいは互いに相反するような状況をすべて飲み込んでいくような、そういう本質的な複雑さを備えていて迫力がある。人間の住環境のある種の本質をついているし、新しいタイポロジーになっているのはすごい。頭で考えているだけではこの奇妙な総体はつくり出せないと思います。

篠原　建主でもある山田さんは「好きじゃないと住めない」といっていましたが、庭の樹木の手入れをして、変化していく環境に日々付き合っていく覚悟がないとダメな家であるということが分かったのも面白かったです。本来住宅というのは、住む人と建築のやりとりの中に佇まいがあるのだとすると、daita2019はそれを前提として生まれたものといえます。新しい半戸外も、亜熱帯東京の風景とでもいうのでしょうか。いろいろなことをここでしたくなりますね。内部空間もよい意味で奇妙なことになっていて、いわゆる2世帯住宅らしくありません。発表時の解説でゴリラの生態について触れていますが、ゴリラは群で動きます。この住宅の間取りにも、家族を群としてとらえながら、同時にそれぞれがある距離で配置されている。ただ、接地階レベルが目線で感じる街並みとなるので、もう少し楽しげに見えてもよいと思い、そこは気になりましたが。

藤本　全体像が見えていない状態で、その状況なりの何かを引き受けて何かをつくり出していく。これは本当に大変な作業ですが、現代社会が抱えている問題に建築として向き合うには、こういうタフさが必要になると思います。試行錯誤の中から見つけていく作業に、現実の複雑でややこしいものと取り組み合った建築家だからこそもち得るしなやかさとたくましさを感じます。

篠原　建築家はただこれからの建築を探っていればいいのかっていうと、そうではない。特にこのコロナ禍は被害が可視化されづらい中、孤立する自殺者は増えている。日々生活をする中で、どうやってご飯食べのか、寝るのか、誰とどんなふうに過ごすのか、疑問をもって暮らしを前に進める住宅を具体的に提示するべきで、これまでの枠組みそのものを疑って、さらには変えていく力が求められていると思います。daita2019にはその力を感じます。

藤本　建築をつくる方法は多様化していますが、ひたすら模型をつくったり、現場に足繁く通うことでしか生まれてこないものは必ずあります。当たり前のようですが、それを実感させてくれる感動が今の時代に再認識すべき価値なのだと思います。とにかくつくり上げるしぶとさ、無意識ながらにそれをやり遂げたことが体得した本能的な執念のようなものを、豊かな住宅建築として結実させた稀有な瞬間なのだと思います。

篠原　それではdaita2019を第36回吉岡賞に決定しましょう。

(1次審査：2020年8月24日、面談・最終審査：9月15日「新建築社青山ハウス」にて　文責：本誌編集部)

総評

篠原聡子

日本ほど、面白い住宅に出会える国はないのでないかと思ってきた。歴代の吉岡賞を振り返ってみれば、日本の住宅建築はひとつの世界に誇れる文化ですらあると思える。そこには、千利休よって大成された茶室建築のような、2畳の小間に大宇宙を見るような高度な抽象性をもった世界がある。小住宅の名作、安藤忠雄の「住吉の長屋」(1976年)は、長屋というよりは茶室であり、数寄屋だったと思う。場所の諸条件をキャンセルして成立する完成された内部空間をもつ。一方で、日本の白川郷の合掌造り、中国の円楼やヤオトン、トルコのカッパドキアのような伝統的な住まいは、独自の風土を背負った形態をもち、場所から切り離されたモダニズムの住まいがもち得ない力強いものがある。数年前に調査で訪れたミャンマーのインレー湖には、水上住居からなる集落があった。木造の高床式の簡素な住宅が主で、水面には船着き場と魚の養殖池が組み込まれ、湖上での生活を体現していた。そうした住居を目前にすると、住まいとは、地形や気候など自然条件、そこに育まれた文化などの場所の特性を明らかにするものだと得心する。

2019年の作品の中から、吉岡賞の候補として取り上げたものを改めて振り返ると、住まいがそもそももっていた場所との関係を強く感じさせるものが多かったように思う。2次審査のプレゼンテーションには残らなかったが、西沢俊理さんの「Thong House」は、豊かな緑に囲まれ、ホーチミンの空気が感じられる空間であったが、その意味では、「Binh Thanh House」(2013年)の方がよりホーチミンの風土や生活とシンクロしていたように思う。実際、私が何度か訪ねて実感していたからかもしれないが。ジャカルタの「メガシティの小さな躯体1・2」は、カンポンの過密な状況を改善しつつ、通りを拡幅するのではなく、背面にヴォイドをとって住居の居住性能を上げようという、単なるスラムの環境改善ではなく、そこにある濃厚なコミュニティをも引き受けた提案であった。このふたつは、たまたま東南アジアの都市につくられたもので、立地や気候風土の特殊性が建築にフィードバックされやすいというアドバンテージもあるが、ホーチミンでもジャカルタでも、急速な経済発展によって一般の人びとの生活がエアコンで管理された高層のコンドミニアムと大型ショッピングモールの中に飲み込まれようとしている中で、やはり、場所の風土や文化を体現する住まいは価値あるものであるはずだ。「まれびとの家」は、富山の山村にあって、その木材を使用し、積雪地帯に相応しい合掌造りに範をとったような形態も、やはりその場所と密接な関係をもち、素材、構法、形態が一連となったプログラムは単一の建築を超えて評価できるものだと思う。しかし、東京の、しかも良好な住宅地の中で、そうした場所そのものを体現するような建築といわれるとかなり難しい。「荏原台地の家」は、武蔵野台地の東端という地形に反応してその尾根先に階段を突き出して、結果として通りに対して独特な表情をつくり出している。「daita2019」の解説にはゴリラの森の話が出てくるが、もしこれがゴリラの森にできていたのであれば、これほどの衝撃を受けなかっただろう。2次審査で山田さんは、「実際、この家と付き合っていくのは、好きでないとできません、生い茂る植物を手入れし続けないといけないので」と話しながら、雑誌掲載時の写真より、はるかに樹木が鬱蒼とした写真を見せてくれた。これは、新しい世田谷のバナキュラー建築であり、それは人が手をかけ続ける楽しみを存分に想像させてくれる、なんとも豊かな住まいである。

藤本壮介

「daita2019」は、住宅として、建築として、圧倒的な迫力をもった名作住宅だ。しかしそれを言葉で説明するのはなかなか難しい。意識的にか無意識的にか、この住宅は建築が明快な何かに安直に回収されることを周到に避け続けている。設計者はこの住宅を、安易に方法化、概念化、図式化、スタイル化、言語化、ダイアグラム化、写真化せず、常にその奥にある、本当に重要なもの、つまり建築が総体として、圧倒的な統合性をもって立ち現れる様を見極めようとして模索している。その試行錯誤がひとつの住宅というかたちをもって実を結んだのだ。

敷地や家族の状況から始めて、少しずつ、手探りで、その統合の試行錯誤は始まったのだろう。庭と住宅を大きな構成として分ける、と決まったと同時に、両者を繋ぎ合わせる作業が始まる。庭と家屋の構造を異なるものとしたと同時に、それらの構造が共鳴し合うようにスタディが始まる。部屋を分けながら、繋がりを模索する。ディテールや素材が、常に意味をもった先から意味を失い超えるように検討される。そのような作業が、構成から概念、素材、納まり、使われ方に至るまで、数え切れないほど行われたのではないかと想像する。その無数の手探りの繰り返しは、僕が上に書いたように意識化し方法化しながら行われたのではないはずだ。意識化した直後にそれを否定するかのように模型をつくり続ける「手」と、偶然による「現実」の介入を許し、方法化したと見えた途端に、その方法を無化するような素材や収まりを試していく。意識と手と刻々と変化していく現実の間をただひたすらに何度も行き来して、それらが溶け合った先の何かが生み出される。そのようにしてしかこの住宅は生まれなかったのではないだろうか。すべての概念化を超えたところから建築の真の豊かさが始まる。この家は、本当の建築だけがもちえる、真の統合性を獲得している。

そしてその統合性とは、建築において、本質的で圧倒的な多様さを生み出す。住むことの喜びを受け止め反響させる多様さがここにはある。それは概念や方法からだけでは決して獲得されないものだ。だからこの講評は方法を評価しながら、同時にこの場所の質を称賛している。この住宅がもつ、複数の人間(家族という概念化すら超えてしまっている)が、さまざまに蠢きながらこの場所に住まう、その夢のような、同時にどこまでもリアルな状況は、そんな手探りからのみ生まれるものだろう。この家が通りの先に、森の始まりのように、家の足跡のように、群れの気配のように、子供の遊びのように、構造の影のように、そして生き生きとした樹木が家具となるように立ち現れる様は、その複雑さと明快さの終わりのない脈動ゆえに、都市という人間の群れの住む場所の、新しく同時に時間を超えた風景をかたちづくっている。この家は建築というもの、つまり人間というものに、ひたすら誠実につくられた場所なのだ。

読み返してみて、ずいぶんややこしい文章になったが、それはこの家が言語を超えているからだ。4次元を3次元に投影するように、言語化や概念化を超えたものをそれに落とし込もうとすると、どうしても煩雑になる。Aであるといった先からAではないといわなくてはならない。しかしこの家においては、その矛盾は軽々と建築という総体の中で共存し、超えられている。それが建築の真の豊かさであり、この複雑な時代に建築に希望をもち得る理由なのである。

特集

スケールとディテール

住宅を環境に開く思考と挑戦

それぞれの環境に即したスケールとディテールには、建築家の発想と譲れない一線が見えてくる。この特集にはその意図を込めました。
住宅のディテールの原点は、風雨から建築を守り、住まい手が使いやすいような工夫をすること。それをさまざまなスケールと共に考えることで、いかに美しく環境に応答したかが見えてきます。今号では、設計条件やプログラムを追って建築を理解する道筋ではなく、スケールとディテールに注目し、それが決定された背景として存在する建築の全体像と、建築家がどんな挑戦をして思想したのかを浮かび上がらせます。
地域や規模、表現のスタイルも違う住宅について、それぞれの空間を表現するスケールとディテールをいちばん示している図面を、建築家の言葉と共に掲載します。現代の住宅は複雑で多様な背景がありますが、スケールとディテールという建築を決定づける極めて重要であるものをそれぞれの建築家がいかに思考しているか、その挑戦を見ていただきます。（編）

作品12題

重くて柔らかいマッシブホルツの屋根

尾根の屋根
長谷川豪建築設計事務所

喧騒を離れ風景を享受する光学ガラスブリック

オプティカルグラスのリヤド
中村拓志＆NAP建築設計事務所

土地を切り拓き住処をつくる

美杉の舞台
大室佑介／大室佑介アトリエ＋高橋一浩／木神楽＋沓沢敬

意識を本の中へと誘う3次元曲面

森の図書館
三井嶺建築設計事務所

豊かな自然を享受する正方形平面

大原の家
森田一弥＋小寺磨理子／森田一弥建築設計事務所

環境を受け止める凸凹状のヴォリューム

ODYSSEY
椎名英三＋椎名祐子

職人の技を結集し風景をつくる

月明と数寄
川口通正建築研究所

豪雪地帯で四季を楽しむ

魚沼の家
伊礼智設計室

ヒノキと伝統技術を用いた1坪の小屋

船頭小屋
城戸崎建築研究室

多様な場と距離感をつくり出すHPシェル

タープ
加藤渓一／スタジオピース＋HandiHouse project

多様な居場所をつくる建築と家具

西浦の家
小泉誠

3方吹抜けを実現する吊り構造

House IT　三方吹抜けと密度
神谷勇机＋石川翔一／ 1-1 Architects

尾根の屋根

Roof on a Ridge
長野県

長谷川豪建築設計事務所
Go Hasegawa and Associates

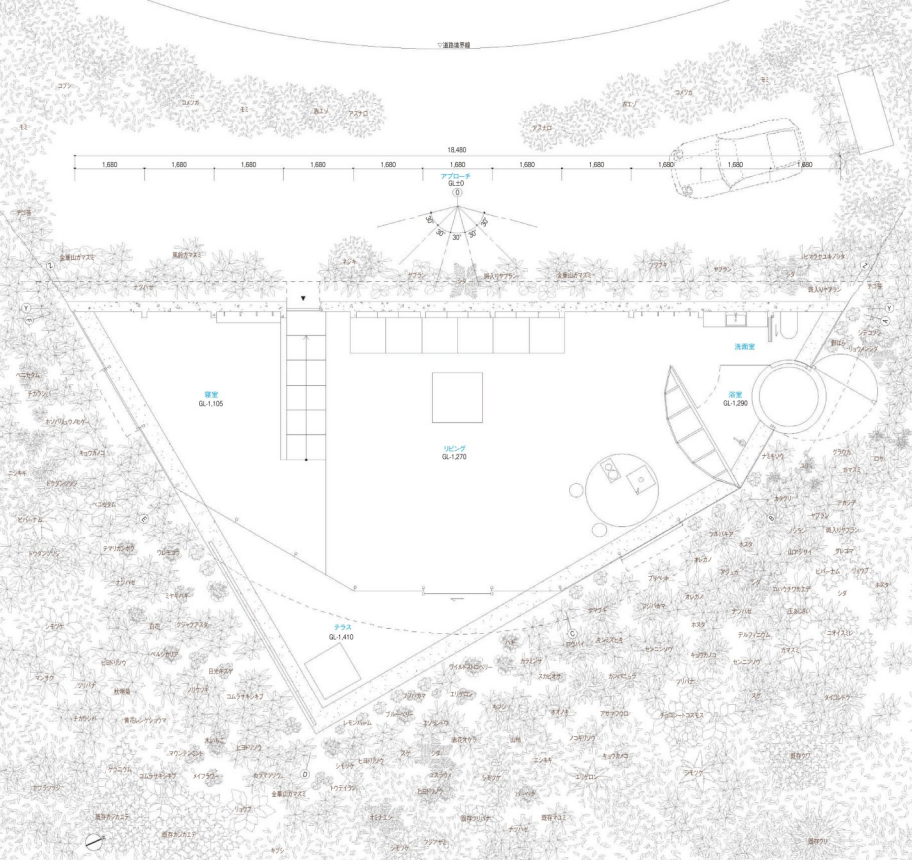
西側外観。東側を急斜面、西側をヘアピンカーブに面した平地に建つゲストハウス。西側の軒高をGL＋779mmと低く抑えた三日月形の屋根が山並みに向かって開くように架かる。最高高さはGL＋2,485mm。

南西側鳥瞰。尾根の突端に建ち、約270度のパノラマビューを得られる。

左手にテラス、右手にガラス越しにリビングを見る。前面道路から1,270mm下がった場所に、マッシブホルツのどっしりとした屋根に覆われた空間が広がる。斜面側の5面は全面ガラス張り。基礎梁は外のテラスの腰掛け（高さ615～635mm）や室内の窓際のベンチ（高さ465mm）となる。

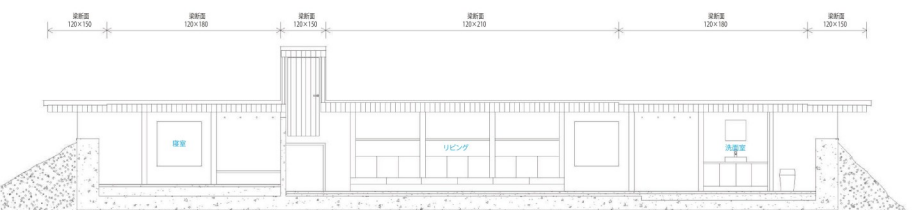
リビング。マッシブホルツの屋根は、幅130mmのリブが1,680mm間隔で付いた洗い出しのRC壁から張り出し、リブと同じ間隔で立てられた50mm角の鉄骨柱で支えられる。床はコルクタイル。テラスの床は寝室の色に合わせた無機顔料を混ぜたモルタル。

左手に寝室、右手にリビングを見る。コンクリートのリブが身体的なスケールをつくり、その間（w1,550mm、d150mm）に棚板やソファを設えている。コンセントやスイッチは、手摺りやソファの側面に設置されている。

浴室。半円の蓋がついた扉を外側に開くことで浴槽の半分が露天風呂となる。アルミパネルの壁に風景が映り込む。

配置平面図　縮尺1：100

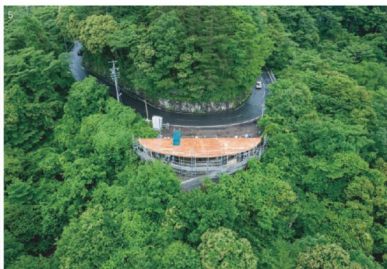
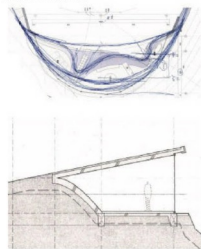
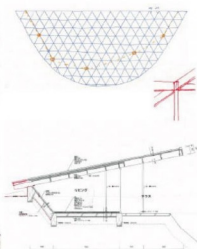
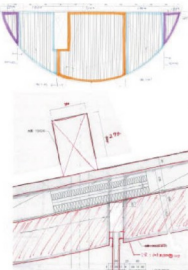
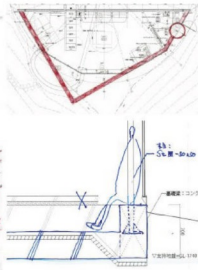
Space in Detail
重くて柔らかいマッシブホルツの屋根

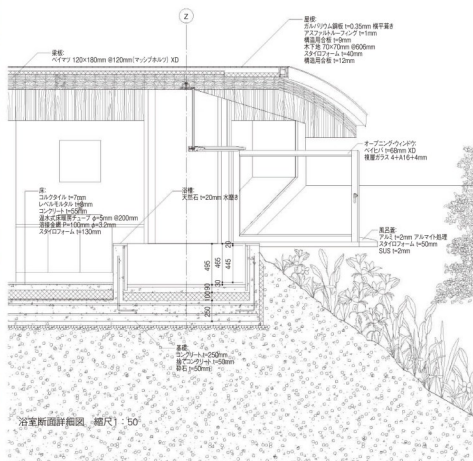
梁断面 120×150　梁断面 120×180　梁断面 120×150　梁断面 120×210　梁断面 120×180　梁断面 120×150

寝室　リビング　洗面室

断面図　縮尺1：100

三日月形の屋根をしたゲストハウスの計画。開口部に沿って柱を配置し、相対する地下壁を支持材と考えるとそのスパンは0mから6.8mまで変化する。一般的な木造のように通直材を交差して並べるにはいささか不合理なかたちのため、一方向に120mm幅の木梁を並べるマッシブホルツ構法を採用した。スパンの変化には、梁成を対応させ150mm、180mm、210mmと切り替え、下端を揃え天井材としている。木材は幅方向に縮みやすく、乾燥の度合いが関係するため、工場、現場建て方時、サッシ取り付け後、とそれぞれで含水率を調査し動きを観測することとした。竣工時12%程度の含水率でも季節によって変化し、木材の伸び縮みが想定されるため、その動きが顕在化する端部には、変位を吸収するディテールを採用している。（大野博史）

1〜3点提供：長谷川豪建築設計事務所

施工風景。 1・2：躯体に屋根を架ける様子。 3：リブと屋根材の中心を合わせる。 4：束ねた木材が曲線を描く。 5：屋根の施工後。

設計プロセススケッチ

2019年3月8日
（屋根の突端を拡張するRC屋根）

2019年4月22日
（60度グリッドの木造屋根を擁壁の上に載せる）

2019年6月11日
（梁を束ねたマッシブホルツの屋根）

2019年9月28日
（鉄骨柱の柱脚の固定度を上げる逆梁ベンチ）

地中に埋まった浴槽では、植物に囲まれた中で入浴を楽しむことができる。

浴室断面詳細図 縮尺1：50

尾根を身体化する屋根

山の尾根の突端に建つゲストハウスである。絶景のパノラマビューがある恵まれた場所だが、広い敷地のほとんどが急斜面で、眺望や予算を鑑みると建てられる場所は敷地上端の道路際に残された僅かな平地に限られる。その一方で、ヘアピンカーブの道路際は車の騒音に晒されるというジレンマがあった。こうした条件の中で、尾根の突端にどのように人間の居場所をつくることができるか。

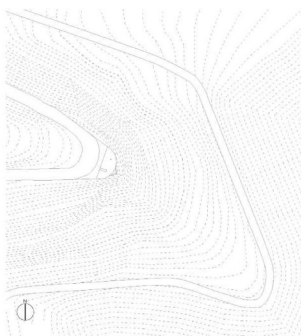
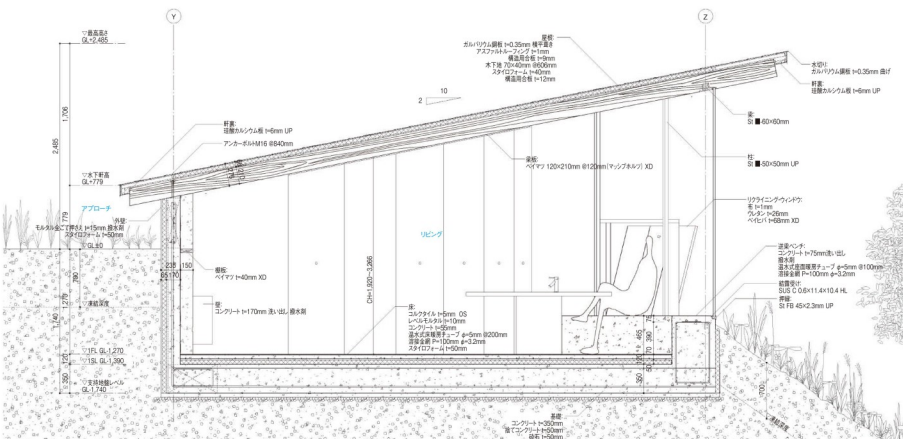
道路レベルの尾根の突端を谷側に引き伸ばすように屋根をつくり、道路からのプライバシーや騒音の影響を受けにくい断面を考えた。放物線を描く尾根の等高線を延長する、三日月形の片流れ屋根。初期案は遮音性を考えてコンクリート造の屋根としていたが、ただ強固なだけのシェルターはこの環境にも人間の身体にも硬すぎて相応しくないように思えた。そこで音の透過損失を計算しながら木造の屋根をスタディし、梁材を隙間なく束ねて板状にするマッシブホルツ構法によって重さと柔らかさを両立する屋根を考えた。道路側の軒高は腰の高さ程度に抑えられた。

絶景が広がる谷側は、当初は床から天井までのガラス張りにしていたが、支持地盤および凍結深度まで下げていた基礎梁を逆梁にしてベンチにすることで開口回りに身体的な拠り所をつくった。さらにそれを鉄骨柱の根固めに利用して固定度を上げることで、50mm角の華奢な柱のプロポーションを実現した。また尾根の突端の向きが道路の標高より下のレベルで30度ほど右に捻れていたことから、その方向にベンチの先端を追従させた。尾根の捻れは三日月形の屋根と逆梁ベンチの幾何学的なズレに置換され、そのズレはテラスになった。

日本語の「屋根」は、家全体を示す「屋」と、大地にしっかりついていることを表す接尾語の「根」からなる。つまり大地に根付いた家＝竪穴式住居そのものを表していたものが、壁や柱によって地面から離れてからもなお屋根と呼んでいるのだという。それに対し英語のroofの語源である古英語hrofは、屋根のほか空や天を意味していた。「屋根」が西洋のroofと出自が違うことは明らかである。

屋根を基礎に直接載せる構成は、冒頭に書いた敷地条件から導かれたものだとはいえ、やはりどこかプリミティブな建築の様相を見せる。このところ地面と屋根の関係から建築を組み立てるプロジェクトが続いているのだが*、これは自然をその下になだれ込ませる「かつての屋根」の可能性を再考する試みといえるかもしれない。

パノラマビューは確かに爽快だが、視覚的にはむしろ自然が遠くに感じられるせいか、しばらくすると慣れてしまう。逆梁ベンチだけでなく、尾根の突端を下りていく階段とテラス、尾根に沿って流れる風を捕えるダイニングの「リクライニング・ウィンドウ」をはじめ、すべて異なる開き勝手の窓などは、さまざまな尾根の体験を身体化するデバイスのようなものだ。遥か彼方まで連なる大きな自然が屋根の下になだれ込んで身体に繋がり、自分が山の一部分になったように感じられる。視覚だけでなく全身的な感覚で自然との繋がりを実感できる屋根＝大地に根付いた家を考えた。　（長谷川豪）

＊土工事で生じる残土を住宅の中央に盛って地面を屋根に近づけたり（「Villa beside a Lake」（本誌2008））、あるいはこのゲストハウスのように基礎に屋根架構を直接載せる構成は現在進行中のニセコのプロジェクトでも試みている。

配置図　縮尺1：2,500

断面詳細図　縮尺1：50

玄関から階段越しにテラスを見下ろす。尾根の突端を下りていくような体験。

キッチン。カウンターテーブルは制作で、天板はリノリウム。背面の収納はアルミパネル。

尾根の屋根
所在地／長野県
主要用途／ゲストハウス

設計
長谷川豪建築設計事務所　担当／長谷川豪
　野崎俊
構造　オーノJAPAN　担当／大野博史
　中野勝仁
外構・造園　Parsley＋オリザ
　担当／宇津木英俊　藤原駿郎
施工
竹花工業　担当／藤巻英之　池田秀二
　水上幸治
木製外部建具　アルス　担当／高橋風人
設備　アクアテック　担当／上原聡
電気　柳沢電気　担当／柳沢宏樹
プレカット　斎藤木材工業　担当／斎藤淳一
　吉田将宜
板金　石田板金工業　担当／石田衛
塗装　望月塗装　担当／古越司
内装　岩野商会　担当／平岡博幸
家具・内部建具　丸山木工所
　担当／丸山和幸
外構・造園　Parsley＋オリザ
　担当／宇津木英俊　藤原駿郎
　小島植物苑　担当／小島久典
構造・構法
主体構造・構法　鉄筋コンクリート造＋木造
　一部鉄骨造
基礎　直接基礎
規模
階数　地上1階
軒高 2,072mm　最高高さ 2,485mm
敷地面積　2,029.1m²
建築面積　94.6m²
　(建蔽率4.67%　許容30%)
延床面積　92.7m²
　(容積率4.47%　許容50%)
　1階　92.7m²
工程
設計期間　2018年11月〜2019年11月
工事期間　2019年12月〜2020年9月
敷地条件
地域地区　第1種低層住居専用地域
　法第21条区域
道路幅員　西7.68m　駐車台数　2台
外部仕上げ
屋根／ガルバリウム鋼板 t=0.35mm 横平葺き
外壁／モルタル金ごて仕上げ 撥水剤
開口部／木製外部建具 XD
外構／浅間砂利敷き
内部仕上げ
リビング　寝室　洗面室　トイレ
床／コルクタイル t=5mm（東亜コルク M-5025）OS
壁／コンクリート 洗い出し仕上げ 撥水剤
天井／ベイマツ t=150〜210mm XD
厨房機器／ IHクッキングヒーター（リンナイ
　RKD321G11S）
シンク水栓金物／混合水栓（フォンテトレーディ

南側夕景。建物と周囲の木々を繋ぐように植栽が植えられている。

ング BX-5205）
家具／Artek stool60（スツール）chair66（チェア）

浴室

床／バスコルク t=7mm（東亜コルク BA-7）
壁／アルミパネル t=2mm 複合皮膜処理
天井／ベイマツ t=150〜210mm XD
シャワー水栓金物／シャワー混合水栓（フォンテトレーディング TX-4230）

設備システム

空調　換気方式／第3種換気
　　　その他／温水式床暖房
給排水　給水方式／水道直結
　　　排水方式／浄化槽
給湯　給湯方式／石油給湯器

撮影／新建築社写真部

ベンチの座面と地面が同じレベルにあり、植物が身体の近くに感じられることを活かした植栽計画とした。朝日が差し込む寝室の前には鳥の好物である木の実が実る植物（ニシキギ・ナツハゼ・マンサクなど）、テラス周辺には摘み取り食べることができる植物（ブルーベリー・ワイルドストロベリー・レモンバームなど）、寄りかかり長い時間寛ぐことができるリクライニング・ウィンドウの前には木陰をつくる植物（ツリバナ・ロウバイ・ヤマブキ・コハウチワカエデなど）、オープニング・ウィンドウを開けると露天風呂になる浴室の前にはよい香りのする植物（ノシラン・ユリ・ヤブラン・野ばらなど）、車通りが多い道路側には背の高い常緑樹（アスナロ・モミ・コメツガ・アカエゾなど）をそれぞれ植えることで、各面の居場所を個性づけた。（長谷川豪）

西側前面道路から見る。

オプティカルグラスのリヤド

My-riad of OpticalGlass Bricks
東日本

中村拓志＆NAP建築設計事務所
Hiroshi Nakamura&NAP

西側外観。2面接道の敷地に建つ2世帯住宅。光学ガラスブリックの壁から中庭の光が外に漏れ、内外の緑が透過して連続する。西側外観は高さ3,100mmまでブリック、その上に4,600mmまで光学ガラスブリックを積み上げている。光学ガラスブリックとブリックはそれぞれ、111.5mmと50.75mmの2種類の高さのものを組み合わせることで、リズミカルな表情とした。

2階アプローチホールから中庭を見る。敷地内には都市の喧騒から離れた静かで緑豊かな中庭が広がる。南側隣地は将来建て替えが予定されているため、西側に開いて透過性をもたせた。中庭の植栽は、ブリックに合わせてオリーブやヤナギ、アカシアなどのペールトーンのグリーンで統一している。

1階ダイニングより中庭を見る。中庭は奥にいくほど地面を高くして、奥行きを与えている。

配置図　縮尺1：2,000

西側ポーチ。

透明な中庭

庭の初源は人びとの祈りの場にあるという。パラダイスの語源が古代ペルシアの壁が囲う中庭「パイリダエーザ」であるように、中東の人びともまた、来世の楽園を中庭に具現化しようと試み、心の拠り所にしてきた。モロッコのマラケシュの「リヤド」と呼ばれる住宅でも、赤い砂塵が舞う灼熱の旧市街の迷路と鮮やかな対比をなすように、中庭には寒色の瑞々しいタイルによる幾何学が隅々まで行き渡り、そこに噴水の水音とオレンジの実をついばむ小鳥のさえずりが反響して、楽園のごとき様相を呈している。

泥壁のそっけない外観と、その内に秘められた珠玉の中庭。富や美をいたずらにアピールするのではなく、友人や家族のために平和な世界を内部に築き、内なる秩序に向かうこと。中庭の空間形式は、その地の人びとの価値観すらも形成したのかもしれない。彼らの信仰や仲間意識の高さ、服装は、その端的な表れであろう。建築と人びとのふるまいは日々共鳴し合い、それが価値観や文化的体系をかたちづくっていくのだ。

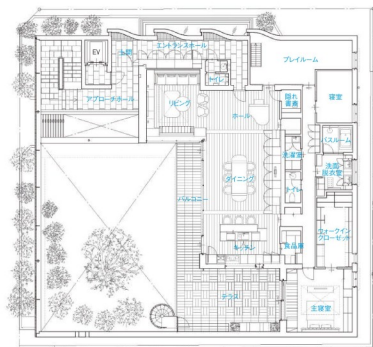
「オプティカルグラスのリヤド」は、低層住宅街に建つ2世帯住宅である。建主はバス通りからの騒音や視線を感じることのない、静かな暮らしを望んだ。そこでリヤドのように、静寂の中に自然現象がこだまする中庭を設け、その楽園を通じてふたつの家族がひとつになることができる住宅を構想した。ただし中東と比べて日差しは弱いし、外部は流浪の民が行き交う環境でもないから、建築が外部を全否定するような建ち方は望ましくない。そこで、質量があって遮音性能を備えた無垢の光学ガラスのブリックと、青白い肌の美濃土のブリックを同形状に制作して、それらを丁寧に積んでいくことで、リヤドの安心感と自然現象の反響を実現しながら、半分開かれた「透明な中庭」を目指すことにした。

2種類の大きさのブリックをリズミカルに組み上げながら目地を徹底的に通して、床や壁、ベンチ、暖炉、花壇、エントランスのゲート、窓枠などのあらゆる部位を構成した。

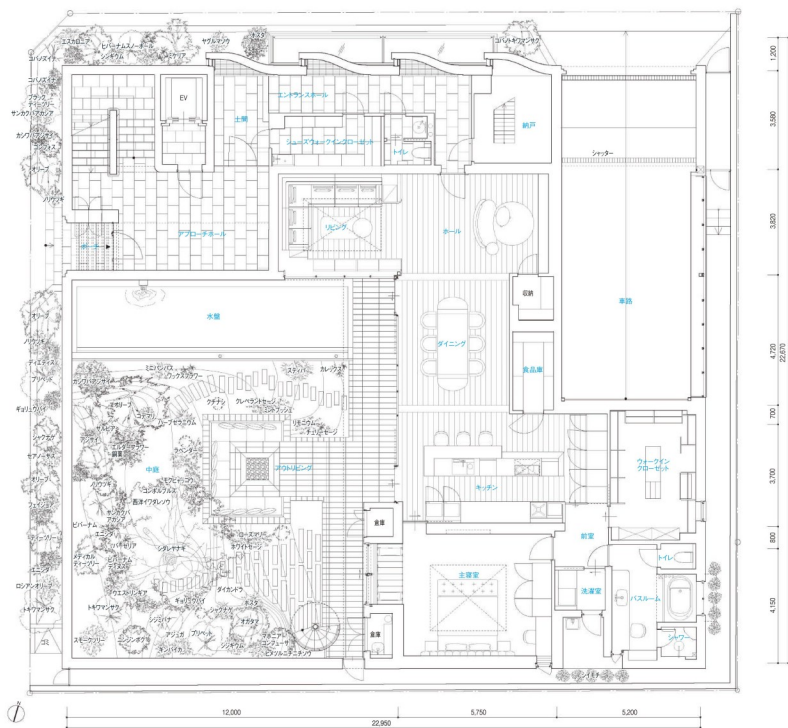
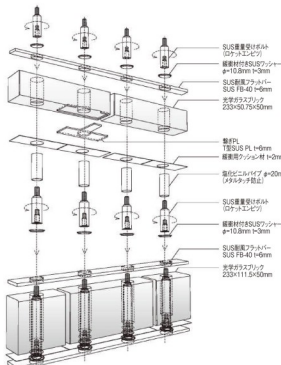
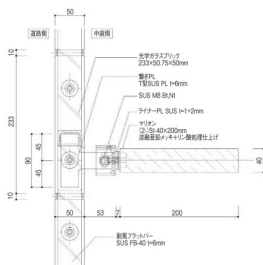
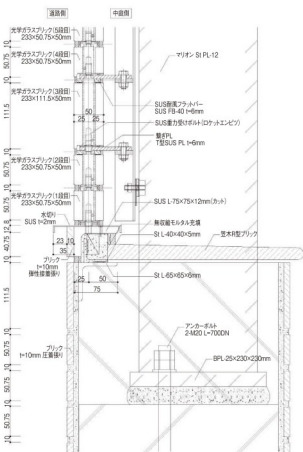
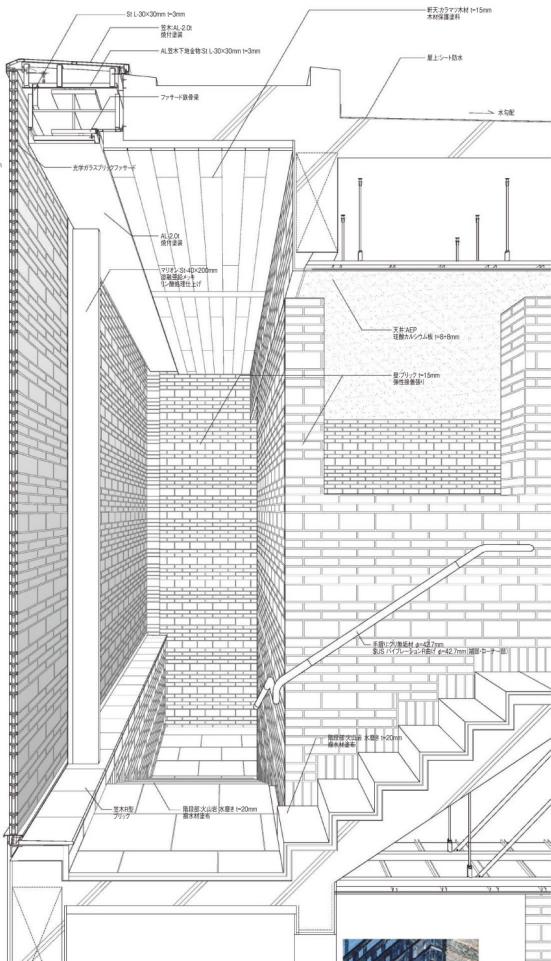
その透徹した秩序は、職人の手の痕跡や、材料の収縮による形状の不連続性、色の不均質性を逆説的に顕在化させて、あたたかな表情をつくり出す。ガラスが内外にふりまく光と影や、水音や鳥のさえずりなどのさまざまな自然現象がブリックの幾何学の上で反響し、やがて楽園は立ち現れる。　（中村拓志）

2階ダイニング、キッチン。天井高は4.5～5.1mあり、中庭側の引き戸と東側のラタン網の建具に隠れたハイサイドライトから風が抜ける。

2階リビングから中庭（正面）とダイニング（左）を見る。中庭から伸びるヤナギが望める。バルコニーから下りた中庭は、親世帯との交流の場。

2階バルコニーから見るアプローチ。水盤の吐水口からの音が光学ガラスブリックとブリックに反射して、中庭やアプローチへこだまする。

2階平面図　縮尺1：300

外壁のブリックを連続させてつくった2階テラスのベンチとテーブル。50mm厚のブリックを用いながら、人の動作や足の角度に合わせた高さや奥行きとした。左手は主寝室。

Space in Detail
喧騒を離れ風景を享受する光学ガラスブリック

1階平面図　縮尺1：150

光学ガラスブリック組立図

光学ガラスブリック平面詳細図　縮尺1：7

光学ガラスブリック断面詳細図　縮尺1：7

部分断面詳細図　縮尺1：25

光学ガラスブリックファサードは高さが4.6mあり、重量受けボルト（ロケットエンピツ）に、孔開きの光学ガラスブリックを下から積み上げている。光学ガラスブリックの自重は、重量受けボルトが連結されることで、鉛直荷重として下部RC躯体へ伝達される。外力（風圧力と地震力）は、2段ごとに水平に埋め込められたフラットバーを介して、耐風受けの鉛直フラットバーマリオンと地震力を受けるクロスフラットバーマリオン（柱）に流して負担している。目地はブリックの目地幅と合わせ10mmとして、目地内に前述した水平部材のフラットバーを潜ませた。　　（隅谷尚子／NAP建築設計事務所）

光学ガラスブリックとブリックの目地を揃えたコーナー部の取り合い。

美濃土を用いた制作のブリックと鋳込み製法による50mm厚のオリジナル光学ガラスブリックは、それぞれ比重が高いことから、敷地外の音の遮音と敷地内の音の反射効果をもつ。光学ガラスブリックを透過した光が、ブリックに乱反射する。外部の緑が光学ガラスブリックに透けてぼんやりと映り込む。

北側夕景。向かいの住宅の視線に配慮してスリット窓としている。

西側夕景。内側の照明が光学ガラスブリックを通してぼんやりと外部を照らす。

オプティカルグラスのリヤド
所在地／東日本
主要用途／専用住宅
家族構成／2世帯

設計
NAP建築設計事務所　担当／中村拓志
　隅谷尚子　加藤裕太
構造　yAt 構造設計事務所　担当／森部康司
設備　明野設備研究所　担当／桑田全人
電気　明野設備研究所　担当／辺田一生
外構・造園　SOLSO　担当／齊藤太一
　板垣雄太
光学ガラスブリックファサード　旭ビルウォール
　担当／岩嵜康明　船越晶
カーテン　安東陽子デザイン　担当／安東陽子
　山口かすみ

施工
佐藤秀　担当／馬場章郎　青野純
設備　新開工業　担当／森猛
電気　國興システムズ　担当／石綱聡

構造・構法
主体構造・構法　鉄筋コンクリート造一部鉄骨造
基礎　直接基礎

規模
階数　地下1階　地上2階
軒高 6,965mm　最高高さ 9,485mm
敷地面積　629.82m²
建築面積　359.57m²
（建蔽率57.09%　許容60%）
延床面積　1,057.83m²
（容積率99.57%　許容100%）
地階　492.72m²　1階　265.18m²

2階　284.80m²

工程

設計期間　2017年4月～2018年11月
工事期間　2019年1月～2020年7月

敷地条件

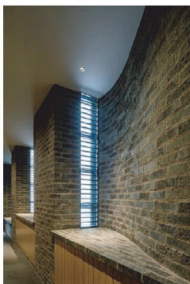
地域地区　第1種低層住居専用地域
道路幅員　西10.96m　北4.54m

外部仕上げ

屋根／シート防水
ガルバリウム鋼板 t=0.4mm 平葺き
外壁／233×51mmブリック 弾性接着張り（VASE）馬張り
開口部／光学ガラスブリックファサード（旭ビルウォール）
スチール・ステンレスサッシ（アドワーク）
木製サッシ（アイエイチ）　アルミサッシ（YKK AP）
外構／植栽（SOLSO）
床・アウトリビング・テラス家具／233×51mmブリック 圧着張り（VASE）

内部仕上げ

リビング　ダイニング　キッチン

床／MonsterOAK ホワイトウオッシュウレタン艶消しクリア t=19mm w=180mm
ボーダー張り（望造）
壁／モールディング装飾 ポーターズペイント（NENGO）
天井／折上げ天井部モールディング装飾 ポーターズペイント（NENGO）
家具／ソファ：制作（オーク突板ホワイトウォッシュ白との粉 Kvadrat生地 美創）　ソファテーブル・ダイニングテーブル：制作（interoffice）　キッチン家具：制作（リネアタラーラ）　モールディング装飾ポーターズペイントウレタンクリア艶消し（一部ラタン）　MDFデザイン張り ウレタン艶消し
厨房機器／

エントランスホール。スリット窓にもファサードと同じ光学ガラスブリックを設えた。

2階主寝室より中庭と連続するテラスを見る。テラスの窓辺に読書スペースとなるデイベッドを配置。

食洗器・オーブン・IHコンロ／Miele
換気扇（シェード）／ARIAFINA
照明／CVIKOF（シャンデリア）　LeeBroom（ペンダント）　MAXRAY
シンク水栓金物／Hansgrohe

バスルーム　洗面脱衣室

床／200mm角モザイクカット磁器質タイル
壁・天井／モールテックス
家具／制作家具（美創）天板（クオーツ CAESARSTONE）　框扉（ウレタン潰し艶消し）
照明／RH（ブラケット照明）　MAXRAY
建築金物／表示錠（堀商店）　タオル掛け（Tform）　つまみ（Goriki）
バスタブ／jaxson　TOTO
シャワー水栓金物／Hansgrohe
洗面器／CERA Villeroy-Boch
洗面用水栓金物／Hansgrohe　CERA

トイレ

床／火山岩（ADVAN バサルティーナ）
壁・天井／クロス
家具／制作家具（美創）天板：タモ耳付無垢天板 ウレタンクリア　扉：オーク突板ウレタンクリア
照明／Maxray
便器／TOTO

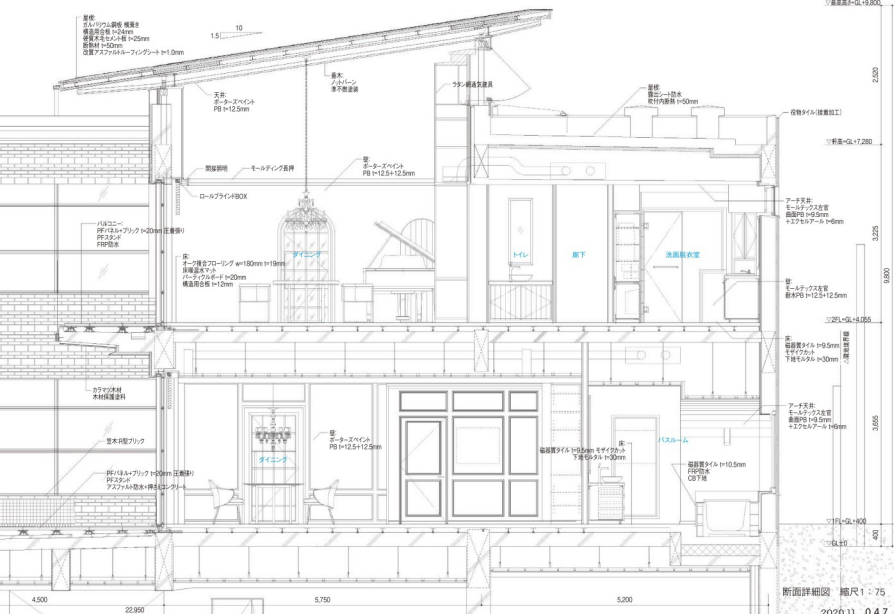
エントランスホール

床／火山岩（ADVAN バサルティーナ）
壁／白との粉ホワイトウォッシュ 目透かし張り
天井／AEP
家具／オーク突板白との粉ホワイトウォッシュ 目透かし張り　扉
照明／MAXRAY
建築金物／レバーハンドル（堀商店）

設備システム

空調　冷暖房方式／隠ぺいダクト接続方式 ルームエアコン
換気方式／ロスナイ換気　第3種換気
その他／床暖房（ガス式一部電気式）
給排水　給水方式／増圧直結方式
排水方式／合流方式
給湯　給湯方式／ガス給湯器（循環式）

撮影／新建築社写真部
家具協力／Minotti

断面詳細図　縮尺1：75

西側全景。山間の急斜面地に木造の平屋を計画。敷地の造成から竣工まで、建主の自主施工による。床レベルをもち上げる木組みの足元は石場建ての懸造り。*

美杉の舞台

Haus-009
三重県津市

大室佑介／大室佑介アトリエ
＋高橋一浩／木神楽
＋沓沢敬
Yusuke Omuro Atelier
＋Kazuhiro Takahashi ／ Mokkagura
＋Kei Kutsuzawa

リビングからバルコニー越しに谷側の森を見る。平面は910mmのグリッドにのせて設計し、生活の中心となるリビング・キッチンは3間角の正方形として中央に配置。バルコニーに面する開口部には制作の木製建具を外付けし、左右に引き込み全開放できる。桁上部はスリット状の開口として光を最大限取り込む。

長辺方向に沿って設置されたバルコニーは、長さ16.38m、奥行き1.5m。
上部に張り出す庇の奥行きを1.8mとし、風雨を凌ぐ。

歴史を繋ぐ建築の佇まい

三重県中部の山間に建つ、30坪ほどの平屋である。市街地から山に向かって車で40分ほど走り、県道から逸れて小さな集落を抜け、木々の茂る山道を上ったところに敷地はある。畑や牧場が広がり、いくつかの建屋と建主が営む日本料理店、彫刻家のアトリエなどが建つ並びに新たな生活の舞台として計画した。

平面としては、建物の中心にあたる部分に最大限の面積を割り当て、その両側に、用途に合わせて細分化した各部屋を配置し、長いバルコニーで繋いだ単純な構成である。大小の部屋は、日本の伝統的な空間意識である「ハレ」と「ケ」の関係にあり、客人や家族の集いを受け容れる大皿と、家人のそれぞれが籠もることのできる小皿として機能する。片持ちでせり出したバルコニーは、内から見れば森の樹々を楽しむ展望台、外から見れば住人の生活が溢れ出る舞台となり、古来より続く建築の特徴のひとつである「見る」「見られる」ものとしての関係が強調されるよう設計している。

配置と外観には、多くの時間を費やして検討を重ねた。背後の山と建物との関係がよく表れる場所に配置し、社寺や神殿でも用いられる、斜めからの見上げという美しい見え方を確保した。建物の顔ともいえる谷側の面はシンメトリーにまとめ、柱間と軒の高さとの関係が白銀比率になるよう納めている。玄関のある妻面には黄金比率に基づいた面と、白銀角の近似値である2寸5分勾配の屋根を組み合わせ、見る者の目に対して自然な姿で映るよう調整を施した。

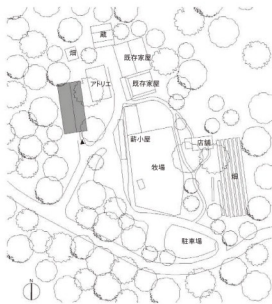
これらの古典的な建築手法は、躯体が組み上がった時点で確定される。そのため、上棟以降の施工において、多少のイレギュラーな出来事が生じたとしても建物の強度が失われることはなく、設計者としての柔軟な対応が可能となる。

洋の東西を問わず、古来より脈々と続く建築の遺伝子を結びつけることは、現代において建築を考える者の使命であると考えている。機能性や快適性といった人間優位な条件の中ばかりに悦びを見出すのではなく、建築という存在自体から発せられる美についても意識を向けておかなければ、歴史の歯車を動かすことはできないだろう。

南側全景。玄関には角材を並べて渡したブリッジを通ってアプローチする。玄関の壁は妻が草を塗り込んだ。

自然と共にある自主施工のあり方

設計意図とは別の大きな特徴として、建築工事のほとんどが建主自身の手でなされていること、そして、建築材料の大半が土地のものであることが挙げられる。

建主は本業である創作料理の献立を練り上げるように、さまざまな素材に触れ、現代の恩恵であるインターネットとホームセンターを活用しながら、日々の生活と観察を通じて得た研究成果をいかんなく発揮し、クロード・レヴィ＝ストロースの定義するブリコルール（器用人）となって、設計から施工までの長丁場を乗り切った。豊富な知識を必要とする伝統的な工法を用い、手間のかかる材料で覆われた建物を、1坪あたり40万円程度の単価で実現できたのは、この建主あってのことである。

配置図　縮尺1：1,500

敷地から採れた素材を加工し、敷地周辺にある部材と人材を組み合わせる、という当たり前の行為によってできたこの建物は、山を傷める範囲を最小限に止め、中世以前における建築の役割、すなわち「人のための覆い」という機能を果たしながら、「山への捧げもの」としてこの地に建っている。　（大室佑介）

左：リビング・キッチン。天井は30mm厚のスギ板張り、床は24mm厚のアサメラ張り。材木は地元材、もしくは地元に眠っていた材を使用。鉄板部分には薪ストーブを設置予定。
右：リビングから右手にピアノ室、廊下の突き当たりに玄関を見る。

Space in Detail

土地を切り拓き住処をつくる

竣工後に建主に聞き取った自主施工の工夫をまとめたスケッチ**

木の伐採から竣工までの施工過程

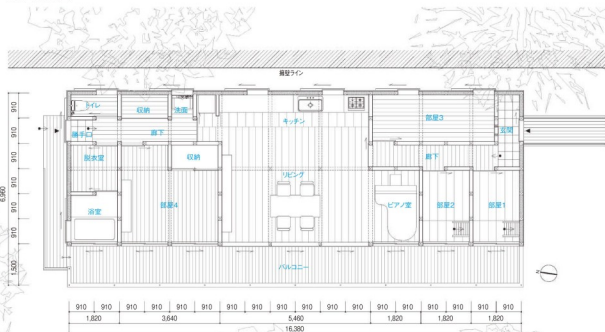
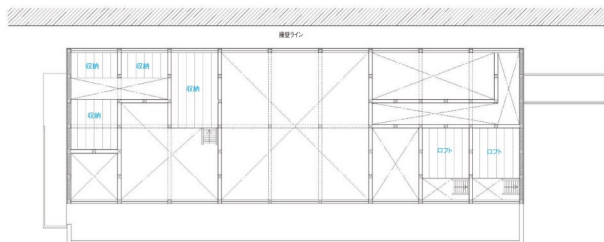
計画は建物にかかる木を伐り倒し、土壌の改良から始めた（1）。山と基礎の専門家の手を借りながら、重機を繰って掘られた穴に杭を打ち込み（2）、砂利、割栗、燻炭などで受けをつくり、山で採った石を据え固め（3・5・6）、建物から延びる柱を受け止めている（7～9）。建物に使用されている木材はすべて地元産、あるいは地域に縁のあるもので統一された（4）。外壁に使われる焼スギ板は、伝統的な手法である「3角焼き」によって3枚ずつ炭化させ（10・11）、1枚1枚留継ぎで張り付けている。屋根や床下、外壁などの外気に触れる面には、内側に燻炭を敷き詰めて断熱とし（12～15）、内壁は一部を除きすべて塗り壁。塗り面積の大きいリビング・ダイニングには、山の土、砂、CMC（増粘剤）を組み合わせ、各面で異なった表情に仕上げた（16～18）。そのほかの部屋は場所によって土漆喰や土壁を塗り分け（19・20）、浴室には油漆喰（26）、玄関正面の壁には草を塗り付け、ボンドで固めている（21）。ピアノ室の壁のみ角材を並べた凹凸の壁（22）。外部建具は近所の建具屋の制作。内部建具と玄関戸はすべて建主の手づくりで、木と和紙を使った引き戸（23～25）。スペースに合わせて加工したキッチンにも和紙を貼り、周囲の雰囲気を合わせた。据え付けの棚などもすべて自主制作（27）。

東日本大震災を契機にこの地に移り住むことを決めた建主一家は、土地に残されていた建物や材料を使って土地を切り拓き、川の水を引き、畑や牧場をつくり、住まいと店を構えた。そこで培った経験は本計画にも生かされ、浄化槽の設置、給排水などの配管工事、薪ボイラーを含めた設備機器工事まで、建主の手が離れた箇所はひとつもない。（大室）

竣工後に建主に聞き取った自主施工の工夫をまとめたスケッチ**

西側立面の夕景。居室に合わせて設置した開口部越しに内部の様子が浮かび上がる。

ロフト階平面図

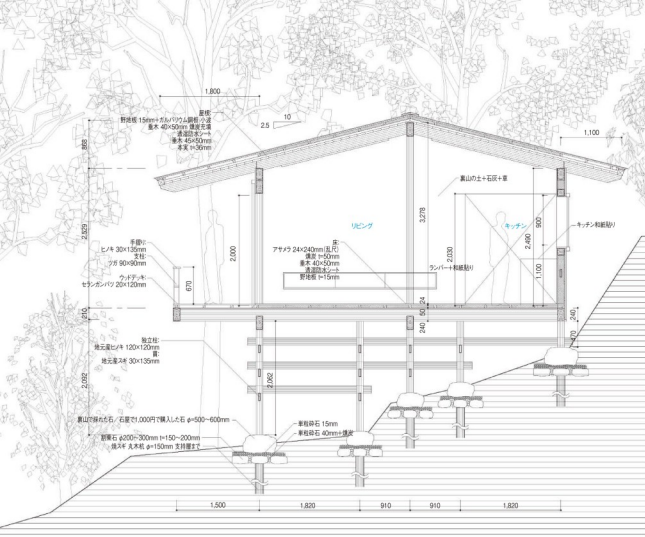
1階配置平面図　縮尺1：150

キッチンの窓から山側を望む。視線の高さに揃った地表と雑木、奥に見える妻のアトリエが、土壁と木枠にフレーミングされる。

玄関。藍染めした和紙を貼った引き戸が焼スギの外壁の裏側に引き込まれる。草を塗り固めた正面の壁に設けられたニッチには、沓沢佐知子の彫刻作品が置かれている。

建物基礎部分。地中に打ち込まれた杭の上に礎石が据えられ、寸角の柱によって建物全体を支える。柱同士を繋ぐ貫の端部は切りっぱなし。

玄関内部。直射の当たる時間帯になると、和紙に覆われた扉の骨組みがうっすらと透かし見え、サイディング材の裏面を使った床に光が差し込む。

断面詳細図　縮尺1：75

上：脱衣室と浴室。　下：部屋4。正面のベンチは制作。壁は和紙貼り。

玄関側の廊下から勝手口方向を見通す。

美杉の舞台（Haus-009）
所在地／三重県津市
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子供2人

設計
大室佑介アトリエ　担当／大室佑介
　木神楽　担当／高橋一浩　沓沢敬
電気　コスモ電気工事　担当／伊藤清司
外構・造園　今西友起　沓沢敬

施工
基礎　今西友起・沓沢敬
建方　木神楽　担当／高橋一浩　沓沢敬
大工　久保哲彦　沓沢敬
プレカット　MSP　地崎雄貴
電気　コスモ電気工事　担当／伊藤清司
建具　加藤建具店　担当／加藤隆
　沓沢敬　沓沢佐知子
左官　担当／沓沢敬　沓沢藍　沓沢風花
草壁・制作　沓沢佐知子

構造・構法
主体構造・構法　木造在来工法
基礎　石場建て

規模
階数　地上1階
軒高 2,769mm　最高高さ 3,786mm
敷地面積　5,940m²
建築面積　89.43m²（＋バルコニー 24.57m²）
（建蔽率1.9%　許容　制限なし）
延床面積　89.43m²（＋バルコニー 24.57m²）
（容積率1.9%　許容　制限なし）
1階　89.43m²

工程
設計期間　2018年2月～2020年5月
工事期間　2019年1月～2020年5月

敷地条件
地域地区　都市計画区域外
道路幅員　南側4m
駐車台数　8台（店舗含む）

工事費
総工費　13,000,000円
坪単価　380,000円

外部仕上げ
屋根／ガルバリウム鋼板小波板
外壁／焼スギ板 t=20mm
開口部／玄関：和紙　バルコニー：ヒバ　洋ザクラ
バルコニー／セランガンバツ　ヒノキ　ツガ
アプローチ／洋ザクラ　鉄丸棒

内部仕上げ
リビング　ダイニング　キッチン
床／アサメラ t=24mm　ニレ t=22mm
壁／土・砂 CMC（ナトリウムカルボキシメチルセルロース）　土・砂　土 CMC（ナトリウムカルボキシメチルセルロース）　スギ一寸角材　ヒノキ 一寸角材
天井／スギ板 t=36mm
厨房機器／
　ガスコンロ／マルゼン 業務用ガスレンジ
　換気扇（シェード）／鉄板折り曲げ加工 t=3mm

浴室
床／サイディング裏使い
壁／スギ板張り t=20mm　油漆喰
天井／スギ赤身板張り t=20mm

玄関　廊下　トイレ　洗面
床／スギ t=30mm　サイディング裏使い
　トイレ・洗面所：スギ t=30mm
壁／土漆喰　草 ボンド
　トイレ・洗面所：土漆喰
天井／スギ板 t=36mm

部屋1～4
床／スギ t=30mm　ニレ t=30mm
壁／土漆喰　土 砂 CMC
天井／スギ板 t=36mm

設備システム
空調　暖房方式／薪ストーブ
　冷房方式／ルームエアコン
　換気方式／第3種換気方式
給排水　給水方式／上水道連結、川水連結
　排水方式／浄化槽
給湯　給湯方式／薪ボイラー

撮影／新建築社写真部
*撮影／若林勇人
**スケッチ／横山理紗

敷地に繋がる林道から見上げる。建物に明りが灯ると左右対称の開口部が際立ち、壁上部の隙間からもれる光が屋根全体を浮かび上がらせる。

森の図書館

Library in the Forest
神奈川県逗子市

三井嶺建築設計事務所
REI MITSUI ARCHITECTS

ロフトから吹抜けを見る。膨大な蔵書を抱えるふたりの住まい。吹抜けを覆う屋根は、視線が外に抜けて本への意識が散漫にならないように曲面としている。一寸厚のスギ集成材を現場で湾曲させながら、3層をビスで一体化した構造。長手方向だけでなく短手にもほんのりとむくりをつけた3次元曲面となっている。12mの長さに及ぶ屋根の重量感を軽減させるように、弓状の切込みを入れてスリット窓を設けている。

1階閲覧室から見上げる。廃棄から救済した木製家具を使いながら、保存・継承する「在野保存」活動の受け入れ先となり、本棚や机などを引き継いだ。それぞれの什器を実測し、その大きさに合わせて壁や天井の高さ、什器の配置を決定。家全体が書架になっている。什器は一切の加工や修正はせず、古びた傷や金属タグ・分類ラベルはそのままにしている。

屋根断面詳細図　縮尺1：60

Space in Detail

意識を本の中へと誘う3次元曲面

ペアガラス FL3+A6+FL3
ステンレスフレーム

むくり梁:
スギ 105×240mm 天端カット

むくり梁:
スギ 105×180mm 天端カット

北側斜線▽

1
1.25

北山杉
磨き丸太
末径3.3寸

躙口:
レッドシダー シングル 端材

高耐久アスファルトシングル
ガムロン防水
野地板 t=9mm
通気層 t=20mm
ポリスチレンフォーム t= 70mm
構造用合板 t=9mm

曲げ集成トラス梁
上弦材:曲げ集成90×105mm 上下斜めカット
下弦材:曲げ集成90×190mm 上下斜めカット

ロフト／書架3

むくり梁:
スギ 105×210mm 天端カット

トップライト
ベルックススカイビュー
Low-Eガラス
E3+A9+FL5

▽RFL

ペアガラス FL3+A6+FL3
ステンレスフレーム

垂木梁　詰め打ち
120×30mm×3段
現場曲げネジ集成
ラフ引き面現し

北山杉:
磨き丸太
元径5.8寸
末径4.5寸

ガルバリウム鋼板竪はぜ葺き

梁 現し

GB-R t=9.5mm AEP

曲げ集成トラス梁:
上弦材:曲げ集成90×125mm
上下斜めカット
下弦材:曲げ集成90×240mm
上下斜めカット

書斎2

ウォークイン
クローゼット

CH=2,310

CH=2,335

寝室

▽隣地境界線

2,520

オーク無垢フローリング t=23mm
構造用合板 t=28mm

天板:オーク t=18mm

ジョリパット
通気胴縁 t=20mm
透湿防水シート
ダイライトMS t=12mm
グラスウール t=100mm
GB-R t=12.5mm AEP

手摺り:
St ○-φ=34.0mm
×1.6mm SOP

むくり梁:
スギ120×270mmを天端カット

ペアガラス
FL5+A12+FL5

▽2FL

150

185

ペンダント照明用製作アーム
St●-φ=16mm SOP

梁 現し OS

GB-R t=9.5mm AEP

GB-R t=9.5mm AEP

梁:現し

GB-R t=12.5mm
AEP

GB-R t=12.5mm
AEP

コンクリート打放し
ランデックスコート

2,520

閲覧室

CH=2,370

CH=2,335

キッチン

オーク無垢フローリング t=23mm
構造用合板 t=28mm
床暖房
ポリスチレンフォーム t=45mm
根太 □=90mm

長尺塩化ビニル
構造用合板 t=28mm
ポリスチレンフォーム t=45mm
根太 □=90mm

▽1FL

鋼製束

木シングル葺き WP
通気胴縁 t=20mm
透湿防水シート
ダイライトMS t=12mm
グラスウール t=100mm

気密基礎パッキン

コンクリート打放し
ランデックスコート

玄関

CH=2,380

2,520

▽隣地境界線

手摺り:
St ●-φ=28mm
亜鉛メッキ ドブ漬け

押さえコンクリート t=80mm
金ごて押さえ
表面強化剤

ドレイナーパネル

コンクリート
金ごて仕上げ

▽B1FL

1,390

湧水処理マット t=70mm

在野保存什器(九州大学歴史的什器保存再生プロジェクト)

A	書棚 3列×6段 (旧文学部) w182cm×h203cm×d27cm (幅6尺×高6尺7寸×奥行9寸)
A'	書棚 3列×6段 背板付 (旧文学部) w182cm×h220cm×d27cm (幅6尺×高7尺3寸×奥行9寸)
B	書棚 3列×2段 (旧文学部) w182cm×h68cm×d27cm (幅6尺×高2尺2寸×奥行9寸)
C	大型上下棚 梯子付 (旧工学部本館) w3,030mm×h2,725mm×d603mm (幅10尺×高9尺×奥行2尺) 上段:w3,030mm×h1,815mm×d450mm (幅10尺×高6尺×奥行1尺5寸) 下段:w3,030mm×h910mm×d603mm (幅10尺×高3尺×奥行2尺)
D	上下棚 引き出し付き (旧文系図書館) w150cm×h230cm×d48cm (幅5尺×高7尺6寸×奥行1尺6寸)
E	ブックキャリー (旧文系図書館)
F	大卓子 (旧文学部) w182cm×d118cm×h76cm (幅6尺×奥行3尺9寸×高2尺5寸)
G	カードケース 脚付き (旧中央図書館)

断面詳細図　縮尺1：75

1,000　1,000　1,000　1,000　1,000　1,000　1,000　1,000　1,000　1,000　1,000

11,000

書斎2。本の中の世界に意識が向かおうとする時、建物がそれを邪魔をしないよう、白い壁や大面積の透明なガラスではなく、住み手が心地よく感じる森や空の色を手掛かりにして壁の色を選び、それぞれの居場所に合わせて配した。

「透明」に替わり意識に溶ける

急峻な小山の麓に建つ、数万冊の蔵書を納める図書館のような住まい。 図書館の片隅に司書として住む場所があればよいとの要望だった。ゆえにリビング・ダイニングといった室名の部屋はない。住宅として必要な寝室・キッチンなどのほかはすべて閲覧室と書架に充てている。

本に集中できるよう、「透明」に替わり意識に溶ける構成要素を考えた。ひとつ目は、緑色の壁と小さな景色。森の記号としての緑色をメインに、意識に溶け込む色を配した。山や空を印象的に切り取る窓による小さな景色は、色のついた壁へと拡張され、壁の存在は薄れる。ふたつ目は、時間軸を混在させる本棚。大学博物館から貸与を受けたもので、あえて残した傷やラベルが時間の厚みをもたらし、意識にストレスなく馴染む。3つ目は、わずかにむくりをつけた3次元曲面の屋根。山から覆い被さる木々の枝をモチーフに、小さな木材を敷き重ねた。木が束となった構造は、スリットを切ったことで量塊の重々しさが薄れ、隙間から入るほのかな光を受けて軽やかになり、木漏れ日の降る森の木々へと再び還元される。

窓は少なく物理的には閉じた空間だが、透明であるよりも建築の存在は意識に溶け、本の中の世界へと思いを馳せることができる。 (三井嶺)

垂木材の製材

120mm角の集成材から120×30mmの垂木材を切り出す。

短手断面

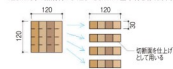
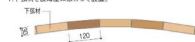
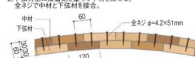
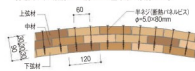
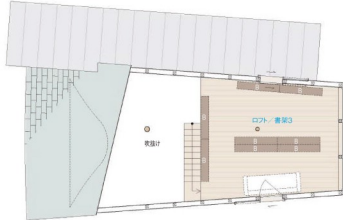
1.下弦材を仮母屋に添わせて設置。

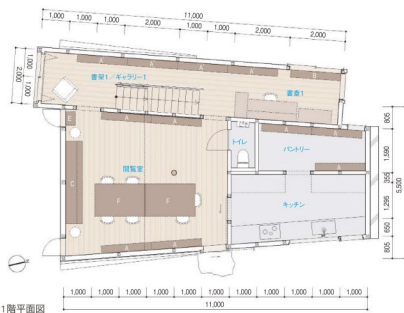
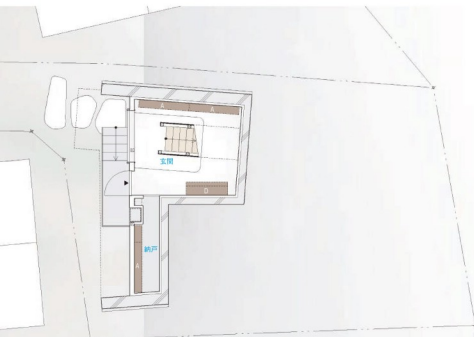
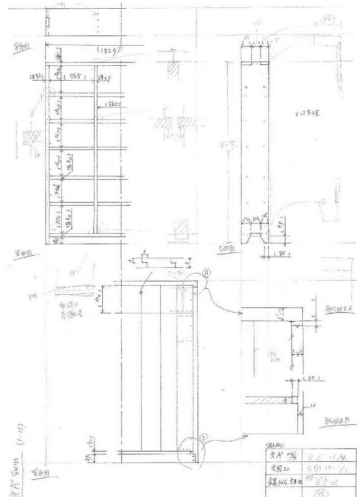
下弦材
30
120

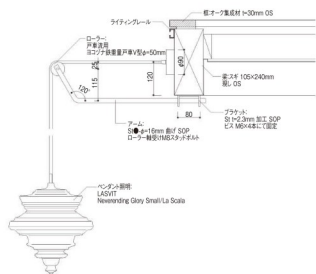
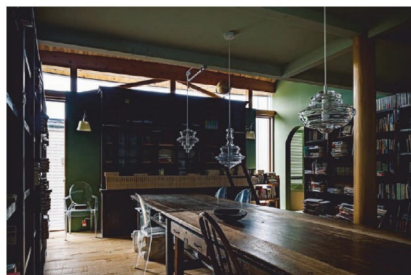
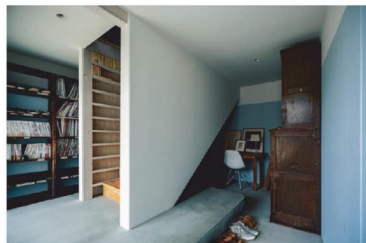
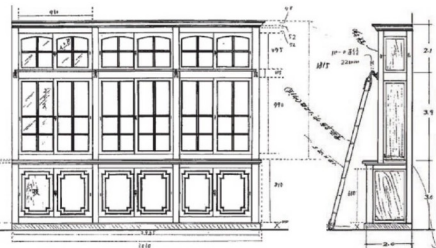
2.下弦材上に接着剤を塗って中材を乗せる。
全ネジで中材と下弦材を接合。

中材
下弦材
60
全ネジ φ=4.2×51mm
30
30
60
120

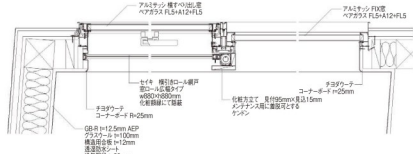
3.中材上に接着剤を塗り、上弦材を乗せる。
半ネジ(断熱パネルビス)で上弦材を接合。
現場曲げネジ集成による成9cmの垂木梁が形成される。

4点提供：三井嶺建築設計事務所

屋根の施工風景。左から、むくり梁に垂木梁の1層目を張っている様子、1面張った様子、2層目を張っている様子、屋根全景。

ロフト階平面図

2階平面図

1階平面図

地階配置平面図　縮尺1：150

什器A'実測図　縮尺1：50
（提供：九州大学総合研究博物館）

上：寝室。山や空の景色を効果的に切り取る位置に窓を設けている。自然通風を確保しつつ、網戸は隠して景色を阻害しないように納めている。押縁納まりとしメンテナンスにも配慮。　下：キッチン。奥のパントリーにも書棚を再利用している。

閲覧室ペンダント照明用制作アーム詳細図　縮尺1：15

閲覧室。什器Cを南面に据える。いちばん奥のペンダント照明は、制作の片持ちアームで設置。

地階玄関。意識を切り替えるきっかけとして、階段には建物で唯一の白色を配している。

什器C実測図　縮尺1：50
（提供：九州大学総合研究博物館）

書架1。奥は書斎1。階段の段板は、壁厚を利用したつくり付け本棚に高さと厚みを揃え、溶接ビードにより角がだらしなく見えないよう、栓溶接を用いて納めている。

北側の森に面して開いたロフト。西側の小窓には躙口のような板戸を設けており、内外の反転を暗示している。将来的には躙口を潜った屋上に野点席を設けることも計画している。

寝室ロール網戸建具詳細図　縮尺1：15

森の図書館

所在地／神奈川県逗子市
主要用途／専用住宅
家族構成／２人

設計
三井嶺建築設計事務所　担当／三井嶺
竹内みちる（元所員）
構造　坂田涼太郎構造設計事務所
担当／坂田涼太郎　鈴木一希
設備　さくら設計事務所　担当／島田櫻輔

施工
大同工業　担当／高島望
大工　土濃塚総建　担当／土濃塚高博
設備　岩沢設備　担当／岩澤豊
電気　弘立　担当／西尾寛徳
プレカット　スカイ　担当／小竹雅也　守屋博和
屋根　田島ルーフィング　担当／綿引友彦
徳重里伽子
建具　一寸木建具　担当／一寸木芳行
金物　ツチヤ創建　担当／土屋和剛
塗装　高柳塗装　担当／高柳修
什器　九州大学歴史的什器保存再生プロジェクト　担当／三島美佐子（九州大学総合研究博物館准教授）　新井竜治（芝浦工業大学特任教授）

構造・構法
主体構造・構法　基礎・地階：鉄筋コンクリート造　地上：木造在来工法
基礎　べた基礎

規模
階数　地下1階　地上2階+ロフト
軒高 6,931mm　最高高さ 9,298mm
敷地面積　196.87m²
建築面積　73.65m²
（建蔽率37.41%　許容50%）
延床面積　147.88m²
（容積率75.12%　許容100%）
地階　18.80m²　1階　73.65m²
2階　55.43m²　ロフト　21.28m²

工程
設計期間　2017年12月〜2019年3月
工事期間　2019年3月〜12月

敷地条件
地域地区　第1種低層住居専用地域
法第22条区域
道路幅員　南4m

外部仕上げ

配置図　縮尺1：2,000

南西側夕景。旗竿敷地で小山に抱かれたような奥まった場所に建ち、擁壁に面した北側は木々が生い茂る。

屋根／ガルバリウム鋼板竪はぜ葺き　R部：高耐久アスファルトシングル葺き（TAJIMA ロフティ）
外壁／ジョリパッド ラスモルタル t=15mm 通気工法　レッドシダー t=17mm 羽目板張り
レッドシダー シングル葺き WP（共栄木材）
ガルバリウム鋼板 竪はぜ葺き
開口部／アルミサッシ　木サッシ
屋根部：ステンレスサッシ

内部仕上げ

玄関
床／コンクリート金ごて押さえ 表面強化剤
壁・天井／ GB-R AEP（壁上・天井：白　壁下：水色）
家具／本棚（九州大学什器）
照明／ダウンライト

閲覧室
床／オーク無垢フローリング t=23mm ニッシンイクス バーンオーク
壁／ GB-R AEP
天井／吹抜け：スギ集成垂木梁現し 120×30mm×3段 詰打ち　一般部：GB-R AEP 梁現しOS（ライトグリーン）
家具／本棚（九州大学什器）
照明／ブラケットライト（Artemide Tolomeo）
ペンダントライト（LASVIT NEVERENDING GLORY）　スポットライト

キッチン
床／長尺塩化ビニル（東リ ヒトエ）
壁／ GB-R AEP（水色）　カウンター上：100mm角磁器質タイル張り H=300mm
天井／ GB-R AEP 梁現し OS（薄水色）
照明／ダウンライト　シーリングライト 陶製
厨房機器／松岡製作所 ACシリーズ

書斎1　書架1／ギャラリー1　書架2／ギャラリー2
床／オーク無垢フローリング t=23mm ニッシンイクス バーンオーク
壁／ GB-R AEP（緑）
天井／ GB-R AEP 梁現し OS（ライトグリーン）
家具／本棚（九州大学什器）
照明／ダウンライト

書斎2
床／オーク無垢フローリング t=23mm ニッシンイクス バーンオーク
壁／ GB-R AEP（緑）
天井／スギ集成垂木梁現し 120×30mm×3段 詰打ち
家具／本棚（九州大学什器）
照明／アームブラケットライト（Artemide Tolomeo mini）　スポットライト

寝室
床／オーク無垢フローリング t=23mm ニッシンイクス バーンオーク
壁／ GB-R AEP（ピンク）
天井／ GB-R AEP 梁現し AEP1回塗り（白）
照明／ダウンライト

ロフト／書架3
床／スギ集成材 t=30mm（屋根端材流用）
壁／ GB-R AEP（緑）
天井／スギ集成垂木梁現し 120×30mm×3段 詰打ち
家具／本棚（九州大学什器）

設備システム
空調　冷暖房方式／ヒートポンプ式エアコン
換気方式／第3種換気
その他／電気式床暖房
給排水　給水方式／直結方式
排水方式／公共下水道合流方式
給湯　給湯方式／ガス給湯器

撮影／新建築社写真部
*提供／三井嶺建築設計事務所

南側全景。地割に沿ってハの字に設けた擁壁の上にヴォリュームが乗る。レッドシダーシングル葺きの箇所は、内部の大型本棚に対応している。*

大原の家

House in Ohara
京都府京都市

森田一弥＋小寺磨理子
／森田一弥建築設計事務所
Kazuya Morita Architecture Studio

東側全景。敷地は、山間部の田畑風景が広がる集落の一角に位置する。正方形平面の切妻屋根のヴォリュームを立ち上げ、隣家と正対しないよう前面道路に対して45度傾けて配置。建物の四方に対して、1階では下屋を設けることで建物と庭との間に居場所をつくり、2階では水平に視線の抜ける開口を設けている。外壁は墨入り漆喰仕上げとし、その上に30mm幅のヒノキの押さえ縁をまわしている。

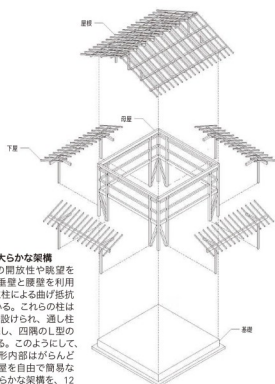
リビングからキッチンを見る。2階は、計12本の5寸角のヒノキ柱のみで小屋組を支えており、四周の連続水平窓から山並みに囲まれた景観を取り込む。四隅の窓は開閉可能で、そのほかは嵌め殺し。窓下の腰壁は構造的に機能するだけでなく、キッチンテーブルと高さを揃えたり、ベンチの背もたれになったりと、窓際に居場所をつくる手がかりともなっている。

書棚を配置することでリビング・キッチンと隔てた書斎。
窓外に見える木組みは、夏場の日差し除け用の簾掛け。

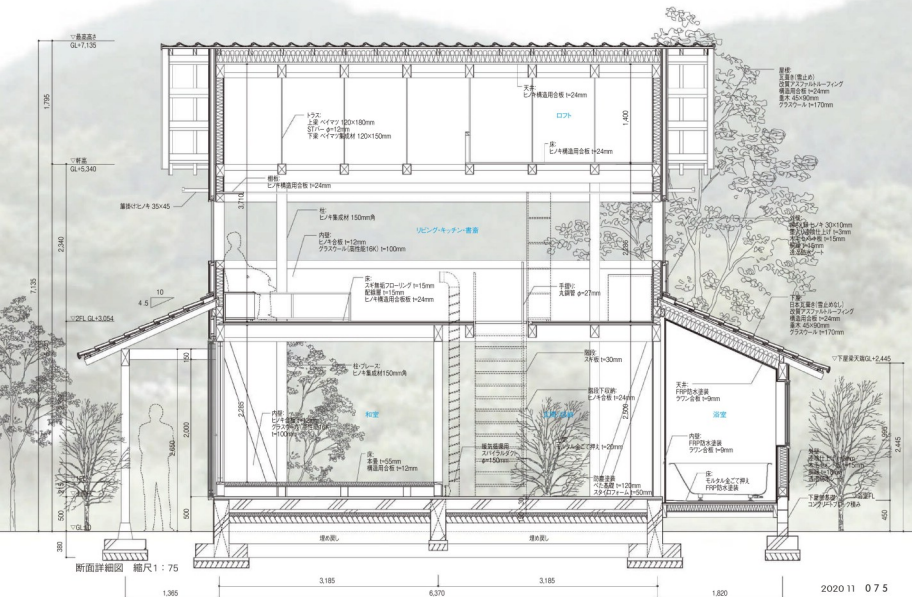
母屋の1階は半分をコンクリートの土間、半分を畳敷きとしている。北西側の下屋には水回りの機能を設け、ほかの下屋も将来の拡張や屋外活動の場となることを想定している。階段手摺りには照明のスイッチが埋め込まれている。

正方形平面による京都大原の住宅の試み

京都市北部の集落・大原に建つ住宅である。大原の民家は、長方形平面を山を背にして配置するのが典型であるが、四方に眺望が開けたこの敷地に対して、それは相応しくないと思われた。そこで各辺が等価な正方形平面を前提にスタディを開始した。そのうえで、この地域の厳しいデザインコードと民家の屋根形式を参照し、「切り妻屋根を載せた2階建ての母屋」と「四方に伸びた下屋」を基本的な骨格とすることになった。冷涼な気候に配慮し、食事や団欒など滞在時間の長い活動は日当たりのよい2階部分で行われるよう設備を配置し、貴重な太陽の光と周囲の眺望を最大限享受できるようにした。1階部分はコンクリートの土間を打ち、その半分の面積を畳敷きにして、夜間は寝室として使いつつ、そのほかの時間もフレキシブルな活動を受け入れられるような設えとした。冬季は土間に設置した薪ストーブの熱が基礎に蓄熱され、建物全体をじんわりと温める。母屋の周囲に張り出した下屋は、トイレや浴室など水回りの機能を設置した以外には、庭と屋内の活動を繋ぐ緩衝空間として、1階のフレキシブルな活動や、将来的な生活空間の拡張に備えている。（森田一弥）

ロフトからリビング・キッチンを見下ろす。

12本の柱による大らかな架構
2階では四方への開放性や眺望を確保するため、垂壁と腰壁を利用した5寸角の独立柱による曲げ抵抗型の架構としている。これらの柱は四隅に3本1組で設けられ、通し柱として1階へ連続し、四隅のL型の耐力壁を形成する。このようにして、6.37m角の正方形内部はがらんどうで、四方の下屋を自由で簡易なつくりとできる大らかな架構を、12本の柱によりつくり上げている。（柳室純）

アクソノメトリック

断面詳細図　縮尺1：75

Space in Detail

豊かな自然を享受する正方形平面

2階平面図

1階配置平面図　縮尺1：150

左：浴室。　右：洗面室。壁や天井はラワン合板のうえ、FRP防水塗装。

大原の家

所在地／京都府京都市
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子供2人

設計

森田一弥建築設計事務所　担当／森田一弥
　小寺磨理子
構造　柳室純構造設計　担当／柳室純

施工

コラボ建築　担当／岸本周治
大工棟梁　熊谷工務店　担当／熊谷琢磨
DENO建設　担当／加茂照雄　竹中梨矩
解体・基礎　甍建設　担当／大橋幹生
左官　中井左官工業　担当／中井稔二
塗装　岩本建設　担当／岩本徳秀
瓦　長本瓦　担当／長本俊植
板金　佐藤板金舎　担当／佐藤晃
建具　足立建具店　担当／足立孝之
タイル　三光タイル　担当／安藤晴康
鉄骨　村田金属工業　担当／村田悦子
サッシ・ガラス　三永工業　担当／水谷信治
材木　近治材木店　担当／神田一美
プレカット　岡本銘木店　担当／新庄泰典
畳　尽誠　担当／渡辺靖英
電気　堀部電工　担当／堀部泰二
水道　アクアライフテック　担当／田村正茂
薪ストーブ　美山里山舎　担当／小関康嗣
植栽　STUDIO BEAR BIRD　担当／甲田貴也

構造・構法

主体構造・構法　木造在来工法
基礎　布基礎

規模

階数　地上2階
軒高 5,340mm　最高高さ 7,135mm
敷地面積　330.58m²
建築面積　62.75m²
　（建蔽率18.9%　許容30%）
延床面積　89.42m²
　（容積率27%　許容60%）
　1階　48.85m²　2階　40.57m²

工程

設計期間　2015年11月～2019年5月
工事期間　2019年9月～2020年3月

敷地条件

地域地区　市街化調整区域（地区計画）
　法第22条区域　法第23条区域
　風致地区特別修景地域
道路幅員　東5m　　駐車台数　1台

外部仕上げ

屋根／本瓦葺き
外壁／墨入り漆喰仕上げ 撥水剤塗布
開口部／アルミサッシ（LIXIL）

内部仕上げ

玄関　収納　和室

床／玄関・収納：モルタル金ごて押え 防塵塗装
　和室：本畳 t=55mm
壁／ヒノキ構造用合板 t=12mm
天井／2階床下地構造用合板 t=24mm 現し

洗面室

床／モルタル金ごて押え 防塵塗装
壁・天井／ヒノキ構造用合板t=12mm

浴室

床／モルタル金ごて押え 撥水塗装
壁・天井／ラワン合板 t=9mm FRPクリア

リビング　キッチン　書斎

床／スギフローリング t=15mm
壁／ヒノキ構造用合板 t=12mm
天井・家具／ヒノキ構造用合板 t=24mm

設備システム

空調　冷暖房方式／ルームエアコン
　その他／薪ストーブ
給排水　給水方式／上水道直結
　排水方式／公共下水道放流
給湯　給湯方式／電気温水器

撮影／新建築社写真部

1階の土間から小上がりになっている14畳の和室。

配置図　縮尺1：7,500

南東側夕景。

ODYSSEY

東京都

椎名英三＋椎名祐子
Elzo Shiina＋Yuko Shiina

東側全景。敷地は閑静な住宅街の一角に位置し、東側と北側の坂道に2面接道する。東側に向かって段々と低くする敷地の断面に対して、リビング、アウタールームのヴォリュームが道路に突き出すように建ち上がることで、凹凸のあるファサードとしている。凹凸の隙間は植栽され、高木にはシマトネリコやサルスベリ、中木にはナンテン、そのほかにもジンチョウゲやキンモクセイ、モミジ、クチナシ、キンモクセイ、ミツバツツジなど、季節によって移ろう景観を楽しむことができる。

左手にリビング、右手にダイニング、奥にアウタールームを見る。リビング上部は、全面トップライトのコンクリートルーバーとし、Low-Eガラスやツインカーボ(乳白半透明やクリア)などを通した柔らかな光が内部空間に降り注ぐ。リビングの天井高さは3,600mm。

勝手口からリビングを見通す。東面の大開口まで連なる天井のコンクリートルーバーが、一定のリズムを生み空間に奥行きを付与する。階段の手摺りは、端部をコンクリートに埋め込むかたちで施工。

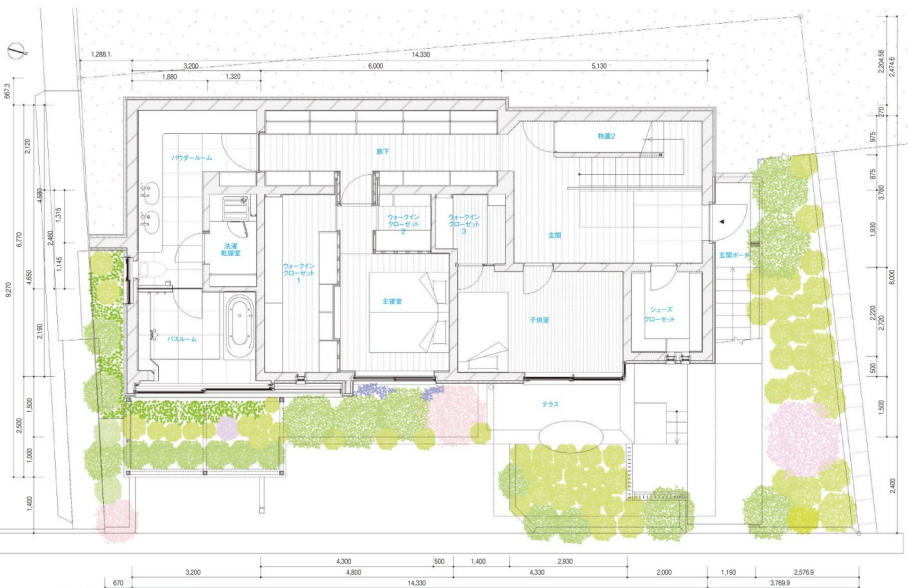
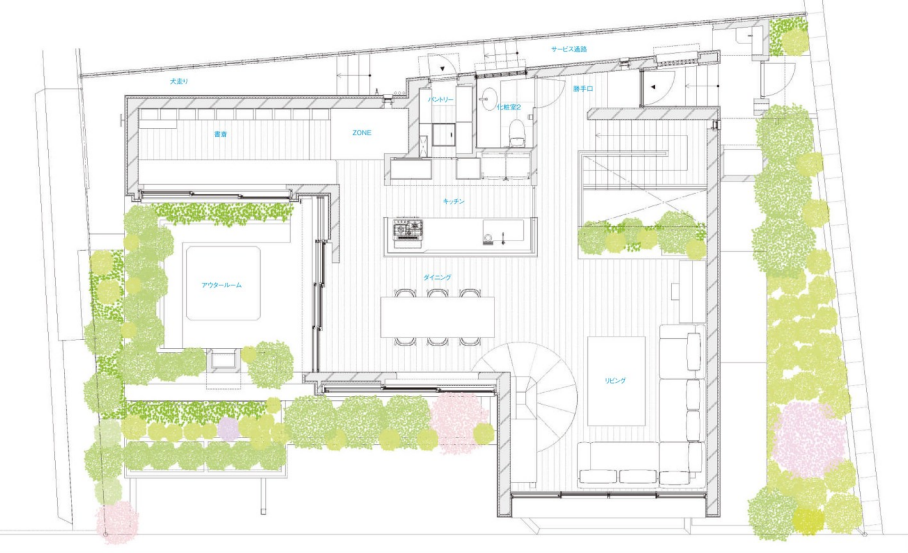
ダイニングの開口部は、サッシが外壁の外側にすべて納まり、全開にすると建物内側から見えなくなる。ダイニングテーブル上部のコードペンダントは制作。右奥には書斎が連続する。

書斎。アウタールームから500mm高い床レベルとし、視線の高さを操作することで落ち着いた居場所としている。左奥に見える黒いモザイクタイルで囲まれた場所は建主の愛犬用のスペース。

サービス通路
犬走り
パントリー
化粧室2
勝手口
書斎
ZONE
キッチン
ダイニング
アウタールーム
リビング

1階配置平面図

廊下
物置2
パウダールーム
ウォークイン
クローゼット
2
ウォークイン
クローゼット
3
洗濯
乾燥室
玄関
玄関ポーチ
ウォークイン
クローゼット
1
主寝室
子供室
シューズ
クローゼット
バスルーム
テラス

地下1階配置平面図　縮尺1：100

地下1階廊下。パウダールームに繋がる扉は全面鏡張りとし、空間を演出する。

洞窟をイメージした主寝室。壁と天井は、珪藻土の掻き落とし粗目仕上げ。各室のデザインコードを統一せず、各室の機能や目的に応じた場をつくることで建物全体に奥行きを生み出している。

建築の地形化＝建築的ランドスケープ

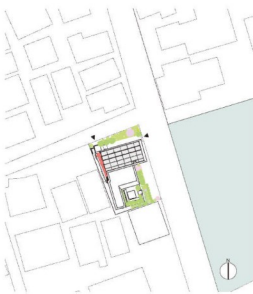
力強く優しさを携えつつ確実な存在感をもった建築を目指してきた。建築の本質は、物質を超えて現れ出づる空間にあると信じてきた。「建築をして空間を語らしめよ。」

建築は直交するふたつの坂道に面し、北側の細い坂道の勾配は強く、それゆえこの建築は急坂から見ると、坂上方の土圧を受ける擁壁の役割を担っていることが理解できる。崖を背負う建築のあり方として、ひとつは車庫（アウタールーム下）・バスルーム・アウタールーム・書斎を貫く安定した段丘状の断面があり、今ひとつはゲストルーム（子供室下）・子供室・リビングの断面として、その下に子供室のテラスを擁しながら崖からリビングの直方体が空中に突出するかのようなあり方があって、その中間として車庫・主寝室・ダイニングが鉛直に層を重ねたあり方がある。これら外観を構成する3つの断面タイプが集合することで、さまざまに変化する凹凸が生じ、複雑に入り組んだ立面が出現する。そこに可能な限りの植栽が配されることで、建築は地形化という概念を所有することになり、土地と一体となった「建築的ランドスケープ」とでもいうべき世界が創出され、土地そのものの特質はより強められることになる。

1階に展開する主空間には、リビング・階段吹抜け・勝手口・ダイニング・キッチン・書斎・ZONE（愛犬のコーナー）などが配され、さまざまな天井高や床レベルをもつ連続した一体空間となって、どこに身を置いても見えざる空間が生じることになり、常にイマジネーションが喚起されることで、広さ（面積）を超えた拡がり（空間）を感じることができる。

ダイニングにはオリジナルのコードペンダント「飛光船」が浮遊しており、引き戸を全開放すれば、屋外の生活をアウタールームで気軽に楽しむことも可能だ。

リビングには階段吹抜けとの間に大きなプラントボックスを配することで、観葉植物を緩やかなパーティションに利用すると同時に、空間を活性化する重要な設えとしている。そして、全面トップライトのコンクリートのルーバー天井が、この空間を決定づけている。自然光は幾層かのフィルターを透過して優しく降り注ぎ、半屋外的な固有の空間が出現した。この筒状の空間はその大窓を前面にある公園に向けて開口し、公園にある大きなケヤキの木を借景とすることで、内部空間は豊かさを増すこととなった。

そこにそれがあって然るべき感覚＝自然の感覚によってデザインされた建築「ODYSSEY」が、建築の大切な目的として、人びとに生きる確信を与えることができたとしたら、それは私たちの大いなる歓びである。　（椎名英三＋椎名祐子）

配置図　縮尺1：1,000

バスルーム。

左：門扉。　右：右手に玄関までのアプローチを見る。左手には、ゲストルームに繋がる扉（左側）と、車庫と連続する自転車置き場に繋がる扉（右側）が見える。

日の暮れ、ダイニングからリビングを見る。

ODYSSEY

所在地／東京都
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子供

設計
椎名英三・祐子建築設計　担当／椎名英三
椎名祐子　松村聡美
構造　yAt構造設計事務所　担当／森部康司
須藤崇

施工
山菱工務店　担当／三浦弘之
設備　島田工業　担当／島田秀幸
電気　桂川電設　担当／桂川勉
造園　箱根植木　担当／保永博文　大塚匠平
長澤仁志

構造・構法
主体構造・構法　壁式鉄筋コンクリート造
基礎　べた基礎

規模
階数　地下2階　地上1階
軒高 9,388mm　最高高さ 9,458mm
敷地面積　222.89m²
建築面積　133.06m²
（建蔽率59.70%　許容60%）
延床面積　269.89m²
（容積率95.97%　許容100%）
地下2階　84.12m²　地下1階　40.57m²
地上1階　96.18m²

工程
設計期間　2017年10月～2019年6月
工事期間　2019年6月～2020年7月

敷地条件
第1種低層住居専用地域　準防火地域
第1種高度地区　住環境保全市街地
道路幅員　東6.18m　北4.00m
駐車台数　3台

外部仕上げ
屋根／アーキヤマデ 塩化ビニールシート防水
歩行・断熱工法
外壁／外断熱　日本プラスター リシン櫛引き
オプス アドバンスコート塗布
開口部／総武　三協アルミ　三和シャッター
LIXIL
床／アウタールーム：アドヴァン MD-0368
ミネラルD　テラス：デッキ材 セランカンバツ
そのほか：LIXIL　PS-300/A-6N 庵路　コンクリート 同時均し

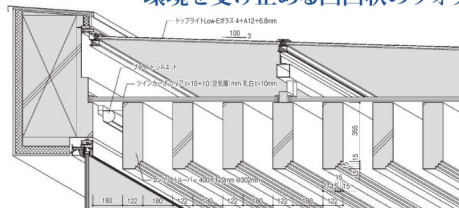
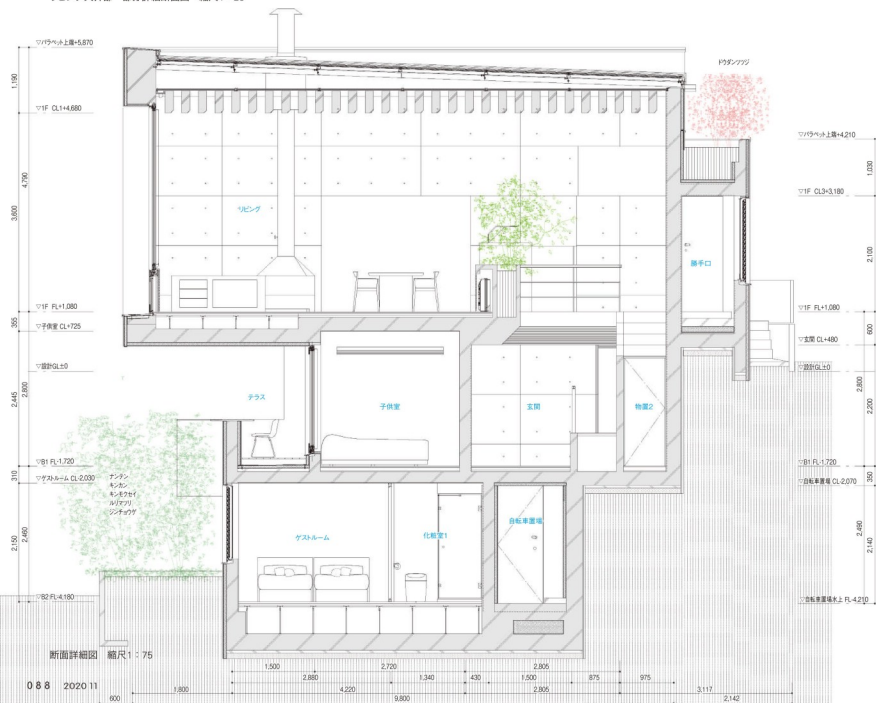
内部仕上げ
玄関　廊下　リビング　ダイニング　キッチン　書斎
床／岡崎製材　ブラックチェリーフローリング
壁／コンクリート打放し
天井／コンクリート打放し　コンクリートルーバー

主寝室
床／岡崎製材　ブラックチェリーフローリング
壁・天井／富士川建材工業　珪藻土レーヴ
ごて仕上げ　掻き落とし粗目

子供部屋
床／岡崎製材　バーチフローリング
壁・天井／ウレタン塗装

設備システム
空調　冷暖房方式／ルームエアコン
換気方式／第3種換気
その他／床暖房
給排水　給水方式／直結給水方式
排水方式／直結排水方式
給湯　給湯方式／ガス給湯方式

撮影／新建築社写真部

Space in Detail
環境を受け止める凸凹状のヴォリューム

リビング天井部　部分詳細断面図　縮尺1：25

断面詳細図　縮尺1：75

北東側夕景。

敷地北側の坂道からテラスを見る。テラスの手摺りには楕円形のティーテーブルが設置されている。

2020年9月の「ブルーボックスハウス」。鉄筋コンクリート造（地上1階の一部木造）の箱型のヴォリュームが、多摩川に面する崖地に突き刺さるようにして建つ。竣工してから49年、4代目となる現在のオーナーが、宮脇檀建築研究室の所員でこの住宅の設計を担当した椎名英三氏に相談し、竣工時の青と緑の外壁が復元された。

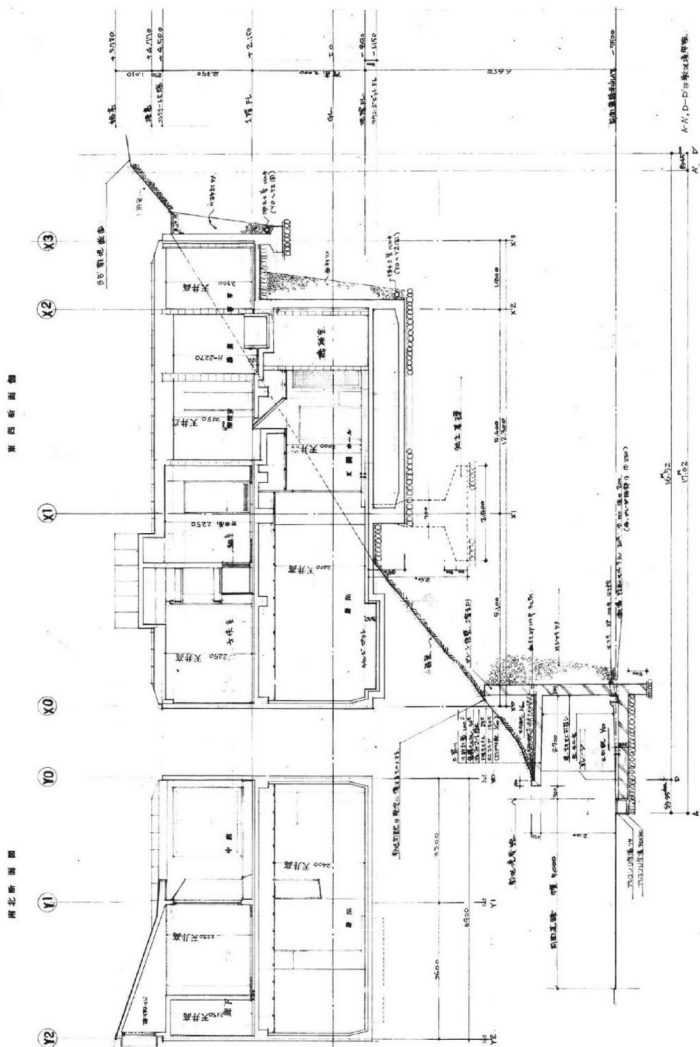
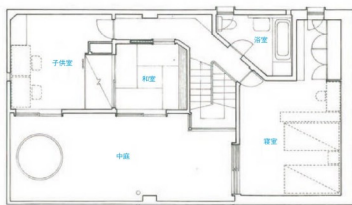
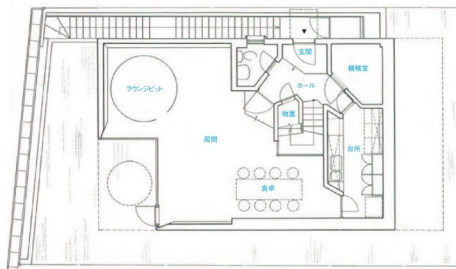
記事

住み継がれる住宅の行方

竣工当時の色を取り戻す

ブルーボックスハウス　1971年

宮脇檀＋椎名英三／宮脇檀建築研究室

断面図の原図（図面提供：有限会社宮脇檀建築研究室 宮脇彩）

居間から西側斜面下に広がる街並みを望む。現在のオーナーと椎名氏。かつては窓外に竹が植えられており、円形の吹抜けを通過して中庭に突き出していた。現在ではその吹抜けは塞がれている。竣工時の建築基準法では地下室は容積に加算されなかったため、標準地盤面を斜面の中央に設定することで、地下1階、地上1階の建築としている。居間は地下1階にあたる。

竣工時1階平面図

竣工時地階平面図　縮尺1：150

上：ラウンジピット。床レベルは居間から300mm低い。　下：ラウンジピットと地盤面の隙間。

論考

ブルーボックスハウスの頃

椎名英三（建築家）

宮脇さんは悩んでいた。
1966年、30歳という若さで生涯の最高傑作といえる「もうびいでぃっく」（『新建築』6701）を完成させ、翌年に「あかりのや」（『新建築』8009別冊）を発表し、宮脇さんは若手建築家として頭角を現していた。しかし、東京大学大学院で同期であった原広司さんを強く意識していた。原さんはそれまで追求していた「部分と総体の論理」を、『建築に何が可能か－建築と人間と－』（1967年、学芸書林）で「有孔体の理論」として結晶化させると同時に、その理論を実践した「伊藤邸」（1967年）や「慶松幼稚園」（1968年）などを立て続けに発表していた。宮脇さんは、「論理的であるよりも先に手が勝手に動いてしまう」とよく言っていたのだが、原さんのように建築をつくっていく理論がほしいのだとも言っていた。しかし、その後宮脇さんは、僕が担当者として出向していた大阪万博の基幹施設の設計部でプライマリー・ストラクチャー *1というアートに触れたことで、強いインスピレーションを感じたのだった。
1968年11月、磯崎新さんの紹介で「秋田相互銀行盛岡支店」（『新建築』8009別冊）の設計が開始された。初めての3階建て、延床面積815m^{2}という事務所始まって以来の大規模な建築だった。最年少であったが僕が担当し、図面は所員全員で描いた。12月になると宮脇さんは、あの北国のアーケードのある暗色の街並みに対して、「舞い降りた鶴のように美しい建築でなければならない」と言って、空さえも暗いダークな街並みの中に小さな黄色い立方体が描いた。宮脇さんは、渇望していた理論*2を構築できる建築をついに見つけたのだ。その後の宮脇さんのスタイルとなるプライマリー・アーキテクチャーが誕生した瞬間だった。

混構造ボックスシリーズの原点

1970年2月、宮脇さんは友人である1964年の東京オリンピックの公式ポスターの写真を撮った新進気鋭のカメラマン、早崎治さんの自邸を設計することになり、この土地に出会うことになった。その時のことを次のように書いている。「およそ住宅の建ちそうもない、事実その並びには1戸も建っていない急な斜面にふたり共惚れ込んでしまった。僕も彼もとにかく当たり前の家を建てる意志はなかったし、この敷地は当たり前の家を拒否しているところがよかった」*3。かくして「ブルーボックスハウス」の設計が始まった。担当者を決める時、当時25歳の僕は早崎さんに「僕は建築に命を賭けている！」と言った。早崎さんは「ダンちゃん*4、俺の家の担当は、この命を賭けているヤツにしてくれ！」と言ってくれた。宮脇さんの口癖「カッコよければすべてよい、かっこ悪ければすべて悪い」は、早崎さんも同じだったのだ。
この敷地は当時、法規制により建築面積および延床面積は共に18坪以下であった。当時は地下室は容積に算入しないということで、建築物が周囲に接する平均地盤面を算定し、地階が決まるという仕組みだった。当初宮脇さんはプライマリー・アーキテクチャーの方法論を使わず、今までのやり方で設計していたのだが、早崎さんが要求する床面積を確保できず、上記床面積算定の方法を利用してプライマリーな箱を斜面に突き刺し、地下室で面積を稼ぐ方法を模索することになった。これは早崎さんが「この土地に柱を建てて家をつくったら俺もあんたも笑われちゃうぜ！」と言ったことに応えたものでもあったのだが、建築指導課の係長は「地下室が空中に飛び出しているのはどうしてもおかしい」と呟くのだった。
建築の外形は、開口部の開け方が難しく容易には決まらなかった。僕は宮脇さんに、崖から飛び出させた直方体の一部を切削してベランダを設けた案を提案した。宮脇さんは即座にベランダ部分を取り去り、現状の力強い形態をつくり出したのだった。宮脇さんは、外部を単純化する代わりに、内部のプランは真っ暗闇でも動きやすい角度にしようと言った。また、構造家からの提言で重量をできるだけ軽減するために、上階は木造となり、結果的に混構造となった。
そのような経緯で1971年3月に、混構造ボックスシリーズの原点とでも言うべき住宅「ブルーボックスハウス」（『新建築』7110）が完成した。その年の11月には「松川ボックス」（『新建築』8009別冊）が完成した。「松川ボックス」は外殻を不変のコンクリートでつくり、それに対峙すべき存在として内部に可変の木造を構築するという混構造の、今までにないコンセプトによって創出された記念碑的な建築となった。しかし、内部のコンクリートはプラスターの白で、木造部分の壁も白く塗装されることで、コンクリートと木造の明確な対比は回避され、優しさを携えた内部空間となった。それが宮脇さんの混構造ボックスシリーズだった。
この混構造ボックスシリーズは、1983年につくられた「中山邸」（『新建築』別冊9008）に至り、ボックスは四散し、屋根には瓦屋根が載せられ、初期のコンセプトから乖離し終焉を迎えることになった。

外壁　色の再生

今回の外壁塗り替えについては、住宅遺産トラストから今年の5月末頃に連絡をいただいたことから始まった。現在のオーナーである菅泉さんが外壁の色をオリジナルの色に再生したいというのだ

『新建築』1971年10月号初出掲載誌面

北側から見上げる。斜面から突き出されたキャンティレバーの出幅は5,100mm。北側の外壁だけ緑色に、そのほかは青色に着色されている。

が、相談に乗ってほしいということであった。日本塗料工業会の色見本帳の写真が添えられていた。菅泉さんは4代目のオーナーであり、ファッション関係の仕事をされていた。「ブルーボックスハウス」の前衛的かつモダンなデザインに感動して購入されたということであった。実際に生活してみると、あたたかみがあって居心地がよく、暮らしてから宮脇さんの昔の本や雑誌を読んで、「カッコよければすべてよい」という言葉に、単なる表層的ではない深みを感じ共感されたと言う。これまで外壁は、白く塗られた時もあり購入時には淡いブルーであったが、菅泉さんは来年築50年を迎えるにあり、これを機にオリジナルの色に戻し文化庁の登録有形文化財に申請をしたいと思われたのだ。

さて、オリジナルの色は見本帳からは見つからなかったが、宮脇さんはDICの色見本帳を使っていたことを思い出し、記憶を頼りに探し求めた。もし間違っていたとしたら、宮脇さんごめんなさい。なぜ外壁をブルーとグリーンの色にしたのか、宮脇さんに聞くのを忘れていたことに今さら気づいた。ブルーボックスに再訪すると、さまざまな思い出が浮かび上がってくる。外壁は緑に溶け込むべくダークグレーがよいと宮脇さんに提案したのだが、プライマリーは原色だと言って否定されたこと、ガラスボックスの階段をダイニングに突出させ、宮脇さんにすごく褒められたこと、建築が多摩川の真ん中まで流された夢を見て、真夜中にはっと目覚めた時、外が豪雨だったこと、養生シートがとれた時ギャオーと叫んだこと……など、思い出深い仕事だった。

*1：1960年代に発案された原色（プライマリー・カラー）で彩色されたミニマルな形態をもつ彫刻、もしくはその傾向。
*2：『建築文化』1970年8月号
*3：『都市住宅』1972年6月 住宅第2集
*4：宮脇さんは親しい人からは音読みして「ダンちゃん」と呼ばれていた。ダンディーな宮脇さんに相応しい愛称だと思った。

プライマリィ・アーキテクチュアとしてのブルーボックスハウス

月明と数寄

Getsumyou to Suki
神奈川県

川口通正建築研究所
Michimasa Kawaguchi Architect
& Associates

母屋の南西側のインナーテラスから離れを見る。敷地は北側の平地と南側を流れる川に向かって下る斜面にある。先に建てた母屋の床レベルに合わせて離れの床、およびプロポーションを調整している。屋根は銅板平葺きとし、離れの主屋は一文字瓦葺きで3.5寸勾配の大屋根とした。下屋屋根（土庇）は銅板一文字葺きで2.5寸勾配。地階ホール屋根と露天風呂の塀屋根を含め高さをなるべく下げて、インナーテラスとテラスを視覚的に繋げている。

離れから母屋へ続く渡り廊下。あえてクランクさせて長い動線をつくり、多様な庭の緑を楽しむため壁面はガラス張りとしている。棟木を受けている繋ぎ梁は六角栗なぐり材で下小屋で曲がり具合を決めた後、数寄屋大工が1本ずつ加工して現場に搬入。天井高さは丸太桁天端を2,424mm（8尺）、棟木天端を2,742mm（9尺5寸）としている。

自然と呼応する佇まい

敷地は自然豊かな古都にあり、南側前方には山を抱え、その足元に川がゆっくりと流れている。都心に住む建主がゆくゆくは拠点を移すことを視野に入れた別荘として母屋の計画が始まり、途中、売りに出た隣地を購入し、離れとして数寄屋を建てることとなった。日本の伝統的な建築文化を未来に残したいという建主の強い意思から生まれたプロジェクトである。

私は兼ねてから日本に現存する木造建築の古い集落や蔵、社寺、茶室、旅館などにおける外部空間と内部空間の調和のあり方に注目してきた。そこには自然と建築がお互いを引き立て合い、双方がより一層美しく見える姿があるからである。今回の計画でも、母屋と離れそれぞれからの視界に他方の建築をどのように切り取るのか、細心の注意を払った。

まず最初に考えたことは、新しい建築をこの自然にいかに馴染ませるかである。敷地にもともとある大木はなるべく避けて配置し、開口の大きさと位置は、樹形をどのように生け採るか、何度も敷地に立ち景観を確認しながら決めていった。床レベルは川側へ緩やかに下っている地形を生かし、緑を効果的に採り込むよう少し高めに設定している。

また、母屋では秋田スギを用い、メートル法の現代的大空間を考え、離れでは吉野ヒノキと紀州ヒノキを用いて尺貫法の数寄屋工法に現代の技術を取り入れて設計をした。2棟は異なる佇まいながらも中庭を介して棟の向きを同じにし、母屋から決まった床レベルに合わせて離れのプロポーションを調整し、勾配の異なる屋根を架けて、周辺環境と調和させることを試みた。そうして寸法規準と木材の質、木材架構の比例が異なる建築が敷地内で一群となり、その間にある庭、露地、中庭、濡れ縁、軒下の外部空間、テラスが渡り廊下を挟んで内外空間の相互に貫入する。クランクする渡り廊下を通って、かつての日本の外廊下のように母屋と離れを行き来する、移動体験の豊かな空間とした。

技術を育み継承する

この住宅の離れをつくった数寄屋大工たちは棟梁以外、30代の青年だ。とてもきめ細やかな仕事ぶりで、棟梁から職人の技をしっかり受け継いでおり、伝統技術に誇りをもっている。しかし近年、建築は経済性に偏り過ぎて早くつくることに主眼が置かれるようになってしまい、技のある大工と職人と、その活躍の場が減少していることが心配であった。そこでこの仕事では、腕のよい職人たちの技を最大限に引き出し、建築として結晶させることをひとつの目標とした。

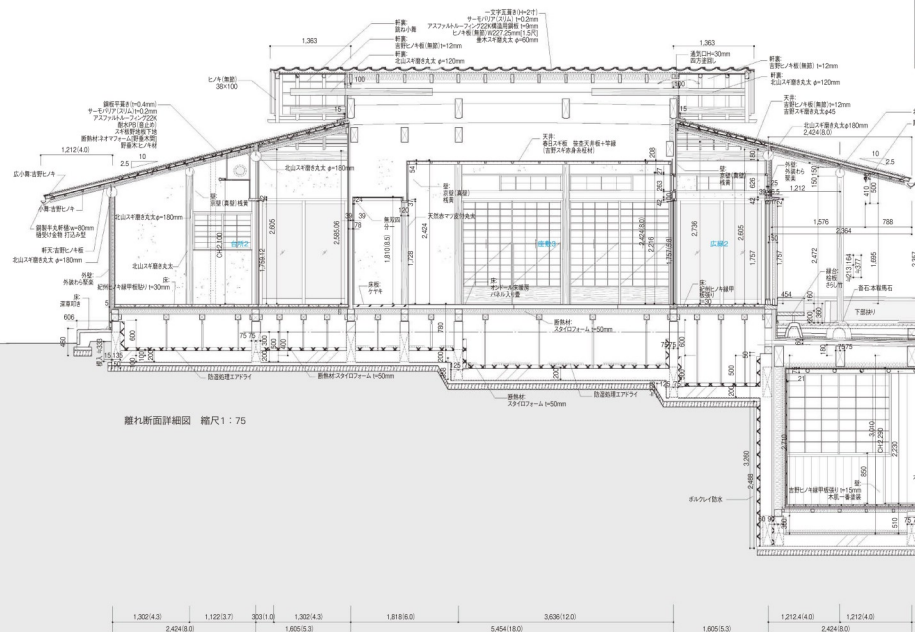
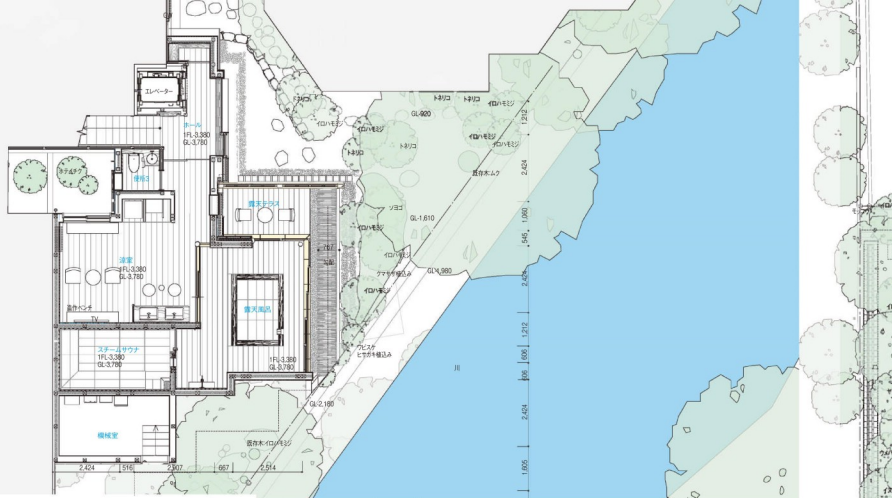
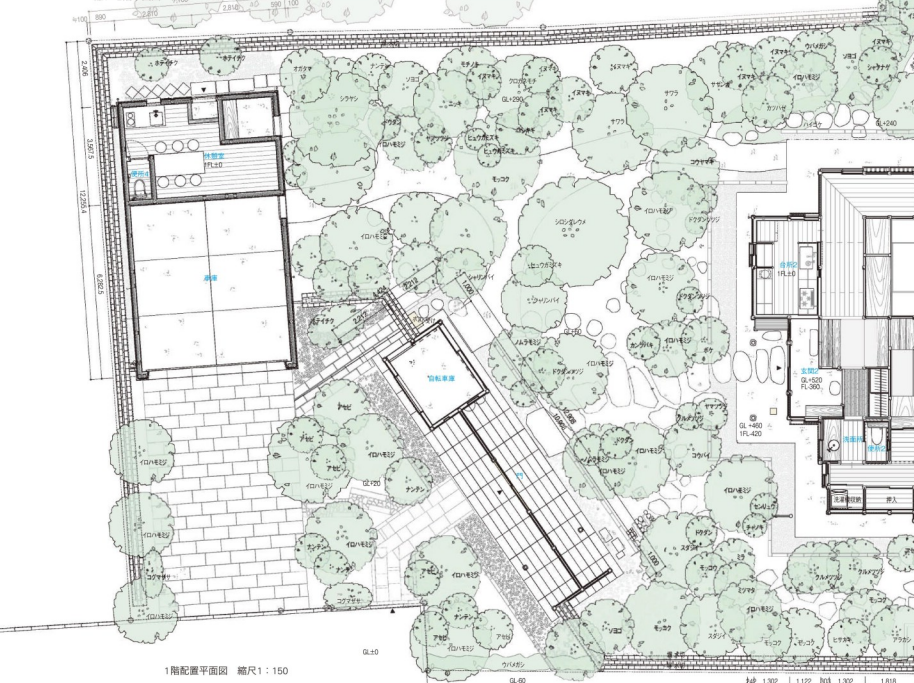
敷地形状の関係で、工事車両を複数入れることができなかったこともあり、母屋、離れ、門、車庫と奥から建てていかざるを得ず、完成までに7年の歳月を要したが、この歳月を経て、建築職人たちの技と心意気を十分に知ることとなり、その可能性を改めて感じたのである。今後、こうした建築をいかにつくっていけるか、われわれ建築家の課題でもある。

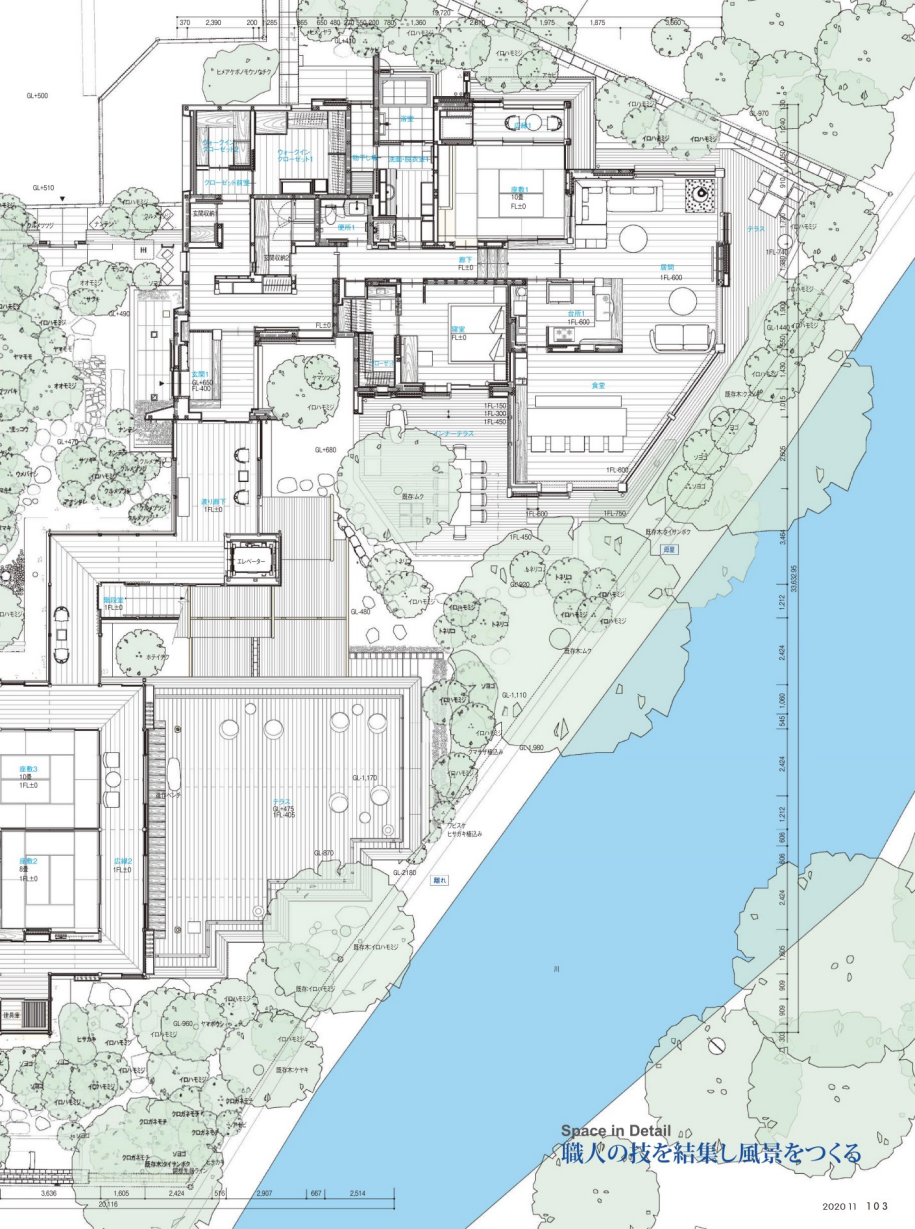
毎年夏になると、建主は川に数百匹の蛍を放している。このような風景は日本人がこよなく愛してきたものだ。季節ごとの歳事が自然と行われるような住宅をつくりたい。そして人びとにそのような生活文化を受け継いでほしいと願っている。

（川口通正）

離れ断面詳細図　縮尺1：75

離れの広縁2。左手に二間続きの座敷を、右手のテラス越しに母屋を見る。離れ全体は、べた基礎にワイヤーホールダウン金物を用いて柱を固定し、各部材は見えない部分でハンガーボルトで締め堅牢なつくりにしている。造作材は伝統的な数寄屋建築で用いられている切り目胴付き納まりで仕上げている。広縁内法高さは1,757mm（5尺8寸）で天井高さは低い所で2,412mm（8尺）で高い所で2,736mm（9尺3寸）にした。

離れのテラス周りの重ね屋根の近景。銅板コーナーは伝統的なはまぐり納めにし、雨樋は最下段の屋根に付けている。

離れ地階平面図　縮尺1：150

1階配置平面図　縮尺1：150

Space in Detail
職人の技を結集し風景をつくる

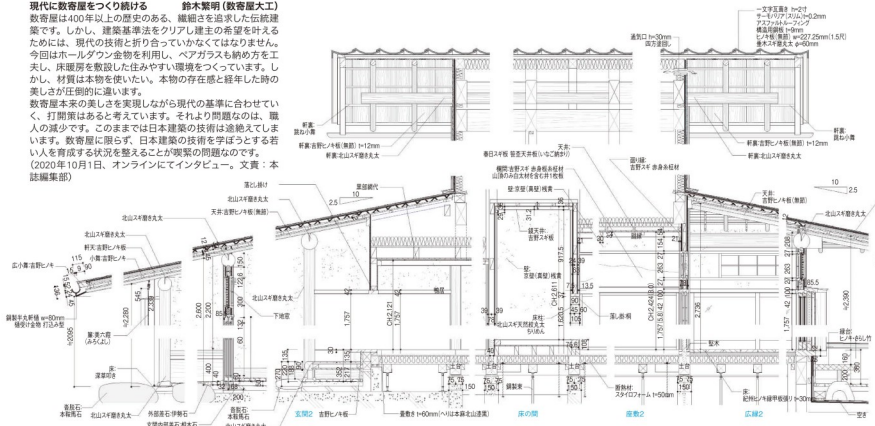
現代に数寄屋をつくり続ける　　　　**鈴木繁明（数寄屋大工）**

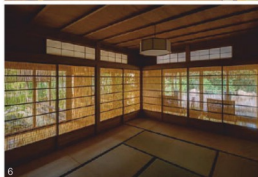
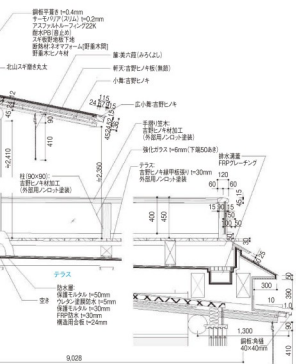
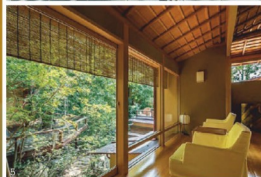
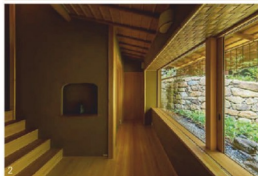
数寄屋は400年以上の歴史のある、繊細さを追求した伝統建築です。しかし、建築基準法をクリアし建主の希望を叶えるためには、現代の技術と折り合っていかなくてはなりません。今回はホールダウン金物を利用し、ペアガラスも納め方を工夫し、床暖房を敷設した住みやすい環境をつくっています。しかし、材質は本物を使いたい。本物の存在感と経年した時の美しさが圧倒的に違います。

数寄屋本来の美しさを実現しながら現代の基準に合わせていく、打開策はあると考えています。それより問題なのは、職人の減少です。このままでは日本建築の技術は途絶えてしまいます。数寄屋に限らず、日本建築の技術を学ぼうとする若い人を育成する状況を整えることが喫緊の問題なのです。

（2020年10月1日、オンラインにてインタビュー。文責：本誌編集部）

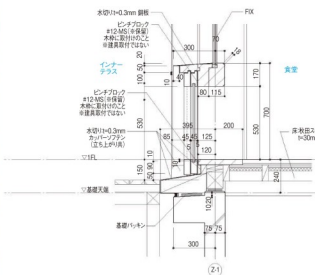
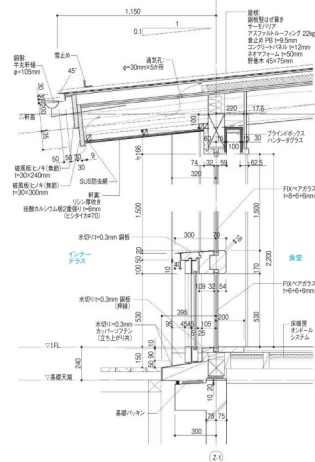
離れ部分断面詳細図　縮尺1：50

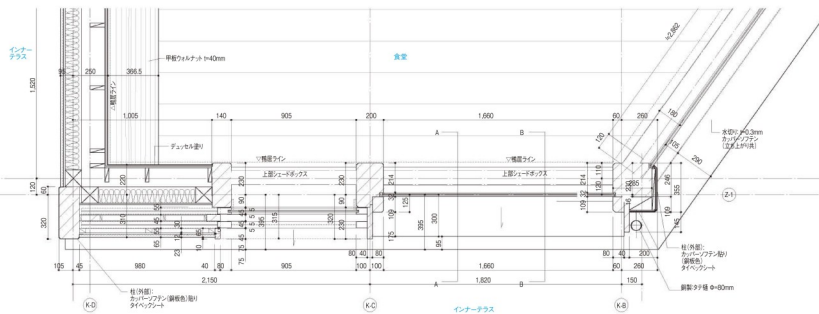
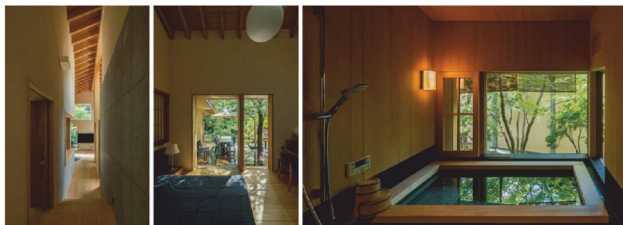
1,212(4.0)　1,302(4.3)　1,848.3(6.1)　1,787.7(5.9)　4,545(15.0)　1,605(5.3)

テラスから見返す離れの夕景。軒の出を2,364mm（7尺8寸）と深くし、簾を下げて川側の風景を横長プロポーションに切り取る。手摺りの高さは450mmで強化ガラスを嵌めている。

銅板平葺き t=0.4mm
サーモバリア（スリム） t=0.2mm
アスファルトルーフィング22K
耐水PB（音止め）
スギ板野地板下地
断熱材:ネオマフォーム[野垂木間]
野垂木:ヒノキ材
簾:美六葭（みろくよし）
北山スギ磨き丸太
軒天:吉野ヒノキ板（無節）
小舞:吉野ヒノキ
広小舞:吉野ヒノキ
手摺り笠木:
吉野ヒノキ材加工
（外部用ノンロット塗装）
強化ガラス t=6mm（下端50あき）
排水溝蓋
FRPグレーチング
柱（90×90）:
吉野ヒノキ材加工
（外部用ノンロット塗装）
テラス:
吉野ヒノキ縁甲板張り t=30mm
外部用ノンロット塗装
テラス
防水層:
保護モルタル t=50mm
ウレタン塗膜防水 t=5mm
保護モルタル t=30mm
FRP防水 t=30mm
構造用合板 t=24mm
空き
銅板:角樋
40×40mm

1：離れ地階の露天風呂。室内の板材はすべて吉野ヒノキ、丸太は北山スギ磨き丸太。浴槽内は十和田石貼り。床レベルが庭より下がっているため、竹矢来で護岸のコンクリートを視線から消している。湯に浸かると対山の風景を下から見上げる。　2：離れの地階。開口越しに、地震時の力を逃がすためにモルタルを一切使わない自然石（木曽石）の穴太積み（あのうづみ）石垣が見える。　3：敷地西側の門。　4：離れの玄関方向を見る。　5：母屋と離れを繋ぐ渡り廊下。中庭を介して左に母屋を、右に離れを見る。　6：離れの座敷3。よしずの建具は季節によって障子と入れ替える。　7：離れの座敷2。床柱は北山杉天然絞丸太（ちりめん）。天井は春日スギ笹杢天井板。欄間は東北の山をイメージしたスギ糸柾源平板。

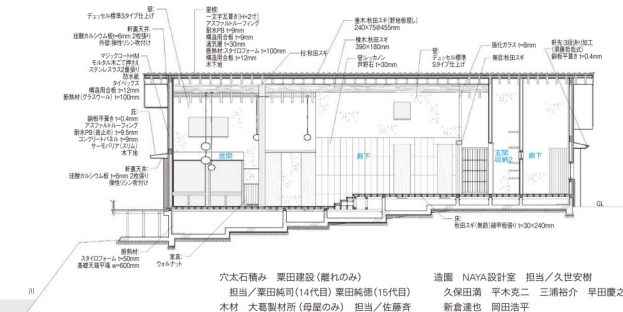
母屋の居間。南側に流れる川を望むテラスを張り出し、上部を切ったクスノキの幹や向こう岸の緑を開口によって切り取る。天井高は化粧垂木240×75mmがバランスよく見える5,900mm。壁面には高さ2,200mmの木製隠し框建具開口を連窓として開け、外部の大木をFIX開口の中に生け採る。

母屋の座敷1。外部の緑を3面に取り込み、障子の開閉により外部の自然を多様に楽しめる。広縁との境には雪見障子が入っている。

母屋の居間から食堂を見る。高さは居間よりも下げ、垂木寸法は母屋の大屋根の垂木寸法と同サイズとして連続感を出した。

母屋枠回りAA'断面詳細図　縮尺1：30

母屋枠回りBB'断面詳細図　縮尺1：30

母屋の居間横のテラス。食堂を囲んでインナーテラスと繋がる。

母屋枠回り平面詳細図　縮尺1：30

左：母屋の廊下。居間に向かって床を下げ、大空間へと続く。左手前は浴室。　中：母屋の寝室。奥はインナーテラス。　右：母屋の浴室。

母屋断面図　縮尺1：200

月明と数寄

所在地／神奈川県
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子供3人

設計

事務所名　川口通正建築研究所
担当／川口通正　大島祥吾　川口登紀子　道尻賢幸
構造　田中構造建築事務所　担当／彦田重治
設備・電気　担当／川口通正　大島祥吾
外構・造園　NAYA設計室　担当／久世安樹　川口通正

施工

春日建設　担当／伴仲信英　伊藤幹雄　須藤哲哉
基礎　松苗建設工業（母屋のみ）
担当／岩崎圭二　神原忠郎　西山春夫　野崎秀雄
鈴建（離れのみ）　担当／鈴木博　鈴木正美　鈴木勇蔵
大工　河合建築　担当／河合孝　大西国彦（以下母屋のみ）　渡辺利也　渡辺慎一
数寄屋大工　鈴木工務店（離れのみ）
担当／鈴木繁明　鈴木宏　鈴木澄子　鈴木姫子　鹿嶋猛　坂田栄史　坂田玲史　吉田忠正　長谷川昇平
瓦　渡辺瓦　担当／渡辺重幸　富樫美佐雄　木下武男　成海皇基
板金　伸起産業（母屋のみ）　担当／中谷住雄　山田貴三　高見板金（離れのみ）
担当／高見眞平　高見彰
石材　深大　担当／植松時四郎
高倉石材工業（離れのみ）　担当／高倉繁夫　安田浩　安田丈二
穴太石積み　粟田建設（離れのみ）
担当／粟田純司（14代目）粟田純徳（15代目）
木材　大葛製材所（母屋のみ）　担当／佐藤斉　佐藤千賀子
材木屋　山長　担当／榎本長治　真鍋淳弘
左官　渡部工業　担当／渡部龍彦　渡部信幸
勝又左官工業所（離れのみ）　担当／勝又久治　勝又雄一　林左官（離れのみ）　担当／林健一
金属　ダイシン　担当／新沢忠　髙橋忠和　髙橋誠司　諸星工芸　担当／諸星正人
ガラス　ダイシン　担当／大森則男　戸部大輔　瀬戸大輔
畳　三橋畳店　担当／三橋雅美
木製建具　根津の樹（母屋のみ）
担当／田辺克弘　田辺友樹
河合建築（母屋のみ）　担当／大西国彦
田中建具（離れのみ）　担当／田中利男　田中成
トクエイ（離れのみ）　担当／望月元徳
塗装　リフォームオノ　担当／小野光一　小野和夫
家具　丸正木芸　担当／流石正　流石アヤ子
襖　東京松屋　担当／富永久美子　春原敏雄（母屋のみ）
金物　堀商店　担当／犬塚かのこ
室金物（離れのみ）　担当／室公博
鉄作品　クロヤギワークスタジオ（母屋のみ）
担当／佐藤亮司
衝立蛍硝子制作　藤原陶房　担当／藤原郁三　藤原孝子
電気設備　メイテック　担当／松井誠
齊藤正宏　大竹雄一　髙島卓郎　小沢勉
給排水衛生ガス設備　東眞水道工務店
担当／眞通勝　眞通智士　眞通美津子　山田真一　小松和彦　成田直江　清水滿路
空調設備　光空調　担当／木村康隆　對馬俊一
床暖房設備　オンドールシステム
担当／片岡恭一
薪ストーブ・サウナ　メトス　担当／辻慎一
神奈川産業（母屋のみ）　担当／伊藤倫邦
外構　新井土木（離れのみ）　担当／新井敏行
造園　NAYA設計室　担当／久世安樹
久保田満　平木克二　三浦裕介　早田慶之　新倉達也　岡田浩平

母屋

構造・構法

主体構造・構法　木造在来工法
基礎　べた基礎

規模

階数　地上1階
軒高 5,675mm（要敷地高低差測量）
最高高さ 7,157mm
敷地面積　455.97m^2
建築面積　180.58m^2
（建蔽率39.60％　許容40％）
延床面積　174.04m^2
（容積率34.06％　許容80％）
1階　155.26m^2　車庫　18.78m^2

工程

設計期間　2011年7月～2013年5月
工事期間　2013年7月～2014年10月

敷地条件

地域地区　第1種低層住居専用地域　法第22条区域　法第23条区域　景観地区（埋蔵文化財包蔵地域）
道路幅員　西北4.792m（私道）　駐車台数1台

外部仕上げ

屋根／大屋根：一文字瓦葺き h=2寸　下屋根・庇：銅板平葺き t=0.35mm
外壁／マヂックコートHM仕上げ（フッコー）
開口部／木製サッシ（ベイヒバ材加工）
インナーテラス／イペ材 90×30mm 外部用ノンロット（三井化学産資）
塀／マヂックコートHM仕上げ（特注色）

内部仕上げ

玄関1

床／芦野石 t=30mm 900×300mm
壁／デュッセル 標準Sタイプ仕上げ（フッコー）
天井／スギ縁甲板（無節白身板）t=15mm 垂木（秋田スギ 無節 75×240mm @455mm 野地板現し）

居間　食堂

床／秋田スギ（無節）縁甲板張り t=30×240mm
壁／デュッセル 標準Sタイプ仕上げ
天井／スギ縁甲板（無節白身板）t=15mm 垂木（秋田スギ 無節 75×240mm @455mm 野地板現し）
照明／ペンダント（ヤマギワ 756GLO-BALL）
暖炉／ METOS CONTURA C685 炉壇 コンクリート 二とんぼ 斫り仕上げ

座敷1

床／オンドール床暖パネル入り畳
壁／四国化成 けいそうモダンコート内装 腰壁（和紙張り h=210mm）
天井／スギ柾厚付矢羽根網代張り 舟底天井上部（障子 t=30mm）ケンドン式加工（換気扇ルーバー付き）
床の間／床板：龍鬢表畳　床柱：スギ柾大面取り 床框：呂色面皮塗り框 落とし掛け：スギ柾

離れ

構造・構法

主体構造・構法　木造在来数寄屋工法
基礎　べた基礎

規模

階数　地上1階
軒高 4,199mm　最高高さ 6,868mm
敷地面積　909.92m^2
建築面積　276.65m^2
（建蔽率30.41％　許容40％）
延床面積　236.00m^2
（容積率25.24％　許容80％）
地階　86.63m^2　1階　138.69m^2
門　10.68m^2

工程

設計期間　2014年2月～2016年12月
工事期間　2017年2月～2020年7月

敷地条件

道路幅員　西南4.812m（私道）
駐車台数　2台

外部仕上げ

屋根／大屋根・車庫：一文字瓦（h=2寸）葺き
下屋根：銅板一文字葺き t=0.4mm
門屋根：一文字小瓦葺き
外壁／外装わら聚楽（フジワラ化学工業）
テラス／吉野桧縁甲板張り t=30mm 三井化学産資 外部用ノンロット
犬走り／深草叩き t=50mm
開口部／木製サッシ（ヒノキ材加工）
庭土留壁・門／両脇立上り 腰壁 穴太石積み（木・曽石）h=700mm　w=700mm
塀／外装わら聚楽 基礎立ち上がり部 ハツリ仕上げ

内部仕上げ

玄関2

床／深草叩き一部畳敷 t=60mm（へりは本麻 北山 漆黒 石田織物）一部建具庫前 栗ナグリ仕上げ
壁／京壁（真壁）栈黄（富士川建材工業）
天井／吉野ヒノキ板（無節）北山スギ磨き丸太 φ=45mm 一部下がり天井 黒部網代張り

広縁2

床／紀州ヒノキ縁甲板張り t=30mm（山長）
壁／京壁（真壁）栈黄
天井／吉野ヒノキ板（無節）北山スギ磨き丸太 φ=45mm

座敷2（8畳の間）

床／オンドール床暖パネル入り畳
壁／京壁（真壁）栈黄
天井／春日スギ 笹杢天井板 竿縁 吉野スギ赤身糸柾材
床の間／床板：龍鬢表畳　床柱：北山スギ天然絞丸太 ちりめん　床框：呂色塗り框 落とし掛け：キリ 床脇板 ケヤキ

座敷3（10畳の間）

床／オンドール床暖パネル入り畳
壁／京壁（真壁）栈黄
天井／春日スギ 笹杢天井板 竿縁 吉野スギ赤身糸柾材

床の間／床板：ケヤキ
床柱：天然赤マツ皮付丸太　床框：ケヤキ
錆竹　落とし掛け：アララギ（イチイ）

台所2
床／紀州ヒノキ縁甲板張り t=30mm
壁／京壁（大壁）栈黄一部山西黒ジェットバーナー仕上げ
天井／吉野ヒノキ板（無節）北山スギ磨き丸太 φ=45mm 一部さらし竹詰打ち
ガスコンロ／グリル付き三口ガスビルトインコンロ（リンナイ RHS71W15G23R3C-STW）
シンク水栓金物／キッチン用混合栓ハンドシャワー付き（CERA FG33782）

涼室
床／紀州ヒノキ縁甲板張り t=30mm 木肌一番塗装
壁／吉野ヒノキ縁甲板張り t=15mm 木肌一番塗装
天井／吉野ヒノキ板張り（無節）t=15mm 竿縁 北山スギ磨き丸太 φ=60mm
洗面カウンター／洗面器（CERA TRADING DV037462-00）
洗面用水栓金物／洗面用混合栓（CERA TRADING HG71102）

露天風呂
床／吉野ヒノキ t=24mm スノコ 木肌一番塗装
壁／吉野ヒノキ縁甲板（無節）張り 木肌一番塗装 一部十和田石張り t=20mm ハイドロサーム塗布（大壁）
天井／吉野ヒノキ板張り t=15mm 北山スギ磨き丸太 φ=45mm 木肌一番塗装
シャワー水栓金物／壁付けオーバーヘッドシャワー混合栓（Hansgrohe）

門
床／山西黒 本磨き仕上げ
壁／外装わら聚楽
天井／化粧垂木 吉野スギ板張り（無節）北山スギ磨き丸太 φ=45mm

左：西側の門から離れの玄関方向を見る。モミジに包まれるようなアプローチ。古くから古都の風景をつくってきたシイ・マキ・モッコクなどの常緑樹を重なるように配置して、奥深さを出している。　右：母屋の玄関を見る。モミジを中心とした定番の樹木に囲まれた母屋への道のりは、飛石1一歩ごとに変化のある景色が楽しめる。

手付かずの自然と町を繋ぐ

手付かずの山の木々と川のせせらぎに抱かれたこの場所を、尊重して引き立てること、それが終始課題であった。川側の庭は、もともとの風景と一体化して家屋を包み込むように、町側の庭は、別世界へ入っていく繋がりが自然であるように、そしてもともとある木々と違和感なく溶け込むように計画した。とはいえ、母屋・離れ・渡り廊下・門棟・車庫棟、など多様な見せ場のある建築に導かれての仕事は、自然に動線もヴォリュームも決まって、いつの間にかかたちができていったように思う。スケールの大きい重厚な現代の数寄屋である。同じようにゆったりとした空気を感じられるよう、石や植栽の大きな繋がりや抜けの塩梅はもっとも気を使ったところである。

（久世安樹／ NAYA設計室）

設備システム

空調　冷暖房方式／ビルトインカセット型エアコン（ダイキン）
換気方式／ダクトファン
その他／電気床暖房（オンドールシステム）

給排水　給水方式／直結給水方式
排水方式／直結排水方式
その他／スチームサウナ（METOS）

給湯　給湯方式／ガス瞬間給湯方式

撮影／新建築社写真部

配置図　縮尺1：1,500

離れのテラスから母屋を見返す。瓦屋根と銅屋根の集落に木々が点在する様相が意図されている。

魚沼の家

House in Uonuma
新潟県十日町市

伊礼智設計室
Satoshi Irei Architects Office

南東側外観。敷地は豪雪地帯にあり、南東面に田園風景の広がる崖地に建つ。戸外での生活を楽しむため、谷側に流れる川に沿うようデッキを張り出している。デッキは、ベイスギの赤身の無塗装、落下防止を兼ねた奥行きの浅いテーブルを設けている。外壁は魚沼スギ張り。

ダイニング（左）とストーブコーナー（右）。積雪荷重を考慮し約2.7m角のグリッドに沿って柱を立て、機能を緩やかに仕切る。天井高は梁上で約2.3m。2階の床はJパネル36mmのみで、水平面剛性を確保しながら1階の天井も兼ねる。開口部の気密性と壁の外皮性能を高め、薪ストーブを設置することで、窓辺に積極的に居場所をつくっている。

雪国のゼロエネルギー住宅

新潟県十日町は豪雪地帯として知られる。多い年にはひと冬の累積積雪が20mを超えることもあり、冬は雪と格闘し共存する暮らしとなる。まずは除雪の軽減が大きな課題であった。

敷地は東南に田園風景が広がる崖地で、崖の下からは小さな川のせせらぎが聞こえてくる。真南に大きなケヤキがあり、夏の日射遮蔽に有効であると判断し残すことにした。雪国で生まれ育ち、工務店を営む住まい手の要望は、小さな子供たち3人がのびのびと暮らせること、そして気候変動が確実になった今、この地でZEH（ゼロエネルギー住宅）にチャレンジすることであった。

まず考えたのが、外皮性能を高めることである。寒冷地の住まいは断熱と気密が重要となる。今回は壁の中にパーフェクトバリア13Kを充填、さらに同じ厚みを外張りして計240mmの壁断熱とし、屋根は同断熱材を340mm入れている。開口部は断熱上、最大の弱点となる箇所である。制作する木製建具だと気密の確保が困難であるので、既製の木製サッシ（アイランドプロファイルウインドウ）で壁の中に引き込み、全開できるようにしている。このスペックで外皮性能（UA値）0.28（W/m²・K）となる。

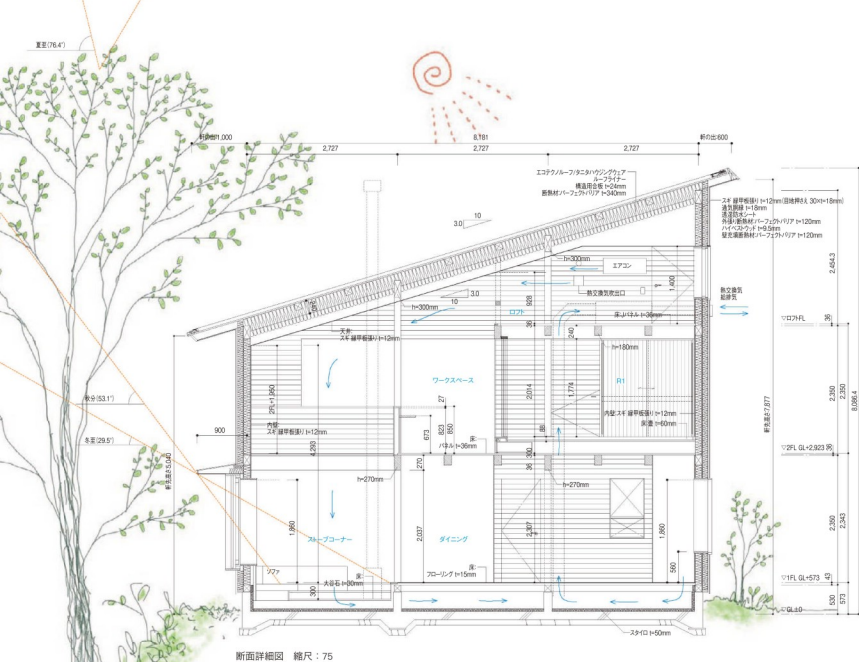
見えない空気と熱の動きをデザインするに当たっては、暖房は薪ストーブのみ、そして冷房はロフトの壁掛けエアコン1台で45坪の居住空間を賄っている。第1種換気設備の空気を床下から回収し、ロフトで新鮮空気と熱交換して吹き下ろす空気の流れが、夏のエアコンの冷風を家の隅々まで運び、冬の暖房を床下にも回し、床の底冷えを解消している。

4畳半のグリッドで耐雪と空間の骨格をつくる

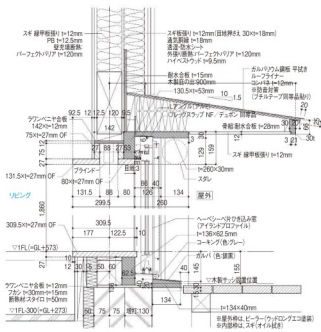
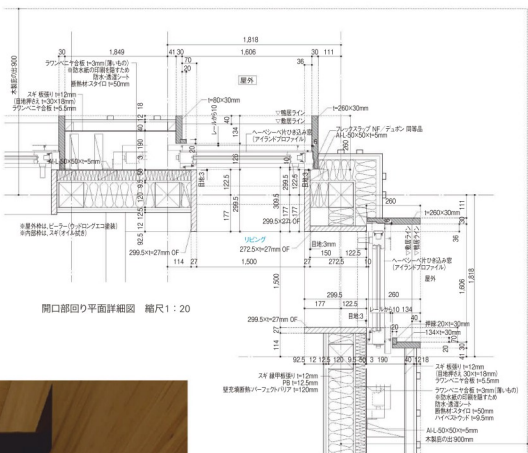
屋根の耐雪荷重を2mで構造計算した。そのために4畳半のグリッドで建築の骨格を構成し、柱を増やした。雪の重みに耐え、かつ、日常の暮らしの中に空間の規律が生まれた。さらに、地元の魚沼スギで外壁をまとめ、周辺の民家と

Space in Detail

豪雪地帯で四季を楽しむ

断面詳細図　縮尺：75

佇まいを揃えた。内部も無垢板でラフに仕上げ、小さな子供たちの腕白ぶりにも負けない建築とした。住人は雪も含めてこの地を楽しみたいとのことであった。雪国では敬遠される大きな木製デッキをあえて設け、目の前に広がる田園風景を取り込み、その景色に溶け込むような、おおらかに暮らせる住まいとなった。

気候変動、地球温暖化が無視できない状況となる中で、これからも建築家として環境への配慮に正面から向き合い、自分らしい表現に取り組んでいきたい。　(伊礼智)

開口部回り平面詳細図　縮尺1：20

ストーブコーナーからキッチンを見る。木製の引き込み建具はアイランドプロファイルウインドウを使用。ストーブコーナーの床は大谷石で、冬には薪ストーブの熱を、夏にはロフト階の設置した冷房の冷気を窓側床のスリットから取り込み、建物全体に巡らせる。

開口部回り断面詳細図　縮尺1：20

ストーブコーナーとテレビコーナー。

魚沼の家

所在地／新潟県十日町市
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子供3人

設計
伊礼智設計室　担当／伊礼智　福井典子
構造　リーフ・アーキテクツ・デザイン
担当／関野淳

施工
フラワーホーム　担当／鈴木祥仁
大工　水成工務店　担当／水落清
基礎　涌井工業　担当／涌井紀秀
電気　ヒグマ電設　担当／田村茂樹
塗装　井沢塗装　担当／井沢元博
左官　樋口左官店　担当／樋口智紀
鋼製建具　柳窓業　担当／柳信雄
内部木製建具　角山建具　担当／角山直哉
家具工事　Nem 担当／菅野健
建材・資材担当　魚沼木材協同組合
担当／石沢陽一
造園　志賀庭花園　担当／志賀孝

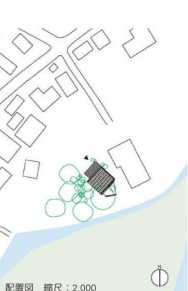
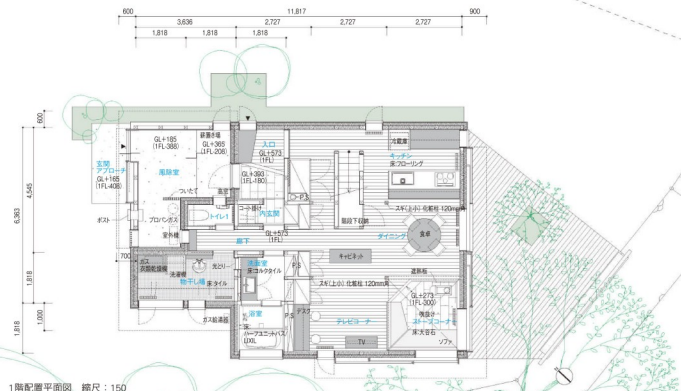
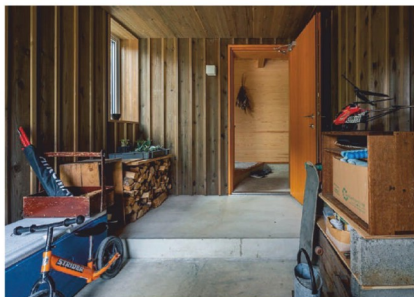
構造・構法
主体構造・構法　木造在来工法
基礎　べた基礎

規模
階数　地上2階
軒高 5,040mm・7,877mm
最高高さ 8,054.3mm
敷地面積　761.25m²
建築面積　90.064m²
（建蔽率11％　許容　制限なし）
延床面積　136.336m²
（容積率17％　許容　制限なし）
1階　76.844m²　2階　59.492m²

工程
設計期間　2017年10月～2018年2月
工事期間　2018年2月～7月

敷地条件
地域地区　都市計画区域外

外部仕上げ
屋根／エコテクノルーフ（タニタハウジングウェア）
ガルバリウム鋼板平葺き 竪はぜ葺き
外壁／板張り
開口部／片ひき込み窓　トップスイング窓
Nドア（アイランドプロファイル）　YKK AP
APW430

上：ワークスペース。奥の室2は将来的には建具を入れ、個室とすることも考慮される。右手の畳の小上がりの上部はロフト。壁、天井共にスギ縁甲板張り。　左下：物干し場。　右下：ワークスペースからの見下ろし。

配置図　縮尺：2,000

1階配置平面図　縮尺：150

左上：風除室から玄関を見る。風除室は薪置き場であり、除雪のための道具置き場であり、室外機やプロパンガスボンベの置き場でもある。　左下：北西側全景。左手の引き戸を開けると風除室へと続く。
右：北西上空からの俯瞰。屋根は太陽光パネルと屋根材が一体となった製品「エコテクノルーフ」を使用。3寸勾配とし崖側へ雪を落とすことを試みたが、パネルの突起（5mm）が妨げとなってややスムーズではないが、下屋部分は予定通り滑り落ちている。

外構／デッキ
断熱材／エンデバーハウス パーフェクトバリア
スタンダード 13K　屋根：t=340mm　外壁（壁内充填）：t=120mm　外壁（外張り）：t=120mm

内部仕上げ

リビング　ダイニング

床／スギフローリング t=15mm　一部大谷石張り t=30mm
壁／スギ縁甲板張り t=12mm
天井／ Jパネル t=36mm
家具／制作
照明／リビング・ダイニング：ルイスポールセン　吉村順三
厨房機器／
キッチン／制作（伊礼智設計室）
ガスコンロ・オーブン／ハーマン
換気扇（シェード）／富士工業
樹脂製差圧式レジスター／パクマ工業
建築金物／
シンク水栓金物／シゲル工業　TOTO

浴室

床／ハーフユニットバス（共同開発：伊礼智＋LIXIL）
壁／ 22mm角タイル（平田タイル HB-101）
さわら縁甲板張り t=12mm
天井／さわら縁甲板張り t=12mm
照明／ヤマギワ B4033
シャワー水栓金物／ LIXIL

物干し場

床／ 18.5mm角タイル（LIXIL PC-6）
壁・天井／スギ 縁甲板張り t=12mm
家具／制作
設備／ガス衣類乾燥機（リンナイ）
ホスクリーン（川口技研）
洗濯流し／ TOTO

ワークスペース　室1・2

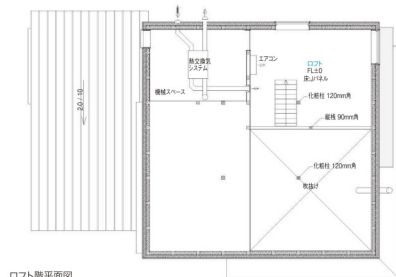
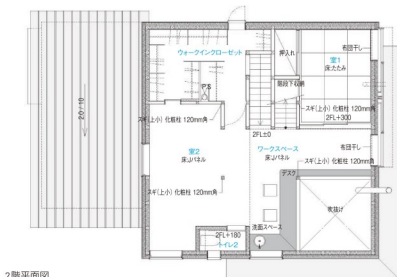
床／ Jパネル t=36mm
室1：畳（縁なし） t=60mm
壁・天井／スギ縁甲板張り t=12mm

設備システム

空調　暖房方式／薪ストーブ　シェイカーストーブ（山林舎）
冷房方式／エアコン
換気方式／第1種換気（全熱交換器 パナソニック）
給排水　給水方式／公共上水道直結
排水方式／公共下水道放流
給湯　給湯方式／ガス給湯方式

撮影／新建築社写真部

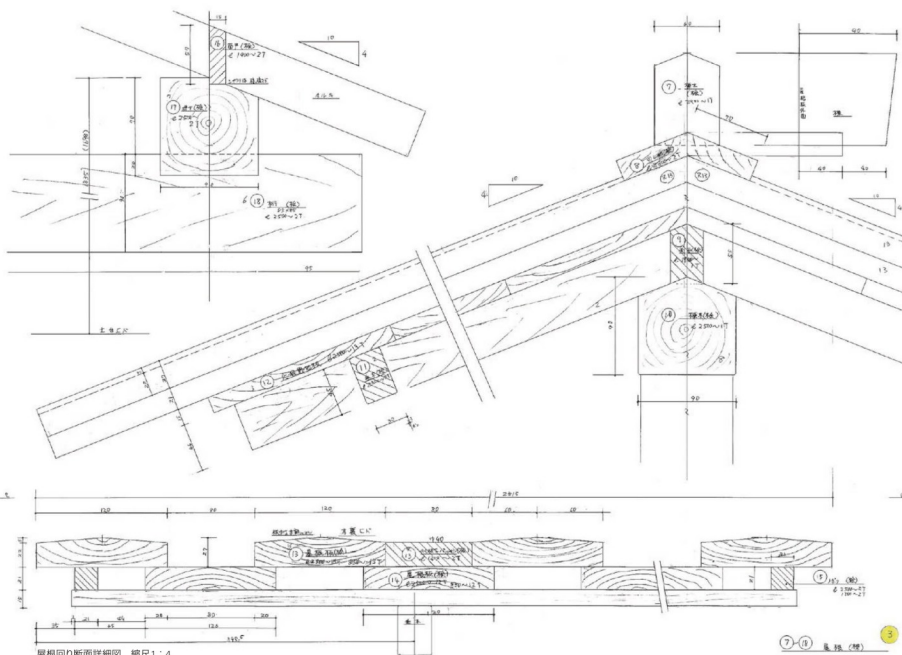
2階平面図

ロフト階平面図

船頭小屋

Ferryman's Hut
東京都大田区

城戸崎建築研究室
Kidosaki Architects Studio

内部から北側を見る。無機的な素材で構築した「Monolith」の中庭に、船頭小屋に着想を得て、有機的な素材で組み上げた1坪の小屋を計画。形態は船頭小屋を踏襲しつつ、日本の伝統建築の技を結集した総ヒノキづくりとしている。

屋根回り断面詳細図　縮尺1：4

小屋内部。腰かけを左右に設えた1畳の土間スペースと、船頭が川の様子を窓から覗き、体を休めるための1畳の小上がりから成る。小上がりにはヒノキの一枚板を使用。天井のみ和船の廃材を用いている。

左：棟木回り。神社建築に通じるディテールとした。　中：屋根の大和葺きは木目を中心に合わせ、噛み合う上下の板の木目を互い違いにすることで、反りが生じた時により強く締まる。
右：東側内部の近景。屋根から落ちる角材の柱は横架材を境に丸柱となり、床の間の精神を表している。丸柱はφ=60mm。

1坪の小屋が包含する無限の世界

「Monolith」（本誌1701）を設計して以来、その対局ともいえる有機的な素材で組み上げられた極小の何かを敷地内につくる必然性を感じていた。それは川崎市立日本民家園に保存されている、菅の渡しの船頭小屋との出会いで確信となった。多摩川に橋が架かっていない昭和初期に、船頭と客ふたりが囲炉裏を囲い、渡しが来るまでのひと時を1坪の空間で過ごした。それが船頭小屋である。この素朴な極小建築に心を奪われた。

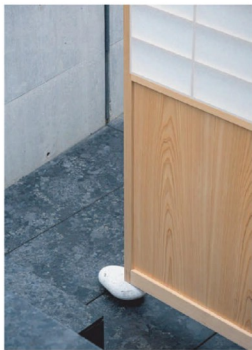
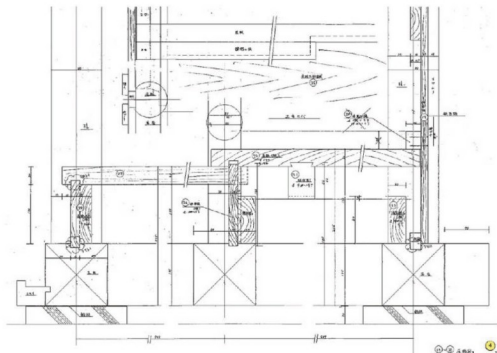
船頭小屋へのオマージュとしてその形態を踏襲しつつ、一方で素材や技術については日本建築の粋を1坪に凝縮した小屋をつくりたいと願った。そこで伊勢神宮などにも通じる総ヒノキづくりとすることで歴史の伝承をとらえ、唯一、天井には琵琶湖から引き上げられた和船の廃材を使用することで守破離を成すことを試みた。

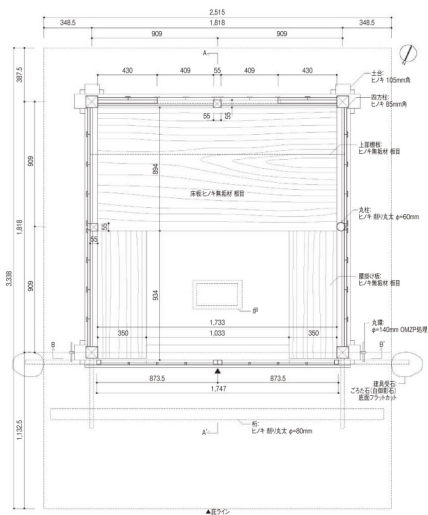
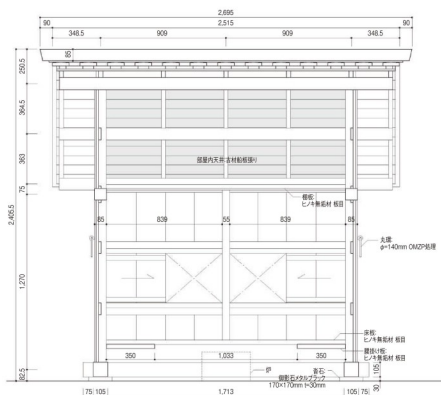
施工は水澤工務店の壺屋棟梁とふたりの大工の手に委ねた。われわれの図面をもとに、棟梁は手書きの原寸図を起こす。木取り、木目合わせ、色合わせなど木くばりをして切り出しにかかる。四季の変化に伴う木の伸縮にも追従する仕口、金物を使わぬ匠の伝統の技の木組みによって、経年に対しても寸分の狂いも生じさせない完璧な建築へと昇華させていく。

1坪の空間で火を囲むように腰かけ、膝を付き合わすことで、そこに絶妙な距離感が生まれる。人が3人集まることで社会が生まれるといわれるが、その瞬間を体験するのである。これは亭主が客人をもてなす場としての茶室とは似て非なるまったく異質の空間である。茶室は自然との関わり合いも作為的に計算され演出される。これを受け入れ尊ぶことでつくり上げる芸術としての美しさがある。一方で、船頭小屋は庶民の生活における必要性から自然発生的に生まれた1坪の極小空間である。芸術的意義とは対極にあり、根源的ともいえる実用性を求めた結果が船頭小屋で、たとえばその大きさひとつとっても川の氾濫時の移動に備えるという、自然の営みに応じた必然性から自ずと決まっていったものである。そこに自然が導いた純粋の美を感じずにはいられない。人間のごく自然な営みの姿の原点がここにはあるように感じる。必然性に裏付けられ、自然が導いた純粋美と匠の技の結晶であるこの小屋が、その極小空間の中に品格ある遊び心の芳香が漂う壮大な宇宙を生み出すことを願っている。　（城戸崎博孝）

Space in Detail

ヒノキと伝統技術を用いた1坪の小屋

床板回り断面詳細図　縮尺1：7

開け放った障子戸は敷居をはみ出し、河原の石で支える。

「Monolith」の中庭から船頭小屋を見る。

平面図　縮尺1：30

BB'断面図　縮尺1：30

船頭小屋

所在地／東京都大田区

主要用途／ 1坪小屋

設計

城戸崎建築研究室　担当／城戸崎博孝　田中祥吾

施工

水澤工務店　担当／池本和彦　栢沼正樹

大工：壺屋健二　壺屋隆士　田上優

建具　山川工芸　担当／山川進

金属　一尾建創工業　担当／一尾一樹

石　安藤大理石　担当／西澤健太

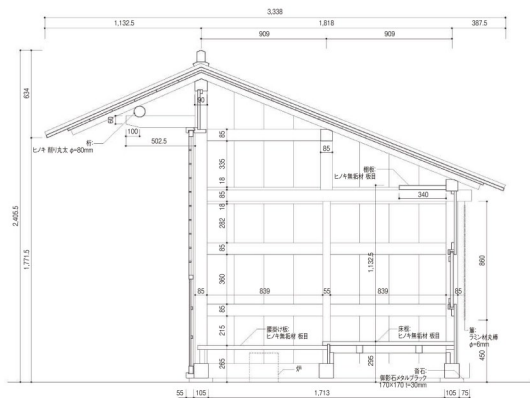
構造・構法

主体構造・構法　総ヒノキ伝統構法

基礎　礎石

規模

階数　地上1階

東側の内観と軒回り。「招き屋根」と称される屋根形状は、客人を手招きするような設えとなっている。

AA'断面図　縮尺1：30

軒高 2,200mm　最高高さ 2,405.5mm
敷地面積　324.94m²
建築面積　　3.03m²
延床面積　　3.03m²
　1階　3.03m²

工程

設計期間　2019年1月～12月
工事期間　2019年12月～2020年6月

敷地条件

地域地区　市街化区域　準防火地域
　高度地区
道路幅員　北4m　東8m

外部仕上げ

屋根／ヒノキ大和葺き
外壁／ヒノキ羽目板張り
開口部／ヒノキ腰付障子戸
丸環／溶融亜鉛メッキ リン酸処理 OMZP
外壁釘／替折釘

内部仕上げ

床板・腰掛板／ヒノキ無垢板 板目
壁／ヒノキ羽目板張り
天井／古材船板張り
棚板／ヒノキ無垢板 板目
丸柱／ヒノキ削り丸太

撮影／新建築社写真部

撮影：池本和彦

川崎市立日本民家園に設置されている「菅の船頭小屋」。

上：建築と同じ精度でつくられた模型の西側立面。　下：実際の船頭小屋は氾濫の際、東西面に取り付けた丸環に丸太を通して担いで移動させる。

タープ

Tarp
東京都日野市

加藤渓一／スタジオピース
＋HandiHouse project
Keiichi Kato ／ studioPEACEsign
＋HandiHouse project

東側夕景。東側前面道路から約4m高い擁壁上に建つ。敷地の東側は車両基地で、その反対側まで見通せる。西側は擁壁上に住宅地が広がる。約8×13mの長方形平面に架かったHPシェルの屋根は、東側の軒高3,357mm、西側の軒高5,805mmの勾配屋根で、1階リビングと2階子供部屋を緩やかに繋ぐ。

子供部屋からリビングダイニング方向を見る。HPシェルが緩やかな円弧を描く。2階の天井高さは2,187〜2,957mm。天井高が高く、外部に向かって開放的な1階に対して、2階は天井高が低く抑えられ、屋根に囲まれたプライベートな場所となる。

屋根勾配がもっとも急な子供部屋。

書斎・勉強部屋。リビングから子供部屋までの動線に位置する。
東側の腰壁が1階からの視線を遮り、座ると個室のような空間となる。

強さと柔らかさを獲得する

敷地は多摩の丘陵地。目の前は電車の車両基地で、のびやかな眺望が広がる。敷地がかつての丘のままであれば、その傾斜に寝そべり電車を眺める。そしてきっとタープを張る。

タープを張ると瞬時に居場所ができる。鋭角に張れば閉じ、緩めれば開くといった具合に周囲に対しての距離の取り方も自在である。安易に組み立てられ、雨風に耐える強度ももつ。そんな居住性と合理性をもった建築を目指した。

桁梁は平行のまま、切妻屋根から棟木のみを敷地傾斜に合わせ登り梁とした。そこに架かる垂木は徐々に角度をつけ、HPシェルを形成する。傾斜した棟木がブレースと同様の役割をもち、軸組自体で安定する架構となるため、垂木は梁の上に乗せてビスを打つだけで済む。HPシェルがもつ曲面と相まって、軽やかで柔らかな幕を掛けたような天井が実現した。外に出ると、軒先は棟木と逆方向に勾配がつくので、それに沿わせて樋をつけるだけ。豪雨であっても無理なく雨水を受け流す屋根になる。

床は4つのレベルの平場をつくり、山道のように階段でひと続きに繋げる。そこに緩やかな角度の屋根が架かれば、気積が大きくのびやかな団

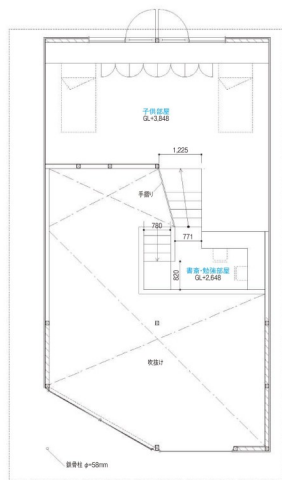
Space in Detail

多様な場と距離感をつくり出すHPシェル

既存階段
寝室 GL+1,448
浴室
洗面 GL+1,448
ポーチ GL+1,276
玄関 GL+1,300
ホール GL+1,448
(上部階段)
トイレ GL+1,448
倉庫・パントリー GL+448
リビング GL+448
キッチン GL+448
ダイニング GL+448
デッキ GL+405
物干竿 φ=32mm
鉄骨柱 φ=58mm

1階配置平面図　縮尺1：120

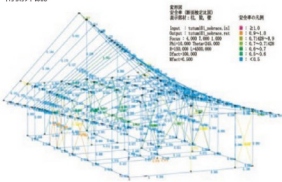
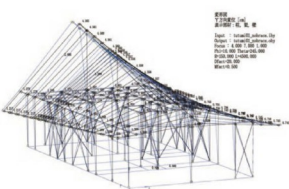
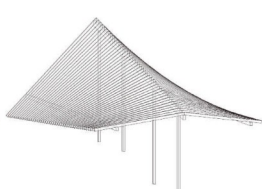
子供部屋 GL+3,848
手摺り
書斎・勉強部屋 GL+2,648
吹抜け
鉄骨柱 φ=58mm

2階平面図

欒に相応しい場となる。逆に急になれば、周囲から離れ親密な暗がりに身を隠せる。平場が刻々と変わる屋根の角度や距離と関係をつくることで、大らかなワンルーム空間でありながら、さまざまな生活行為を受け止める空間が連続して現れた。強くも柔らかい屋根が暮らしに合った環境を掴まえた。　　　　　　　　（加藤渓一）

配置図　縮尺1：2,000

リビングから西側を見る。1階は玄関（GL+1,300mm）から952mm低く設えられる。左手の開口は人の居場所となるように、窓枠に奥行きをもたせている。異なる仕上げの壁が奥行きとリズムを生み出している。

ダイニングからリビング方向を見る。長方形平面の南東側を敷地形状に合わせてオフセットしてデッキを設けている。

南側外観。

タープ

所在地／東京都日野市
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子供2人

設計
スタジオピース＋HandiHouse project
　担当／加藤渓一
構造　井上健一構造設計事務所
　担当／井上健一

施工
ごぼう設計工房　担当／工藤順一
設備　会田工業　担当／会田和彦
電気　Antech　担当／内藤昭也
基礎　みかわ建設　担当／小川剛司
大工　ながせ建築　担当／長瀬健司
板金　睦板金　担当／吉田歩
塗装　杉本塗装店　担当／杉本茂光
建具　西島建具店　担当／西島広幸
鉄造作　鐵工房 sow smith　担当／斉藤壮
家具　Handihouse project　担当／加藤渓一

構造・構法
主体構造・構法　木造在来工法
基礎　べた基礎

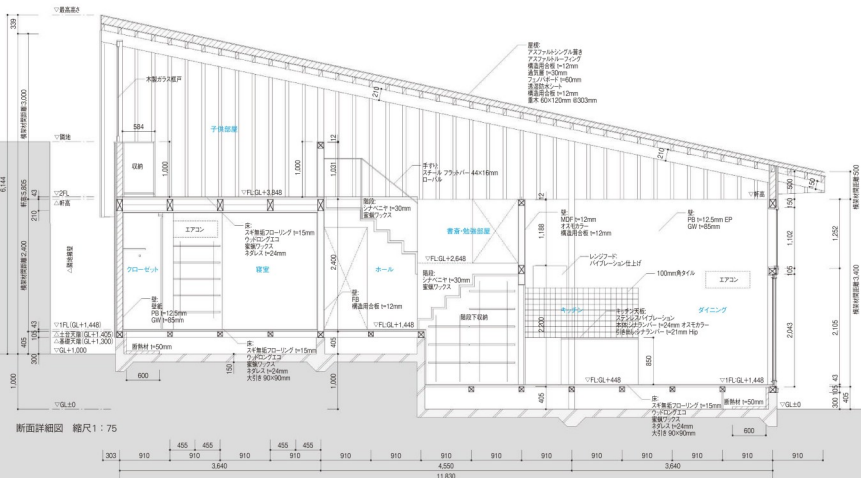
規模
階数　地上2階
軒高 3,587mm　最高高さ 6,665mm
敷地面積　187.08m²
建築面積　76.54m²
（建蔽率40.91％　許容60％）
延床面積　104.75m²
（容積率55.99％　許容100％）
1階　69.56m²　2階　35.19m²

工程
設計期間　2018年9月〜2019年6月
工事期間　2019年7月〜2020年2月

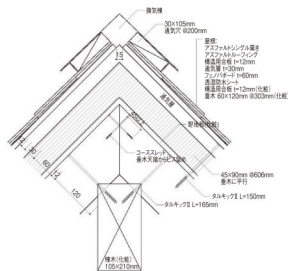
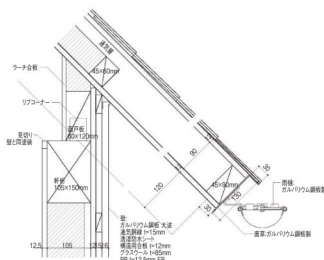
断面検定比図

桁行方向地震時変形図

屋根架構アクソノメトリック

断面詳細図　縮尺1：75

柔らかな意匠を実現するHPシェル

棟木と軒桁が平行の一般的な切妻屋根は、転び止めを設けて垂木が倒れないように補強するか、棟木を支える柱間に耐震壁を設けなければ桁行方向の水平力に対して不安定である。かといってそのような手法をこの住宅に適用しては、タープの如く柔らかな意匠は実現できない。棟木を傾斜させたデザインはまさにHPシェルであり、面材の剛性に頼らずとも幾何学的に桁行方向の安定性を持っている。立体解析モデルで確認したところ、屋根面材の剛性を無視しても中地震時4cm強の変位に留まり、各部材の応力も十分に許容値内に収まっていた。施工上はさらに安全を見て構造用合板を打ち付けている。かくして意匠上はどこまでも柔らかだが構造上は堅牢な屋根が実現された。　（井上健一）

北西側外観。東に向かって低く緩やかに広がる屋根。

屋根—垂木断面詳細図　縮尺1：10

屋根—桁材—軒先断面詳細図　縮尺1：10

敷地条件

地域地区　都市計画区域　第1種高度地区　法第22条区域

道路幅員　南西4m　南東6m（南東）

駐車台数　1台

外部仕上げ

屋根／アスファルトシングル葺き（旭ファイバーグラス リッジウェイ）

外壁／ガルバリウム鋼板（日新製鋼 セリオスプライム）

開口部／樹脂サッシ（YKK AP APW330　エピソードNEO）　木製ガラス框戸

外構／土間コンクリート

内部仕上げ

リビング　ダイニング　キッチン

床／スギ無垢フローリング材 t=15mm（小川耕太郎∞百合子社）ウッドロングエコ 蜜蝋ワックス（リボス）

壁／リビング・ダイニング：PB t=12.5mm EP（KSAG ソイルペイント ヒラリ）　MDF合板 t=12.5mm オスモカラー フロアカラーナチュラル　キッチン：PB t=12.5mm EP　100mm角タイル（LIXIL ミスティパレット）

天井／ラーチ合板 t=12mm

家具／ラワンランバー t=21mm ワトコオイル ミディアムウォルナット

玄関

床／スギ無垢フローリング材 t=15mm（小川耕太郎∞百合子社）ウッドロングエコ 蜜蝋ワックス（リボス）　土間コンクリート金ごて仕上げ アクアカラー（アシュフォードジャパン）

壁／ PB t=12.5mm EP　FB t=5mm

天井／ラーチ合板 t=12mm

家具／ラワンランバー t=21mm ワトコオイル ミディアムウォルナット

書斎・勉強部屋

床／ MDF合板 t=12.5mm オスモカラー フロアカラーナチュラル

天井／ラーチ合板 t=12mm

階段／シナベニヤ t=30mm 蜜蝋ワックス（リボス）

階段手摺り／ FB 16×44mm ローバル

子供部屋

床／スギ無垢フローリング材 t=15mm（小川耕太郎∞百合子社）ウッドロングエコ 蜜蝋ワックス（リボス）

壁／ラーチ合板 t=12mm　FB t=5mm

天井／ラーチ合板 t=12mm

家具／ラワンランバー t=21mm ワトコオイル ミディアムウォルナット

浴室

ユニットバス／パナソニックバスルーム FZ 1616サイズ

洗面

床／東リ フロアリュームプレーン 20FL1004

壁／ PB t=12.5mm サンゲツ TH-8730　152×76mm角タイル（タイルパーク メトロ）

天井／ PB t=9.5mm サンゲツ TH-8730

家具／ラワンランバー t=21mm ワトコオイル ミディアムウォルナット

照明／パナソニック LGB75000 LB1

洗面カウンター／デュポン コーリアン

洗面器／ TOTO SK6

トイレ

床／東リ フロアリュームプレーン

壁／ PB t=12.5mm サンゲツ TH-8730

天井／ PB t=9.5mm サンゲツ TH-8730

照明／パナソニック LGB75002 LB1

便器／パナソニック アラウーノ S2

設備システム

空調　冷暖房方式／エアコン　換気方式／第3種換気

給排水　給水方式／上水道直結　排水方式／合流

給湯　給湯方式／ガス給湯機

撮影／新建築社写真部

前面道路 ▽GL-4,000

JR中央線

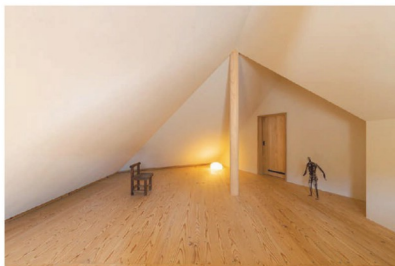
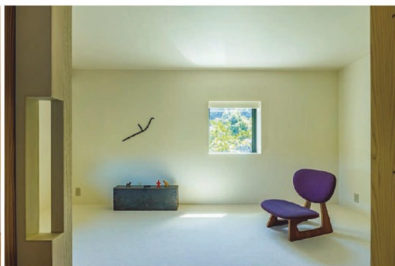
南西側鳥瞰。工務店を営む建主とその知人たちが共有する住宅。駿河湾の対岸に富士山を望み、周囲をみかん畑に囲まれた自然豊かな敷地に建つ。廊下のソファスペースや、窓際のベンチスペースなど、家具を手がかりにつくられた居場所が点在しており、工務店としての家づくりの感覚をインプットする研修所としても使われる。

西浦の家

Nishiura House
静岡県沼津市

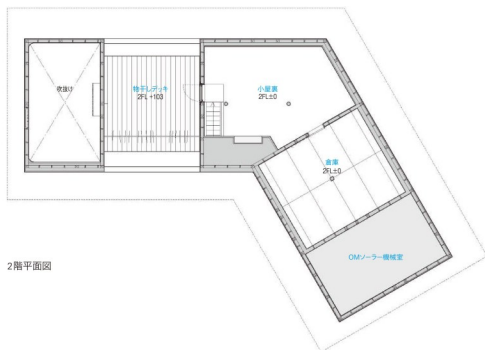
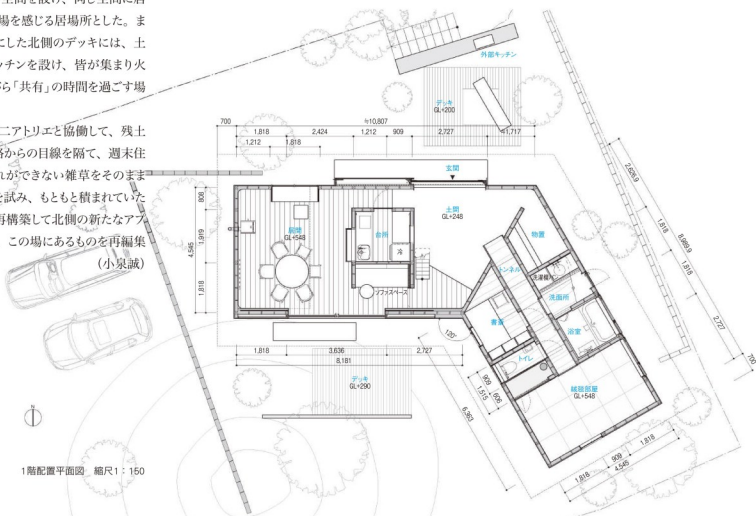
小泉誠
Makoto Koizumi

土間からトンネルの奥に絨毯部屋を見る。宿泊する複数のグループが互いの距離を調節できるように細長いへの字型のプランとし、各室はキッチンのコアやトンネルなどで緩やかに隔てられている。トンネルには30mm厚のJパネルを使用。

土間は玄関を介してデッキと繋がり、人が集まる共有スペースとして活用される。トンネルは通路としてだけでなく、絨毯部屋と土間との間で気持ちを切り替える場となることを目的としている。

小屋裏。最高天井高さ約2mの落ち着きのある居場所。奥に見える引き戸は、Jパネルに美術家の北川陽史氏が制作した引き手を組み合わせたもの。

絨毯部屋。天井と壁にはゲットウの細かい繊維が浮き出る「月桃紙」を使用。

点在する居場所

駿河湾越しに富士山が望め、みかん畑に囲まれた場所にこの家は建っている。東京郊外で家づくりに携わる建主は、10数年後にこの家に定住する予定だが、それまでの時間を仕事仲間や友人家族と共有しながら、家づくりの糧となるモノゴトを体感する場所として、この家を計画した。しばらくは週末住宅として使用し、多くの人が集まり、さまざまな時間を過ごせる場所として、家の中にいくつもの居場所を点在させている。南北のデッキ、土間、廊下ソファ、窓ベンチ、絨毯部屋、小屋裏、物干しデッキと、数家族が集まってもそれぞれの時間を過ごせる環境を用意した。特に廊下ソファは、通路である廊下に外部に向けたソファ空間を設け、同じ空間に居ながらも「固有」の場を感じる居場所とした。また、富士山を目前にした北側のデッキには、土留めをかねた外キッチンを設け、皆が集まり火を囲み調理をしながら「共有」の時間を過ごす場所をつくった。

外構計画は小林賢二アトリエと協働して、残土を活用した丘で道路からの目線を隔て、週末住宅のため日々手入れができない雑草をそのまま生かした植栽計画を試み、もともと積まれていた土留めの石積みを再構築して北側の新たなアプローチをつくるなど、この場にあるものを再編集した。　（小泉誠）

2階平面図

1階配置平面図　縮尺1：150

居間。南面の幅3,636mmの開口は、戸袋が壁内に引き込まれるように設えられている。

左：土間から居間に繋がる扉。　右：ドアノブを見る。各室間の扉はそれぞれ意匠が異なり、家づくりの感覚を養う装置としても機能する。

棟換気:タニタ 棟まどS形

屋根:
エバールーフ横葺き
通気垂木 30×40mm
構造用合板:ラーチ t=24mm(サネ付き)
105×45mm
+105mm
30mm野縁
PB t=9.5mm

小屋裏

土間

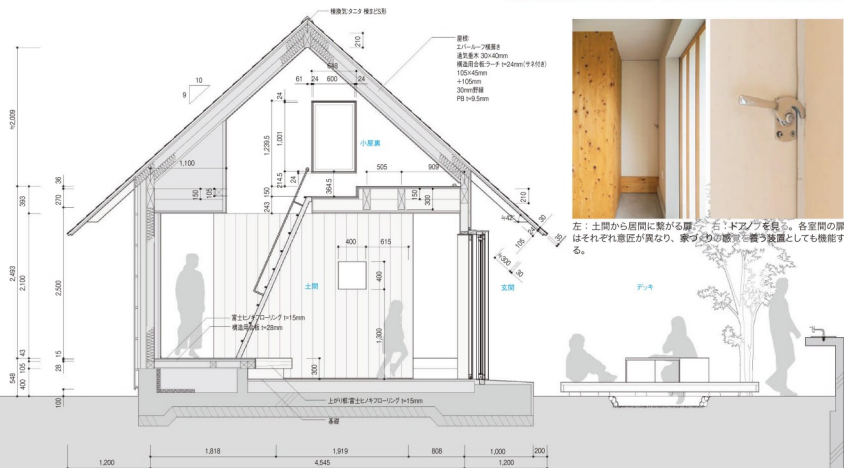
玄関

デッキ

富士ヒノキフローリング t=15mm
構造用合板 t=28mm

上がり框:富士ヒノキフローリング t=15mm

基礎

断面図　縮尺1：60

Space in Detail
多様な居場所をつくる建築と家具

居間と土間を繋ぐ廊下をソファスペースとすることで、廊下は通路としてだけではなく、ひとつの居場所となる。土間側の扉は、全開にするとソファスペースの側壁にちょうど納まるよう設られている。

ソファスペース 部分断面詳細図 縮尺1：25

ソファスペース 部分平面詳細図 縮尺1：25

ソファスペース 土間側扉 部分平面詳細図 縮尺1：10

はしご 部分断面詳細図 縮尺1：10

土間 部分断面詳細図 縮尺1：25

西浦の家

所在地／静岡県沼津市
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子供2人

設計
Koizumi Studio 担当／小泉誠 馬場泰輔
外構・造園 小林賢二アトリエ
家具・備品コーディネイト こいずみ道具店
担当／大柴いずみ

施工
空間工房LOHAS
構造 マルダイ
設備 横山設備
電気 辰巳
外構・造園 小林賢二アトリエ
担当／小林賢二 山中彬充

構造・構法
主体構造・構法 木造
基礎 べた基礎

規模
階数 地上2階
軒高 3,048mm 最高高さ 5,474mm
敷地面積 638.4m²
建築面積 78.03m²
（建蔽率12.22％ 許容70％）
延床面積 114.7m²
（容積率17.97％ 許容200％）
1階 78.03m² 2階 36.71m²

工程
設計期間 2015年12月～2017年9月
工事期間 2017年12月～2018年5月

敷地条件
地域地区 市街化調整区域 法第22条地域
道路幅員 南5m 駐車台数 5台

外部仕上げ
屋根／エバールーフ横葺き（日鉄鋼板）
外壁／焼スギ t=18mm（扇建築工房）
開口部／木製サッシ（アイランドプロファイル）
外部キッチン／スギ板型枠 鉄筋コンクリート打放し
外部デッキ／レッドシダー t=38mm 塗装仕上げ
門扉（インターホン＋照明付き）／スチール亜

土間から外部キッチンを見通す。囲炉裏型のデッキの横には、鉄筋コンクリート打放しのキッチン台が設置されており、屋外で調理を楽しむことができる。

土間を見る。

鉛メッキ+レッドシダー 塗装仕上げ
テーブルベンチ／わざわ座

内部仕上げ

台所
床／富士ヒノキ t=15mm
壁・天井／ AEP塗装

浴室
ユニットバス／ TOTO

トイレ　洗面所
床・家具／ Jパネル t=30mm（丸天星工業）
壁（トイレ）／ Jパネル t=30mm（丸天星工業）
　ユーディー MPパウダー
天井（トイレ）／ユーディー MPパウダー
壁・天井（洗面所）／ AEP塗装
建築金物／滑車式ドアチェック（こいずみ道具店）
建築金物／ペーパータオルBOX（テーブル工房kiki）　スライド鍵（北川陽史+テーブル工房kiki）
便器・手洗い器／ LIXIL

土間　物置
床／モルタル金ごて仕上げ
壁・天井／ユーディー MPパウダー 左官仕上げ
家具（土間）／はしご（若葉家具）
開口部（土間）／木製サッシ（アイランドプロファイル）

トンネル
床･壁･天井／ Jパネル t=30mm（丸天星工業）

居間
床／富士ヒノキ フローリング t=15mm
壁・天井／ユーディー MPパウダー左官仕上げ
家具／テーブル：星亀椅子工房　椅子：本林家具
ソファ：FUJITAKE WORKS　サイドテーブル：わざわ座
照明／富士山型コードペンダント+バランサー（古道具）
開口部／木製サッシ（アイランドプロファイル）

書斎
床・家具／ Jパネル t=30mm（丸天星工業）
壁・天井／ユーディー MPパウダー 左官仕上げ
建築金物／ドア引き手（テーブル工房kiki）

絨毯部屋
床／タイルカーペット（シンコール）
壁・天井／月桃紙（日本月桃紙）
家具／キャビネット（古道具）

2階 小屋裏
床／ Jパネル t=36mm（丸天星工業）
壁・天井／ユーディー MPパウダー 左官仕上げ
引き手／北川陽史+テーブル工房kiki

2階 倉庫
床／ Jパネル t=36mm（丸天星工業）

2階 物干しデッキ
デッキ／レッドシダー t=38mm 塗装仕上げ

設備システム

空調　暖房方式／ペレットストーブ
　太陽集熱換気システム（OMソーラー）
　冷房方式／エアコン
　換気方式／太陽集熱換気システム
給排水　給水方式／上水道直結
　排水方式／合併浄化槽
給湯　給湯方式／エコキュート

撮影／新建築社写真部

左：居間に設けられた、窓と一体となったベンチ。　右：物干しデッキから駿河湾を望む。外部キッチンと囲炉裏型の外部デッキを見下ろす。

配置図　縮尺1：1,500

吹抜けから左手に2階主寝室とフリースペース、吹抜け下方にリビングを見る。住宅密集地にある半分が傾斜した敷地に建つ。北、南、西の3方に設けた幅770mmの吹抜けは、隣地とのバッファーとなり、2FLの高さに設けた引き違い窓から1、2階の両方の採光・通風を確保する。

House IT
三方吹抜けと密度

愛知県名古屋市

神谷勇机+石川翔一／ 1-1 Architects
Yuki Kamiya+Shoichi Ishikawa
／ 1-1 Architects

1階南側。3方の吹抜けに設けた開口を法的に1階の窓とするため、2階は梁を出さずに屋根から吊る構造としている。ダイニングの背後には、斜面に張り出したウッドデッキが設えられる。1階の天井高は天高2,764mm（梁上）、吹抜けの天井高は5,000mm。

吹抜け越しに高低差のある町並みが垣間見える2階。

リビングからエントランス方向を見る。吹抜けの開口を開け閉めする梯子は可動。

暮らしの密度を調整する3方の吹抜け

愛知県では、未だ建て売り住宅が多く販売されており、それらは収益性と販売のしやすさから建蔽率いっぱいで、内部をnLDKのnを増やすように分節される。これにより町は高密化し、採光通風条件が悪化すると共に、人びとは過密で不自由な内部に閉じ込められる。

対象敷地は、その半分が傾斜地のために、周辺相場の半額以下で売れ残っていたが、土地探しに同行した際にこの敷地に可能性を見出し建主と購入を決めた。まず、敷地の平地部分に崖条例ライン、2項道路セットバックライン、延焼ライン（3m）という各種規制を避けるようにヴォリュームを配置。これにより、住宅密集地において、町に抜けを提供しつつ、採光通風を確保できる。内部は、大きな空間に2階を吊る構造で、西南北の3方を幅770mm程度の吹抜けとした。これにより、周囲からバッファーゾーンを確保すると共に、外壁面を2階の延焼ラインから解放する。そうすることで、防火設備を使う必要がなくなり、建具の予算を抑えながら上下階同時に光を取り入れ、家族の暮らしも繋いでいく。この3方吹抜けをつくり出すために、外部にφ=10mmの既製品ブレースを設置し、耐風圧性を確保した。

建築家が土地のポテンシャルを再考し、建て売り住宅と同程度の予算で建築することで、町や人にとっての最適な密度や空間、暮らしが生まれることを考えた。　（神谷勇机＋石川翔一）

Space in Detail

3方吹抜けを実現する吊り構造

屋根:
シート防水（遮熱タイプ）
付属板金
下地合板 t=12mm
垂木 45×45@455mm
構造用合板 t=24mm

ジェイベック／ニューアウトイン
水切り板金

▽RFL

外壁（北）:
ガルバリウム鋼板丸波（小波）
通気胴縁 t=18mm
透湿防水シート
モイスTM t=9.5mm

内壁（北）:
モイスNT t=6mm（無塗装）
構造用合板 t=9mm
ポリエチレンフィルム
グラスウール 16kg t=100mm

天井:
モイスNT t=6mm（無塗装）
下地合板 t=9mm
グラスウール16K t=200mm

吹抜け

外壁（南）:
ガルバリウム鋼板丸波（小波）
通気胴縁 t=18mm
透湿防水シート
モイスTM t=9.5mm

▽2FL

床:
モイスNT t=6mm（無塗装）
下地合板 t=9mm

内壁（南）:モイスNT t=6mm（無塗装）
構造用合板 t=9mm
ポリエチレンフィルム
グラスウール 16kg t=100mm

既製品ブレース φ=10mm

天井:FRP防水（白）
サンダー掛け
下地耐水合板 t=12mm
グラスウール 16K t=100mm

浴室

CH=2,100

ダイニング

キッチン

可動梯子

可動収納

▽1FL

壁:FRP防水（白）
サンダー掛け
下地耐水合板 t=12mm
グラスウール 16K t=100mm

▽GL

床:
Pタイル t=3mm
レベル調整材
構造用合板 t=24mm
スタイロフォーム t40mm

床:
FRP防水（白）+滑り止め
下地耐水合板 t=12mm
構造用合板 t=24mm

最高高さ 5,931
2,555
2,800
576
60
50
400
500
500

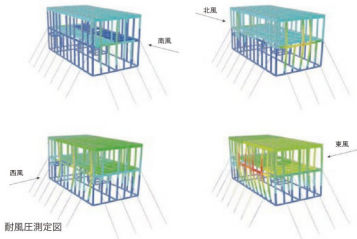
910　910　455　455　910
910　910　910　910　910　910　2,275　1,365　910　910
3,640　1,820　3,640　1,820
10,920
3,800

基礎（無筋コンクリート）

断面詳細図
縮尺1：75

4点撮影：1-1 Architects

1：コスト削減のため、基礎下の捨てコンクリートと同時に、既製品ブレース用の無筋基礎を打設。
2・3：既製品ブレースの留め具を外壁（梁）と基礎に取り付け。　4：既製品ブレースを張ることで風圧による変形を軽減。

2階平面図

耐風圧測定図

1階配置平面図　縮尺1：150

House IT　三方吹抜けと密度

所在地／愛知県名古屋市
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子供1人

設計
1-1 Architects　担当／神谷勇机　石川翔一
構造　小松宏年構造設計事務所
　担当／小松宏年

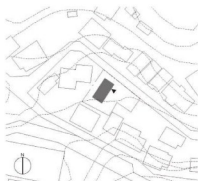
施工
平田建築　担当／平田典千
設備　AT HOME　担当／藤井厚年
電気　ダックス　担当／中島民夫
木製建具・家具　アキタテグ　担当／伊藤亜樹
鉄骨庇　東海鋼建　担当／水野力
外構・造園　MOSS GREEN ikkei
　担当／三浦克友
キッチン　イリエ製作所　担当／五藤亜哉香

構造・構法
主体構造・構法　木造在来工法
基礎　べた基礎

規模
階数　地上2階
軒高 5,840mm　最高高さ 5,931mm
敷地面積　334.24m²
建築面積　60.07m²
（建蔽率17.98%　許容60%）
延床面積　101.04m²
（容積率30.23%　許容200%）
1階　59.63m²　2階　41.41m²

工程
設計期間　2019年2月〜7月
工事期間　2019年8月〜2020年2月

工事費
建築　12,260,000円
電気・空調　1,330,000円
外構・造園　680,000円
衛生　2,170,000円
家具・什器　780,000円
キッチン　1,630,000円
その他　420,000円
総工費　19,270,000円（税抜き）
坪単価　630,000円（税抜き）

敷地条件

配置図　縮尺1：2,000

地域地区　準工業地域　準防火地域
　31m高度地区
道路幅員　北3.1m　　駐車台数　3台

外部仕上げ

屋根／シート防水（遮熱）
外壁／ガルバリウム鋼板（小波）
開口部／アルミサッシ（LIXIL サーモスⅡH）
　木製建具
外構／土間コンクリート刷毛引き　砂利敷き

内部仕上げ

リビング　ダイニング　キッチン
床／300mm角ビニル床タイル（TAJIMA モダン）
壁／モイスNT
天井／モイスNT（吹抜け）　構造材現し OS
厨房機器／
　食洗器／ Miele
　IHコンロ／ Teka
　換気扇（シェード）／ toolbox
　照明／ソケットライトフラット

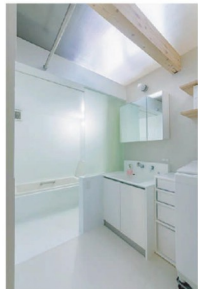
主寝室　フリースペース
床／ヒノキ合板 t=9mm OS
壁／針葉樹合板 t=12mm OS
天井／針葉樹合板 t=9mm OS

浴室
床／ FRP防水滑り止め加工
壁／ FRP防水サンダー掛け
天井／ FB t=6mm AEP
照明／カプセルライトフロスト toolbox
バスタブ・シャワー水栓金物／ LIXIL

トイレ　洗面室
床／300mm角ビニル床タイル（TAJIMA モダン）
壁／モイスNT
天井／トイレ：ラワン合板 t=5.5mm OS
　洗面所：中空層ポリカーボネート t=10mm

設備システム

空調　冷暖房方式／ルームエアコン
　　　換気方式／第3種換気
給排水　給水方式／公共上水道直結
　　　排水方式／公共下水道直結
給湯　給湯方式／電気給湯器

撮影／新建築社写真部

天井を中空層ポリカーボネートとして
吹抜けから採光する洗面室。

南側夕景。φ=10mmの既製品ブレースを南と西側の傾斜地に向けて
11本張っている。ブレース中央の接合部で引張力のメンテナンスが可能。

東側全景。将来子世帯が新築する際、新たに土地を買うよりもこの傾斜地
に擁壁＋盛土を行って建てた方が、はるかに安く建築することができる。

連載

建築家自邸からの家学び

企画・監修　真壁智治
協力　石田敏明　石田章人　石田和久
調査　杉浦久子
　　　昭和女子大学杉浦久子研究室
撮影　新建築社写真部

まちを生きる家の資質

「T2 Bldg.」（本誌9804）は、「まちを生きる家」として、まちに長く住むための家はどうあればよいのか、石田敏明が自覚的に問うところから始まったプロジェクトだ。建築家自邸と親世帯を含む2世帯3世代の住居、そのほかに賃貸住宅と賃貸オフィスからなる複合型都市住宅である。

この住居形式のプログラムは、規模は異なるものの建築家自邸として、山本理顕の「GAZEBO」（『新建築』8609）が想起される。共に建物の内にヴォイドスペースをもつ共通点もあり、また、このようなビルディングタイプはヴォリュームがあるだけに、比較的その立地に親の代から確かな地縁をもつ場合に限られるものだが、その点でも共通するものであった。まちに長く住むことを家づくりの主要課題に定めると、検討事項のプライオリティが見えてくる。

〈地域の動態を読むこと、近所の規範を感知すること、そして、家族の推移に備えること〉

そのうえで、〈「家は財産でもあるが、寿命がある」（石田敏明著『まちをいきる家』2007年、インデックス・コミュニケーションズ）ことに留意すること〉

そこから、まちとの付き合い方を吟味し、まちの中の家のカタチを探っていった。

「T2 Bldg.」が計画的に示したものは結局のところ、堅実さと革新さであった。それをディテールとプランから読み解いていくことが「T2 Bldg.」からの家学びの不可欠な作業になる。これを地域に深く根付き、長く良好に住むための家づくりの解決視点とした。石田は「T2 Bldg.」計画に当たって、利己的（作品主義）になり過ぎず、利他的（地域参加）にふるまう対応も示してきた、と語る。その態度が「T2 Bldg.」に反映されていて、さながら建築家の良識の産物として映る。いずれにしても、まちに長く住むためにはいかに家と家族とが地域の「ソーシャル・キャピタル」（パットナム）形成に参画していけるかにかかってくるだろう。

ちなみに偶然であろうか、「T2 Bldg.」・「GAZEMBO」共に御子息たちが建築への道に進み始めたことも、あながちそのことと無縁ではないように私は感じた。

（真壁智治）

第22回

T2 Bldg.

設計　石田敏明＋石田敏明建築設計事務所
所在地　東京都板橋区
竣工　1997年7月
構造　鉄骨造
階数　地上5階
敷地面積　172.50m²
建築面積　120.66m²
延床面積　483.60m²

1階が賃貸オフィスと駐車スペース、2階が賃貸住居、3・4・5階がオーナーズスペースで、計5階建ての複合型住宅。公園に面した十字路の北西の角地に位置する。

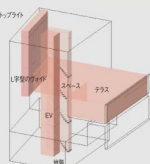
「T2 Bldg.」を軸とした環境連続体の分析

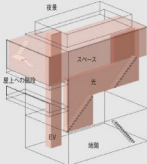
調査：昭和女子大学杉浦久子研究室
教員　杉浦久子
修士1年　齊藤眞子　濵﨑由
学部4年　浅井梨花　大田絵凜　小林明日香　下村つきみ
鈴木彩花　鈴木里佳　藤原さゆり　藤原吏沙
松井奈菜子　村上わこ　森井晴菜　山本萌香

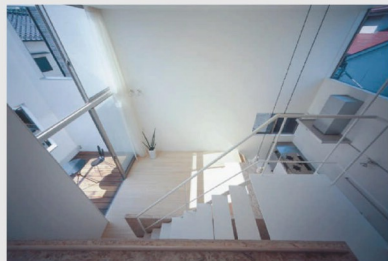
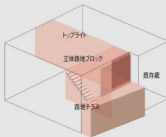
環境連続体の持つ意味

今日、世界はコロナ禍にある。在宅勤務の増加などに伴い、住空間はより重要性が増し変容が迫られている。私たちは家の中で、同じ部屋に居続けることも増え、より気分転換を望んでいる。「T2 Bldg.」や一連の作品に見られる、「環境連続体」というヴォイドは、場面転換が可能な流動的空間（移動空間）を主軸とし、さまざまな環境（光・風・風景・外部など）と絡まりながら多様なシーンを生むことができる。そのため、単調な日常の生活の中にスパイスのような気分転換の空間やパブリック性を提供し、家に居続けたいと思えるような空間性を獲得している。このことは、時代や住まい方が変わっても生き続ける普遍的で新たな住宅の可能性を秘めている。

SUZハウス（1995年）

地盤の悪い敷地に建つ、3世代6人家族のための住宅。それぞれ個室化するプログラム。
①環境：2階の主階の断面が3層分の吹抜けをもつL字型のヴォイドで構成されている。内部は開放感があり、テラス側に大きく開くスペースと呼ばれるフレキシブルな空間が外部と繋がる。吹抜け上部にはトップライトがあり、光が下階まで4階まで届く。
②階段室・③回遊性：エレベーターと階段が中心にあり回遊するプランニング。隣接する建物が接近しているため風景は獲得しにくい。外部に続くスペース風を取り込み、L字型のヴォイド光と風を連続させる。

F5（1998年）

場所は新宿に近い再開発地域に指定されている中野坂上。歯医者のご夫妻がもともと住んでいた敷地に、デンタルクリニック兼住居。大きな開口をもつ。
①環境：経路を外周部分に配置し、内・外を連続させようと意図している。外部テラスに屋上へ行く階段を設けることで、土足のまま屋上で夜景を見ながらパーティを行うことを可能にしている。
②階段室：階段を外周部分に出すことで都市とのバッファーゾーンとなり、半透明の膜は光を取り込み、夜は都市に光を放つ。

HAT（2000年）

2世帯の専用住宅。既存の蔵を取り巻くように住まいのスペースをつくる。
①環境・②階段室：「T2 Bldg.」における土間空間に類似するヴォイドとしての路地テラス（写真）がある。路地テラスの上部からは昼は光が差し込み、ガラスに反射し鏡面効果を生み、夜は人工照明が複雑で多様な空間を構成する。上下を繋ぐこの立体路地ブロックは2世帯住戸と蔵を結ぶ動線ともなる。

FUハウス（2007年）

「T2Bldg.」と同じく板橋に建つ。夫婦と子供ひとりのための密集した住宅地に建つ専用住宅。
①環境：壁と窓を持った半屋外テラスは、外気や光を取り込み、壁の周囲の緑や日常の風景も切り取るスペースになる。
②階段室・③回遊性：階段室が中心部にあり、回遊性のあるプランニング。階段室の吹抜けが部屋全体を繋ぎ、それぞれの空間の境界はあいまいになる。

環境連続体の分析について

「T2 Bldg.」において、石田敏明氏は「環境連続体」という概念を提示している。環境連続体とは、「環境」や「風景」と生活空間としての住宅を環境体として連続させるために、経路と重ね合わされた流動体としてのヴォイドを建築のヴォリュームの中に各位相に跨って形成し、建築と環境とを有機的に結びつける手法である。石田氏の概念を踏まえ、この環境連続体の具体的な空間的特徴として、①環境（光・風・風景・外部など）、②階段室、③回遊性に着目して、石田氏の全19住宅作品の分析を行った結果、「T2 Bldg.」以前では1作品、以後では5作品に、環境連続体的特徴が見られた。

KUSハウス（1999年）

住宅密集地に建つ、夫婦含め6人の成人した家族が2世帯に分かれて暮らす住宅。下階に成人した子、上階に夫婦が暮らし、ふたつの玄関をもつ。
①環境・②階段室：最上階のスペースの両側に開け放たれたテラスがあり外部と連続する。屋上のテントから、エクスパンドメタルの階段室に光を落とす。
③回遊性：階段室を中心とした、建具で間仕切れるワンルーム空間。下階の子世代と上階の親世代は外部階段により距離を保ちつつ繋がる。親世代の空間は、半透明のシリンダー状の階段室を通じて光を取り込み、上階のテラスとスペースに連続する。

corne（2016年）

目黒に建つ共同住宅（8戸）＋店舗。目黒川に面しての大開口を設けて街へ開く。
①環境：共用部としての土間がある。路のような開放的な半屋外空間であり、内と外が交互に現れ、常に光と風が感じられる空間となる。2、3階は共用部と専用部が立体交差するような配置で、アプローチが切り替わり、見える景色が変わる。
②階段室：目黒川沿いから奥へと緩やかに上昇するスロープは、環境連続体の始まりの空間であり、振り返ると目黒川の緑と水の風景を感じる。奥まで見通せる階段室は風が通り抜ける。

T2 Bldg.（1997年）

※朱塗り：ヴォイド
（吹抜け、階段などの環境連続体）

ヴォイドを3次元に立ち上げた図

5階平面図

5階：オーナー住戸
階段を上るとバルコニーに繋がる。各室間の緩衝材となる中庭（夫婦の寝室と子供の居室に距離を生む）。共有スペースとして機能するアールの壁のある空間。可動式の棚による変容性のある寝室2と寝室3。

4階平面図

4階：オーナー住戸
外と段差のない土間になり得る光の入る中庭。回遊できる居室（広間→リビング→ダイニング→水回り→広間）。人が集うダイニング。ダイニングから広げられるリビング。1階から直結していて風が通る広間2。

3階平面図

3階：祖母の居室
最も独立し、プライバシーが守られている階。螺旋階段回りのテラスから周囲の樹木を眺められ、そこに繋がる室2。

2階平面図

2階：賃貸住居2部屋
オーナー住戸に繋がるセミパブリックな階段。風景が望めるキッチン。EVの騒音から逃れるため、距離を設けた寝室。

1階平面図

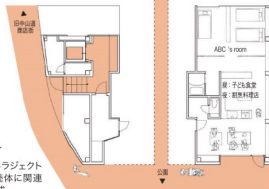
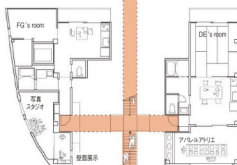
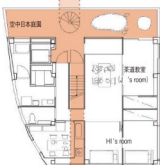
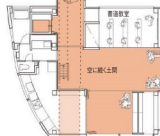
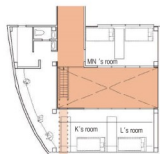
1階：石田敏明氏の設計事務所
公園の景色が望め、子どもの声が聞こえ、外と一番関係性をもつ。庭の植栽から四季が感じられる事務所スペース。将来的には、2階の賃貸住居と繋げてメゾネットとして使用することできる。

※朱塗り：ヴォイド（吹抜、階段）
赤線：光　青線：風

「T2 Bldg.ストリート」

板橋という街は都心へのアクセスがよく、敷地周辺は住民の生活を支える商店街もあり、「T2 Bldg.」の向かいにある公園も、子どもたちの遊びの場として親しまれている。この立体的に構成される「T2 Bldg.ストリート」は、隣接する旧中山道の商店街と繋がり、新たな地域交流の拠点となることを期待している。研究室14人がこの住宅を綿密に調べたうえで、もし自分たちがここに住むと仮定して、それぞれの現在の生活がどのようにこの住宅のストリートに定着するかを調査しながら展開可能性を考えた。

私たちのここでの暮らしは単なる集合住宅的なものではなく、また、いわゆるSOHOなどとも異なり、ここで暮らしながら本業を営むもの、趣味が副業となっているもの、NPO的な社会活動に意識のあるものetc.さまざまな動機と暮らし方があるが、この「T2 Bldg.ストリート」という建築の骨格に絡みながら、私達の様相が顔を覗かせる商店街のような新たな「立体ストリート」により、緩やかに繋がる共同体を具現化し、地域を取り込みながら新たな拠点に成長していくであろう。

ある学生は平日、外で仕事をし、週末は近隣の家族を空に続く土間空間に招き、室内キャンプをレクチャーしながら共に夜空を楽しむ。またある学生は公園に面した1階で、地域の人びとをターゲットに食を提供することで地域の拠点化を目指し、これが本業となることを夢みていたりする。また、「T2 Bldg. ストリート」の階段通路は格好の展示空間となり、写真スタジオの写真や服飾関係のグッズも垣間見える。さらに空中にある螺旋階段を登ってゆくと、小さな空中庭園と板橋の空の風景が交錯してゆく。

4、5階：**空に続く土間でテンポラリーに開催される**
イベント1（左）：フリーマケットで賑わう。その隣で地域書道教室も。
イベント2（右）：キャンプをし、一夜星空を眺める。

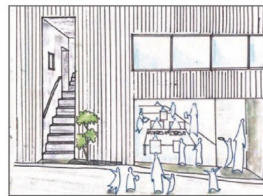
断面図

3階：**空中日本庭園**
空に迫り出した螺旋階段の下に展開する
日本庭園。

階段：**写真スタジオ（左）とアパレルアトリエ（右）**
左手の壁面には写真作品が飾られる。
右手ショーウィンドウには新作が展示されている。

T2 Bldg.ストリート

※レム・コールハースのトラジェクトリーの概念と、環境連続体に関連性を見出し、この図を作成。

1階：**割烹料理店（昼は子ども食堂も）**
公園に隣接し、通りに面しているため、人びとが入りやすい街に開かれた店となる。

昭和女子大学杉浦久子研究室
既にあるものに加えることや、差し引くこと、積極的な意味において建てないことなど、場所の意味を見出し、人を含む空間全体を関係づけていくような環境をつくることを「サイト・リノベーション」と名付け、20年近く、毎年各地の公共空間に原寸大の空間をセルフ・ビルドでつくり、地域の交流空間として機能させる活動を行っている。

4階広間1。南西側へ視線が抜ける。広間1の吹抜けでは、外壁と同じ仕上げが室内に入り込み外部化されている。右手の広間1とは、360°回転する半透明のポリカーボネートで仕切ることができる。

座談会

まちの変化を許容する都市型住宅

石田敏明(「T2 Bldg.」設計者・建主)　石田章人(建主)　石田和久(建主)
杉浦久子(建築家)　昭和女子大学杉浦久子研究室　真壁智治(プロジェクトプランナー)

2世帯の住居、賃貸住居、賃貸オフィスからなる「T2 Bldg.」(本誌9804)。1997年の竣工当時、革新的な形式であったこの住宅の全体像を今改めて学び、街の変化に対応しながらその土地に根付くしなやかさの理由を探ります。昭和女子大学杉浦久子研究室による調査をもとに、石田敏明さんと、そのご子息である長男の章人さん、次男の和久さん、杉浦久子さんと研究室の学生さんによる座談会を行いました。また、本連載監修者である真壁智治さんにも参加いただきました。(編)

時代を先駆する住宅形式

真壁智治(以下、真壁)　建築家自邸からの家学び連載の第22回になります。この住宅は、自邸と親世帯を含む2世帯住居、そのほかに賃貸住居と賃貸オフィスからなる複合型住宅です。まずは、どのような経緯からこの自邸を設計するに至ったのか、お聞かせください。

石田敏明(以下、敏明)　この板橋に越す前は五反田に住んでいて、恵比寿に構えていた事務所と、当時、勤務していた前橋工科大学の3カ所を拠点にしていました。ある時、妻の両親の後見を見越して同居しないかという話がもち出され、ちょうど五反田の住居が手狭に感じていたこともあり、自邸の計画が具体的になりました。

真壁　1990年代になってようやく「2世帯住宅」や、住宅の一部を間貸しする「稼ぐ家」といった住宅モデルがハウスメーカーから提案されていきますが、「T2 Bldg.」は、当時の都市型住居として極めて先駆け的な住宅形式です。その背景には、その街に深く根付き、長く良好に付き合っていくための戦略があったはずです。

南西側全景。2層分吹抜けたスリット状の階段。

敏明　妻の両親の土地ということもあり、2世帯住居と複合させるプログラムは独断では決めず、計画当初は定まっていませんでした。敷地南西側には通りを挟んで区立公園があるので、1階には飲食店や駐車場といった案も出ていたのですが、結果的に私の事務所を構えることに落ち着きました。また、板橋は池袋と接しているので都心にアクセスするには何かと便利な土地ですから、空き地ができるとすぐさま分譲され、アパートや建て売り住宅が建ち並びます。だから、収入の面からも2階を賃貸住居にする提案は手堅く、すんなりと決まりました。実は、斜線制限や角地緩和によりヴォリュームを今より高く構えることもできたのですが、あえて低く抑えています。何よりこの土地と長く付き合うために、この住宅が近隣との揉めごとになり得ないよう配慮を重ねました。

真壁　ここで育った章人さんと和久さんは、おふたり共に建築家を目指されていますね。建築家としての道を選ばれたきっかけは何だったのでしょうか。

石田章人(以下、章人)　小学生の頃にはすでに、建築家になりたいと思っていました。建築家という職能自体は理解できていませんでしたが、仕事の愚痴を漏らさず、何より楽しげに建築と向き合う父の姿を見て、漠然と面白い仕事なのだろうと思っていました。

石田和久(以下、和久)　私が目指し始めたのは高校生になってからですが、やはり身近な建築家の存在は大きかったと思います。私も建築家や建築界についてあまり知らなかったので、大学で建築を学び始めてから、建築界での父の立ち位置を知ることになります。

真壁　それにしても、おふたり共にというのは珍しい。この住宅の曲面壁や、気積の大きなヴォイドなど、一般的な住宅ではあまり得られない幼少期の経験というのも影響するのかな。

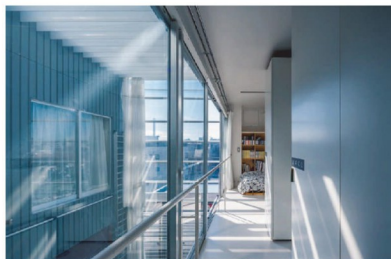
和久　越してきた当時は幼く、もっとも古い暮らしの記憶がこの住宅です。ここでの暮らしは当たり前で、建築を学び始めるまでは、ほかの住宅と比較して違和感を感じたことはありませんでした。

章人　小学生の頃は、放課後に目の前の公園で遊ぶのが日課で、4階のリビングにいると、友達が公園から呼びかけてくれるんです。雨の日は屋内で遊ぶことも多く、広間でビニール製のバッドとボールでバッティングしたり、この大きな吹抜けは、遊び回るには十分な広さで、今にして思えばほかの住宅ではあり得ない体験ですね。

敏明　4階の床高が地面から10m弱なので、地上からの呼び掛けがギリギリ届くし顔の表情が識別できる高さなんですよね。また4階は、行き止まりがなく回遊できるようなプランニングで、子供であればぐるぐると走り回ることができる。真壁さんのおっしゃるように、この住宅特有の体験が無意識のうちに、何か影響していたのかもしれません。

杉浦久子(以下、杉浦)　今でこそ複合型住宅は一般的に浸透していますが、竣工当時は、ほとんど前例のないビルディングタイプです。実際に拝見させてもらい、この住宅には、さまざまなプログラムが絡み合う、都市的な様相を感じました。そうした感覚は、1997年の竣工当時の誌面からも変わらずに読み取ることができるので、今後、街の姿がどれほど変わろうとも、街のインフラのように残り続けるのだと思います。杉浦研究室では、「場所をリサーチしその場の意味を見出して、人を含む空間全体を関係付けていくような環境をつくること」を『サイト・リノベーション』と名付けて、20年近く毎年各地の公共空間に地域の人びとと協働し、原寸大の空間をセルフ・ビルドでつくって、地域の交流空間として機能させています。そこで、環境連続体を軸として、「T2 Bldg.」に交流空間を入れ込み、より一層地域に開くことを考えました。

建築と環境を繋げるヴォイド

学生1　「T2 Bldg.」における環境連続体のあり方を相対化するために、石田敏明さんの全19住宅作品を、皆で図面化&3D化しました。その全図面資料と石田さんが雑誌などで語った言葉をもとに「T2 Bldg.」とそのほかの住宅作品との関係性について分析し、その結果、環境連続体的特徴を、環境(光・風・風景・外部など)、階段室、回遊性としました。その特徴がT2 Bldg.以前のものにも1作品見られ、またT2 Bldg.以降のものに5作品見られました。石田さんの住宅作品の中でこの手法は中心的な手法であると考えました。また滞留空間だけでなく、ヴォイドの中の流動的空間(移動空間)に重きを置いていることが分かりました。

5階広間4。ふたつの収納棚がレールの上を移動することで、領域が変化がする仕掛けとなっている

広間2から広間1、奥に畳敷きの広間3を見る。床には厚さ8〜20mmの石英岩300mm×600mm敷き。広間3の上は室1。

敏明　リサーチにあったように、「環境連続体」とは建築と環境を有機的に繋ぐための概念で、各位相に跨るヴォイドが重要となります。階段は上下層を繋ぐ流動的なヴォイドであり、住宅において、階段の計画は建物全体の質を大きく左右します。住宅を設計する際、はじめに居場所を計画してから動線で繋ぐのではなく、都市から住宅へ流動する動線を想定してから、滞留する居場所を構成していきます。建物全体として見ると、ワンルームを設計している感覚に近いですね。住宅における内外の関係性は、いつの時代でも建築的命題です。私の広島の実家は、土間を介して風呂場があったり、外廊下を介してトイレに行ったりと、内と外が交互に反転するような間取りでした。そこで育った経験からか、内と外を等価にとらえ、絡み合うような住宅を常に心がけています。「T2 Bldg.」では、それらの思考をまとめる概念として、「環境連続体」という言葉を用いました。

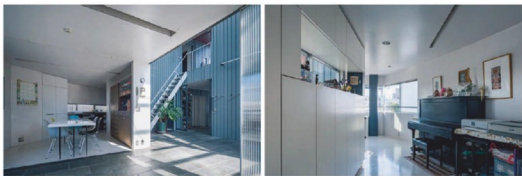
真壁　伊東豊雄さんの事務所に勤めていた頃から、そのような住宅に対する内外の感覚はあったのでしょうか。たとえば、「中野本町の家」(『新建築』7611)と「シルバーハット」(『新建築』8501)では、外部への開き方が両極端ですよね。

敏明　ふたつの住宅を取り巻く背景が異なるのが大きいと思います。「中野本町の家」は、私も設計に関わっていますが、「シルバーハット」は退所後の建築です。1970年代と1980年代の時代背景もあり、閉じたシンボリックな空間と、開放的なフワフワした建築で対極的と言えます。当時、伊東さん自身、「環境」という言葉はあまり使いませんでした。よくも悪くも、免罪符のように使えてしまう言葉ですから。「T2 Bldg.」では環境連続体と表現しましたが、建築と都市を繋げるということは、目まぐるしく変化する都市に対応し得るサステナビリティを獲得することでもあるのです。たとえば、敷地北西側の区立公園は、行政からのよほどの要請がない限り公園であり続けるでしょうが、南東側に隣接する広い庭をもつ住宅は、明日にでも容積率いっぱいのアパートに建て替えられるかもしれない。実際に、南西側の通りを挟んで建つ住宅は、2階建てだったものが3階建てに建て替えられています。また近年、身近なひとつの敷地がミニ開発によって2、3軒の住宅に建て替えられています。つまり、目まぐるしく環境は変化していくので、何が変わり変わらないのか、注意深く予想立てた計画が必要なのです。「T2 Bldg.」では、たまたま周辺から頭ひとつ飛び出す建て方ができましたが、これがより稠密な環境であったらどうでしょうか。結局のところ、最後まで変わらずあり続けると約束できるのは、建物上部の空しかないのです。そういう考えもあり、最上階には外部空間のようなヴォイドを設けています。

杉浦　レム・コールハースは「フランス国立図書館OMA案」(1989年)マッスとヴォイドを反転させ、「ジュシュー大学OMA案」(1992年)や「在ベルリン・オランダ大使館」(2003年)で、建物内部にさまざまなプログラムを内包する立体的な街路空間を挿入することで都市と建物を連続させる、トラジェクトリーという概念を展開していますが、石田さんの環境連続体の概念とオーバーラップします。異なる点は、コールハースのトラジェクトリーがダイヤグラムをそのまま立ち上げた概念的な形態であるのに対して、環境連続体は、その周辺環境に応じて、外部と接続する部分と分断させる部分を使い分けており、暮らしにリアリティがあるところです。

敏明　たしかに、コールハースの影響は大きいですね。「ジュシュー大学OMA案」は、折り畳まれた床が街路から連続的に空間化した建築で、空間表記が独特でした。1990年2月9日に東京工業大学百年記念館で行われたレクチャーの中で、「フランス国立図書館OMA案」のコンペティションの初期案から最終案に至るまでのプロセスがスライドで紹介されたのですが、これを見た時の衝撃は忘れられません。コールハースの展開する建築の概念や空間のつくり方は何もかも新鮮で、建築の可能性を広げてくれました。ただ、そこで受けた衝撃のままに設計に応用しているわけではありません。むしろ「ダッチハウス」(1992年)や「オランダの家」(1994年)など、コールハースの初期住宅に触れた時の、素材の扱い方の方に共感を覚えます。それらの住宅のディテールは、全体を統合させるのではく、素材同士を唐突にぶつけ合わせるような手法で組み立てられています。「ラ・ヴィレット公園OMA案」(1982年)などもそうですが、ものや空間をぶつ切りにし、人が介入することで起こり得る変化を設計に取り込むという都市的な考え方は、非常に面白いです。

まちに生き続けるためのフレキシビリティ

学生2　「T2 Bldg.」がほかのプログラムに置き換えても成立する理由は、環境連続体であるヴォイド、すなわち、この建物における骨格がしっかり

左：広間2から見る。キッチンは、奥に進むと玄関ポーチと連続する。　右：広間4。

広間1から広間2を見る。ガラス屋根は、複層ガラスS5＋A6＋S5＋飛散防止フィルムで、スチール製フラットバー（6mm×150mm）のルーバーが240mm間隔で付けられている。

しているからだと思います。このヴォイドを「立体ストリート」と解釈し、その空間に私たちの暮らしの様相が顔を覗かせる「T2 Bldg.ストリート」を計画しました。研究室メンバー14人がここに住み、それぞれの特技・趣味を活かしながら緩やかにこの「ストリート」で繋がり暮らす。この空間は隣接する旧中山道の商店街とも繋がり、新たな地域交流の拠点となる可能性ももっています。

敏明　「T2 Bldg.」の住み手やプログラムを変えていくアイデアは面白いですね。1、2階のプログラムは、実際に義両親とも検討を繰り返していましたし、突拍子もないように見えて、実は現実的な提案だと思います。将来的に事務所以外での活用も想定し、鉄骨ラーメン構造とすることで、さまざまなプログラムを飲み込めるフレキシビリティを確保しています。また、天井には部分的に小梁を通しているので、2階の賃貸住居とメゾネットとして繋げて拡張することもできます。建物の形だけでなく、内部のプログラムを更新させていくことで、その土地がいかに変化しようとも住み続けることができる重要なファクターとなり得るのです。

和久　私たち兄弟の部屋も間仕切りが可動式になっています。幼い頃は隣の共用スペースが大きく取れるように間仕切られており、私たちの成長と共に個人のスペースを大きくしていきました。お互いの部屋の大きさで、兄と揉めたことを覚えています。

真壁　今回のリサーチのように、石田さんの住宅には環境連続体の妙がある一方で、それらは建物の内側で起こるひとつのパラダイムでもあるのです。環境連続体という側面でひと括りにするのではなく、それぞれの住宅におけるロケーションやシークエンスが、環境連続体としてどのように落と

し込まれているのかがもっとも重要です。「T2 Bldg.」がその時代に建てられた意味や、環境連続体から読み取れる当時の社会性などが、この板橋という街の特性と合わせて想像されると、よりよい研究になったのではないでしょうか。

杉浦　「T2 Bldg.」は、石田さんの住宅設計において実験的であると同時に、集大成のような立ち位置だったのではないかと思います。確かに、環境連続体の試みは、石田さんの設計する住宅の中で、その土地ごとで応用されています。どんな複雑な余条件の中でも必ず実現されていて、石田さんの住宅の骨格のようなものを感じました。近年、社会からの要請の幅も広がり住宅のあり方が多様化する中で、建築の構築性が薄れてきているように思います。対して「T2 Bldg.」には、西洋建築の歴史的な街並みのような、内部は随時変わりながらも受け入れてしまえる強度があります。たとえば、最上階まですべて店舗になったとしても、板橋の街路が立体的に入り込んだような佇まいとなるでしょう。

真壁　私が編集を手がけた石田さんの著書『まちを生きる家』（2007年、インデックスコミュニケーションズ）では、「T2 Bldg.」をモデルに、都市の環境の変化に対応する寿命の長い家づくりについて執筆してもらいました。この本の中で、石田さんは「家は財産だが寿命がある」と論じています。つまり住宅設計においては、竣工時の姿では対応しきれない部分も想定しつつ、それを修復する余地を残す必要があるのです。その余地こそが、住宅のサステナビリティの原則なのです。

和久　竣工から20年以上が経ち、3階に住む祖母も90歳を超え、この住宅の更新が現実的な話になっています。更新する際には、父と共に私たち兄弟もまた、この街で暮らし続けることについて改めて見直し、この住宅に反映したいと考えています。

南西側より遠望する。周辺は商業施設や中層マンション、住宅群が建ち並ぶ。

真壁　ひとつの自邸の更新が、世代間で起こるのは面白いですね。自邸にありがちな、1世代だけの作品主義に寄らない、自邸の世代交代のかたちが表出されるとよいかもしれません。

敏明　「T2Bldg.」は4、5階が自邸の複合用途建築です。ですから、世代間で更新する場合は相続を含めて建物全体を見直す必要があります。自分たち夫婦の居場所もさることながら、息子たちが将来、独立した世帯をもつことになった場合、どの部分をどのように相続し用途も含めて更新していくかが問題だと思います。曽祖父の代から数えて彼らは板橋に住んで4代目にあたりますが、今後目まぐるしく変化する社会にあって多拠点居住や家族以外の住まいかたもあるかもしれません。そうしたプログラムに対応できる建築であるとは思っています。

真壁　山本理顕さんの「GAZEBO」（『新建築』8609）も親子間で更新されており、「T2 Bldg.」の現状と相似しています。「GAZEBO」では、1階の薬屋さんをベースに設計されてましたが、石田さんの義両親が長らく住んでいたことからも、非常に地縁の強い土地ですよね。石田さんとご家族が、この街に住み続けるためにどのように更新されるのか期待しています。

3階テラス。前面道路に接続する吹抜け状の階段は、3階テラスに繋がっており、テラスの螺旋階段から4、5階の住宅にアクセスする。

まかべ・ともはる
1943年静岡県生まれ／1969年武蔵野美術大学建築学科卒業／1972年東京藝術大学大学院建築専攻修了／同大学建築科助手を経て、1983年プロジェクトプランニングオフィスM.T.Visions設立／現在、同代表

いしだ・としあき
1950年広島県生まれ／1973年広島工業大学建築学科卒業／1973〜81年伊東豊雄建築設計事務所勤務／1982年石田敏明建築設計事務所設立／1997〜2016年前橋工科大学建築学科教授／2016年〜神奈川大学建築学科教授

いしだ・あきと
1990年東京都生まれ／2014年工学院大学工学部建築学科卒業／2016年工学院大学大学院工学研究科建築学専攻修了／2016〜19年ヤマダエスバイエルホーム勤務／現在、フリーランス

いしだ・わく
1992年東京都生まれ／2015年工学院大学建築学部建築デザイン学科卒業／2017年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修了／2017〜18年Aires Mateus e Associados（ポルトガル）勤務／2019年〜B1D勤務

すぎうら・ひさこ
1958年東京生まれ／1982年昭和女子大学生活美学科卒業／1982〜85年、1987〜89年同大学建築コース助手／1985〜87年早稲田大学大学院（建設工学専攻）修了／1989〜94 Ecole d' Architecture Paris la Villette（UP6）修了D.P.L.G取得／1992年昭和女子大学（建築）講師／現在、同大環境デザイン学科（建築）教授

2020年度グッドデザイン・ベスト100発表

日本デザイン振興会（川上元美会長）は去る10月1日、2020年度グッドデザイン賞を発表した。4,769点の応募から、1,395点を選定。その中から特筆して優れた100点が「グッドデザイン・ベスト100」として選出され、このうち建築部門は21件（戸建て〜小規模集合住宅3件、中〜大規模集合住宅3件、産業・商業の建築・インテリア8件、公共建築・土木・景観7件）。住宅部門では、原研哉氏がデザイン監修し、MUJI HOUSEで開発された初の平屋住宅「無印良品 陽の家」（本誌2003）などが選ばれ、集合住宅部門では、210室の日本人学生と海外留学生のための国際学生寮「まちのような国際学生寮 神奈川大学新国際学生寮・栗田谷アカデメイア」（萬玉直子＋西田司＋神永侑子＋西田幸平＋オンデザイン、『新建築』2002）や、都有地を活用する長寿命環境配慮住宅モデル事業として全住戸にOMソーラーシステムを採用した「ソーラータウン府中」（野沢正光建築工房、『新建築』1402）などが選ばれた。商業部門では、「観光以上移住未満」の家のあり方を提案する、短期滞在型シェア別荘「まれびとの家」（VUILD、本誌1910）などが選ばれた。審査委員長の安次富隆氏は、「デザインにおいて他者や社会、環境などについて考え、想いを至らせるのはとても重要なことで、一方的に想うだけでなく、互いの感覚や感性、感思や感得を交えることが求められているように思う。そのことを意識しながら、情報を読み解き想像することを心がけた」と語った。グッドデザイン大賞の発表は10月30日。

左上から時計回りに：「陽の家」*、「まちのような国際学生寮 神奈川大学新国際学生寮・栗田谷アカデメイア」、「Looop Resort NASU」（SUEP.設計）**、「渋谷 パルコ・ヒューリックビル」（竹中工務店設計、『新建築』2001）、「まれびとの家」、「ソーラータウン府中」。

*撮影：安永ケンタウロス　**撮影：Kai Nakamura　特記なき本頁撮影：新建築社写真部

Royal Gold Medal 2021発表

RIBA（王立英国建築家協会）は「Royal Gold Medal 2021」を発表した。同賞は、建築の進歩に大きな影響を与えた個人またはグループに対し、女王陛下より賞を授与するもの。25年以上にわたり国際的に並外れた活躍をしてきたとして、英国ロンドンを拠点に活動するデイヴィッド・アジャイ氏が受賞した。アジャイ氏は米国やロシアでも公共建築を多く手がけ、黒人の歴史や文化を展示する「スミソニアン国立アフリカ系米国人歴史文化博物館」（ワシントンD.C.、『a+u』1802）や、「モスクワ経営大学スコルコヴォ校」（モスクワ、『a+u』1802、0711）などの作品がある。

新型コロナ流行前、緊急事態宣言中、宣言解除後の時間の使い方についてアンケートを実施

去る10月6日、国土交通省は「日立東大ラボ」と協働し、新型コロナ危機を踏まえた今後のまちづくりを検討するため、新型コロナ流行前、緊急事態宣言中、宣言解除後の3時点で、市民の日常的な行動や意識がどのように変化したのか、全国アンケート調査を実施した（サンプル数約13,000）。調査の速報結果として、娯楽や外食のための外出は宣言解除後も自宅周辺が増加している一方で、オンライン授業やオンライン飲み会などは半数以上の人がリモートに否定的であり、コミュニケーション系の活動は全般的に対面志向であることが確認された。今後はさらに対象地域別、個人属性別の詳細な分析を行っていく予定。

森記念財団都市戦略研究所が日本の都市特性評価2020を発表

去る9月3日、森記念財団都市戦略研究所は「日本の都市特性評価2020」を発表した。国内の109都市と東京23区を対象に（昨年から選定基準を変更し、新たに37都市を追加）、都市を構成する分野として「経済・ビジネス」「研究・開発」「文化・交流」「生活・居住」「環境」「交通・アクセス」の6つを設定、それぞれの主要な26要素の指標グループと、それらを構成する83の指標を選定し、レーダーチャートで表現している。各都市の力を客観的に把握することで都市特性を明らかにし、次の時代に向けた都市戦略を立案し、実行に移していくためのツールとしての利用が期待されている。

10代のための学び舎「GAKU」が開校

去る9月1日、10代の若者がクリエイティヴの学び舎「GAKU」が渋谷PARCOの9階にて開校した。音楽、建築、食、ファッション、デザイン、アート、スポーツなど、多種多様な領域において国内外で活躍するトップクリエイターが講師となり、10代に向けたユニークな授業を開催する。建築関係のクラスでは、伊東豊雄氏が塾長を務める伊東建築塾による「自分の興味をカタチにする」、海法圭＋川勝真一＋津川恵理による「Town Play Studies」などが開催される。詳細は下記ウェブサイト参照。
https://gaku.school

都市は自然

開催中　2020年7月26日〜11月23日
セゾン現代美術館（長野県北佐久郡軽井沢町）　https://www.smma.or.jp

セゾン現代美術館は、森に佇み小鳥も鳴く環境にあり、デンマークのルイジアナ美術館を彷彿させる「都市と自然」展には絶好の場である。本展は、建築家の團紀彦がゲスト・キュレーターとして、自身が解釈する「共生」を、自身の作品や画像資料、これまでに團と共同制作をしてきた美術家の大久保英治の新作インスタレーションによって展観する。
團紀彦は、葉山の山海で育った類稀な海の男、中でも素潜りは建築界で随一の腕だ。彼が獲物を捕るための鋭い観察から生まれた、自然観に知性と感性が融合されてできた見識、それに基づきつくり上げてきた作品群を見た。それらには、海中の岩、魚群、光、生命体など、これら実体験から産まれた表現に強い生命力を感じた。
初期の高層ビルの習作は生命体の集合で、まるで魚港の杭に付いたワカメやフジツボ。これらの表現は息詰まった現代社会に対して疑問を投げかけている。また、曲線を活かした数々のコンクリートの建築は波風でつくられた海の岩や丘のように滑らかだ。
「第三の共生の秩序」「調停の概念」などの実例を挙げての展示は、團の思考の流れが理解でき、いろいろな生命体を活かす術「共生」が新鮮に感じられた。
「胡座茶席」は木漏れ日の中の森と一体化し一服しながら会話を楽しむ待合。茶席は凛とした低壁が床を形成し、掛け軸を魅せ、白い床の緋毛氈には正座ではなく本来の座る姿「胡座」を掛き、いただく茶によりこよない自然との融合の時が過ごせる。　（原尚）

上撮影：團紀彦　左下撮影：Ken Kato, Courtesy of SEZON MUSEUM OF ART
右下提供：團紀彦建築設計事務所

上：團紀彦設計の「胡座茶席」。
下2点：團が手がけたプロジェクトのパネルや模型が並ぶ。

フィリップ・ワイズベッカーが見た日本　大工道具、たてもの、日常品

開催中　2020年10月2日〜11月20日
ギャラリー エー クワッド（東京都江東区）　http://www.a-quad.jp

日常の生活や風景の中にあり、背景として見過ごされてしまうようなものに魅力を見出し、独特な感性で描き出すフランスのアーティスト、フィリップ・ワイズベッカー氏。本展では、氏が日本に滞在中に見つけ出して描いた作品を中心に、パリのアトリエを自身で案内する映像などが紹介される。
今回、新たに制作した大工道具の大きなドローイングにはじまり、作品のモチーフは畳やランタン、寺の木柵や道路沿いによくある鉄柵、ゴミ箱や防水シートのかかったトラックなど、多岐に渡る。それらを古紙や工業紙、和紙などこだわりをもって選んだ紙に、定規を使って丁寧に描き出す。いずれも私たちの生活の中に当たり前に存在しているものだが、氏の視点で描かれると、それらは存在感をもったデザインとして改めて目の前に立ち現れる。また、自身のアトリエを映す映像では、蒐集家としての一面も垣間見え、制作に使う鉛筆や定規、紙までもがいつの間にか蒐集の対象となり、大量に納められたキャビネットの様子などが映し出される。氏が描く絵と同様に、蒐集された日常品も一緒に並ぶものや多様な色取り、細やかな納め方によってひとつひとつが宝物のような輝きを放つ。伝統建築と同様に、ちぐはぐに並ぶ日本の住宅にも美しさを感じるという氏ならではの感性が、日常で見過ごしがちなものの存在に目を向けるきっかけを与えてくれる。なお本展は、神戸の竹中大工道具館に来年2月巡回予定。

上撮影：光齋昇馬　その他：©Toshiaki Miyamoto

上：会場風景。フィリップ・ワイズベッカーのアトリエの様子や蒐集品、スクラップブックなどが展示される。
左下：「BARRIERS」(2020)。中下：「PET BOTTLES ONLY」(2020)。
右下：「SAIGAWA-ODORI 5PM」（2020）。

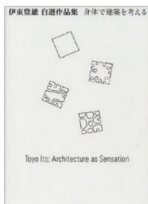
MANGA都市TOKYO
ニッポンのマンガ・アニメ・ゲーム・特撮2020

開催中　2020年8月12日〜11月3日
国立新美術館 企画展示室1E（東京都港区）　https://manga-toshi-tokyo.jp

東京という都市の個性と密接に関係する日本のマンガ・アニメ・ゲーム・特撮作品のうち93作品の、マンガの原画や、アニメやゲームの制作資料・映像などを展示する本展。2,000m²の展示場中央には、東京都心の街並みを1/1,000の縮尺で再現した模型が置かれ、それを取り囲むかたちで500点を超える展示物を紹介する。
展示は3つのセクションから構成される。セクション1「破壊と復興の反復」では、多くの作品で描かれてきた東京の大規模な破壊や、その後の復興するイメージが並び、災害や戦争などに幾度も見舞われてきた東京の姿が、作品を生む想像力の基盤となってきたことが分かる。セクション2「東京の日常」では、人びとの生活がフィクションの中でいかに描かれてきたのか、各作品の時代背景と共にその変遷を追う。セクション3「キャラクターvs.都市」では、作品ゆかりの場所を巡る「聖地巡礼」や、交通機関やコンビニエンスストアとのコラボレーション企画に注目し、アニメや漫画などのキャラクターが都市の風景として受け入れられていく現状を示す。
作品に描かれた東京の姿のみならず、多くの作品に影響され変化してきた東京の魅力に迫る展示会である。

3点撮影：上野則宏

上：展示場中央に設置された約17×22mの「1/1,000巨大東京都市模型」。スクリーン上で映像作品が流れると、その舞台となった箇所がライトアップされる。　左下：セクション1「破壊と復興の反復」の展示風景。　右下：初音ミクとコンビニのコラボレーション企画を再現したインスタレーション。

伊東豊雄 自選作品集
身体で建築を考える

伊東豊雄 著

（A4判／408頁／13,200円／平凡社）

伊東豊雄が、独立してから来年で50年を迎える中、これまでに手掛けた200を超える建築から自らの建築理念をもっとも表現できた30の建築を選んだ自選作品集。タイトルにもなり、師である菊竹清訓から教わったという「身体で考える」という伊東の理念は、論理ではなく意識の外にある価値基準であり、自分の変わらない何か、それは自身の原風景のようなものと結びついているという。そのため冒頭には、幼少の頃や故郷を振り返る序文を掲載。またすべての作品について新たに原稿を書き下ろし、各作品の完成当時に書かれた批評や記事などを相当数あたり、今読んでも面白い文章、発見のある文章なども伊東自身が選び収録した。昨年病気をして長く病床にいる中構想を始めたという本書は、「ひとつの建築をつくるほどのエネルギーをかけて」仕上げた作品集である。　(A)

ポルトガルの建築家 アルヴァロ・シザ

伊藤廉 著

（A5判／416頁／3,960円／学芸出版社）

1960年代からポルトガルを中心に数多くの作品を手がけてきたアルヴァロ・シザ。本書は、シザのもとで7年間勤務した著書が、調査やインタビューをもとに、当時のポルトガルの歴史や文化を糸口として、シザの建築とその文脈を紐解こうとするもの。処女作である「カーサ・デ・シャ・ダ・ボア・ノヴァ」（1963年）を設計するに至った経緯に始まり、スペインの設計競技で獲得した「アルハンブラ宮殿チケットセンター・コンペ案」（2011年）まで、国内外27の作品ごとに章立てされ、1冊通して建築家としてのシザの人生を追体験することができる。各作品は、敷地環境や条件、当時の政治的背景など、複数の軸で語られ、次に続く作品がまたその軸を引き継いで語られる。また、著者が実際に訪れ、暮らした際の体験が動線や匂い、景色などとして織り込まれ、その描写のリアルさにも惹き込まれる。(soy)

工夫の連続
ストレンジDIYマニュアル

元木大輔 著

（A5判／212頁／2,145円／晶文社）

建築のほか、プロダクトからランドスケープまで幅広く手がける元木大輔氏が、独自の路線をいくDIYの実践を通してデザインについて語る。デザインという言葉を「工夫」に置き換えることを提案し、誰もが日常的に行う行為の延長にあると位置付ける。そしてものの見方を少し変えてみると、あらゆるものは可変可能で今より世の中をよくすることができると語る。本書では新たにつくり出すことにこだわらず、既にあるものに手を入れて工夫した、DIYのレシピをスケッチと簡単なコメントと共に多数紹介。スポンジを使った棚や、ガードレールに寄生する椅子など、身近にあるものが新鮮なかたちとなって、思いがけないパフォーマンスを発揮する。日々のノイズを受け止め、状況の変化に合わせて可変するデザインの提案には、少しの工夫が日々の生活から街まで変えてしまうヒントが詰まっている。　(yt)

都市で進化する生物たち
"ダーウィン"が街にやってくる

メノ・スヒルトハウゼン 著／岸由二 訳／小宮繁 訳

（四六判／352頁／2,200円／草思社）

都市は、自然と対立的に語られることが多く、人間以外の生物にとってよい環境ではないと思われがちである。しかし、そうした都市の中にこそ広がる生態系があると、その数多くのを事例を紹介する本書。たとえば、ロンドンの地下鉄のトンネルに生息するロンドンチカイエカは、もともと蚊の中でも鳥から吸血する種であったのだが、地下鉄を利用する人から血を吸い、冬眠せずに一年中活動するように進化する。さらには、地下鉄3路線で異なる3つの種に分化しつつあることが発見され、都市環境に淘汰されるのではなく、順応し進化していることが明かされる。一方で、「都市とは、進化を強力に推し進める拠点でありながら、多様性の大いなる喪失が生じる場所でもあるのだ」とあるように、適応できた動植物の裏で、何倍もの生態系が失われている事実も語られており、生物にとっての都市の価値について考えるきっかけとなる1冊である。(noc)

尾根の屋根
掲載：22-35頁

竹花工業
代表　唐澤正幸
今回の現場監督　藤巻英之　池田秀二　水上幸治
規模　135名
所在地　**長野県小諸市南町2-6-10**
電話番号　0267-22-1750
https://takehanakogyo.co.jp
最近施工した作品
「山野草のコックピット」中村拓志（本誌1511）
COMMENT
施工　監督をはじめ現場の職人さんも意匠の意図に最大限配慮し、積極的に意見交換を行いながら施工を進めていただきました。コンクリート洗い出し仕上げに使用するコンクリートは数社の生コン工場からコンクリートを取り寄せサンプルを制作して、工場を選定させていただきました。
（野崎俊／長谷川豪建築設計事務所）

オプティカルグラスのリヤド
掲載：36-47頁

佐藤秀
代表　村野忠男
今回の現場監督　馬場章郎
規模　180名
所在地　**東京都新宿区新宿5-6-11**
電話番号　03-3225-0311
http://www.satohide.co.jp
最近施工した作品
「シロ」隈研吾（本誌1909）
「半島の家」原田真宏＋原田麻魚（本誌1901）
COMMENT
施工　光学ガラスブリック、炻器質レンガブリック、木など、異種素材の取り合いが多い難しいプロジェクトでしたが、細部まで丁寧に仕上げてくださいました。経験豊富な現場監督の馬場さんや主任の青野さんのもと、現場一体となって対応いただき、コスト面においても増減でやり繰りできるよう柔軟に建主や設計者の意図を汲み取り提案してくれました。また新しい仕事でご一緒できる機会があることを楽しみにしています。（中村拓志）

森の図書館
掲載：60-69頁

大同工業
代表　堀口岳士
今回の現場監督　高島望
規模　41名
所在地　**静岡県伊東市広野4-4-19**
電話番号　0557-37-4321
http://www.daido-kogyo.co.jp
最近施工した作品
「土屋の家」長坂大（本誌1911）
「CARVE HOUSE」虎尾亮太＋謝欣芸（本誌1905）
COMMENT
施工　経験豊富な施工者と息の合った職人さんたちにより、設計意図を汲みつつスムーズかつ丁寧に進めていただけました。前例のない屋根構造とスリットの刻みは難しいものでしたが、腕もセンスも非常によい大工さんにより完璧な仕上がりとなり感謝しています。（三井嶺）

大原の家
掲載：70-77頁

コラボ建築
代表　藤居武司
今回の現場監督　岸本周治
規模　4名
所在地　**京都府京都市上京区日暮通中立売南入須浜池町246**
電話番号　075-431-6111
最近施工した作品
「泉涌寺の町家」森田一弥（本誌2010）
COMMENT
もう10年以上の付き合いとなりますが、設計者のいいなりではなく、施工者としての意見をいつもフィードバックして下さる、頼もしい存在です。（森田一弥）

ODYSSEY
掲載：78-89頁

山菱工務店
代表　前川澄男
今回の現場監督　三浦弘之
所在地　**東京都三鷹市新川6-26-6 Le Grand Bleu SANRYO 2F**
電話番号　0422-46-5588
http://sanryo.com
最近施工した作品
「WITH DECK」椎名英三+椎名祐子（本誌1610）
「林居」椎名英三+椎名祐子（本誌1708）
COMMENT
施工　監督の三浦さんとは今回で5作品目となるが、難しい収まりに対しても積極的に対応し、素晴らしい建築を一緒に目指してくれる。
コスト　親身になって見積調整を行なっていただき感謝している。
その他　社長をはじめ、監督や下請け業者も素晴らしい方がたが集まっている。（椎名英三）

月明と数寄
掲載：96-111頁

春日建設
代表　伴仲信英
今回の現場監督　須藤哲哉
規模　15名
所在地　**東京都千代田区飯田橋2-9-3**
電話番号　03-3264-4011
https://www.kasuga-kensetsu.co.jp
最近施工した作品
「S'nagayamon」川口通正（本誌1604）
COMMENT
春日建設は図面をよく読み込み、現場での施工精度についてはとても満足度が高い。工期についても厳守してくれる。コストは当然設計した建築によって異なるが、適切である。特にこの現場を長きにわたって監督してくれた須藤哲哉さんはたぐいまれな人材である。（川口通正）

魚沼の家
掲載：112-119頁

フラワーホーム
代表　藤田満
今回の現場監督　鈴木祥仁
規模　25名
所在地　**新潟県十日町市中条甲921-1**
電話番号　025-752-7544
https://www.flower-h.com
最近施工した作品
「六日町の家」奥野公章＋我伊野威之（本誌1001）
COMMENT
フラワーホームとは先代からの付き合いとなる。寒冷地・豪雪地帯での家づくりに特化した設計施工を中心とした工務店である。図面をきちんと読みこなし、つくり上げていく職人を揃えている。（伊礼智）

船頭小屋
掲載：120-125頁

水澤工務店
代表　水澤孝彦
今回の現場監督　池本和彦　栢沼正樹　棟梁：壺屋健二
規模　90名
所在地　**東京都江東区木場5-6-1**
電話番号　03-3641-7111
http://www.mizusawa-inc.co.jp
最近施工した作品
「北青山のマンション」堀部安嗣（本誌1602）
「洗足池の家／MONOLITH」城戸崎博孝（本誌1701）
「階段の家」nendo＋YSLA（本誌2007）
COMMENT
施工　かねてより数寄屋建築をお願いしておりますが、今回は1坪の小さな空間にもかかわらず、水澤工務店の高度な技術と知恵を惜しみなく注いでいただきました。材料選び、原寸図による納まり検討、仕上げや木組みまで、すべてにおいて磨き抜かれた匠の技で、常にこちらの要求を超える質の高い仕事をしてくださいました。どこを見ても高精度で美しい、工芸品のような仕上がりになったと感じています。
（田中祥吾／城戸崎建築研究室）

タープ
掲載：126-133頁

ごぼう設計工房
代表・今回の現場監督　工藤順一
規模　2名
所在地　**埼玉県幸手市大字千塚136-10**
https://gobousekkei.com
COMMENT
施工　設計者としての視点をもつ工藤さんに安心して施工を任せられました。
工期　丁寧な施工と正確な段取りで手戻りがなく、スムーズに進められました。
コスト　見積りの項目は細かく、建主にも分かりやすく、工藤さんの誠実さが表れているようでした。
その他　ご夫婦でやられている小さな工務店。自らも手を動かす工藤さんとは楽しくご一緒することができました。（加藤渓一）

西浦の家
掲載：134-141頁

空間工房LOHAS
代表　寺崎幸治
今回の現場監督　稲垣端　望月広巳
今回の棟梁　梶原羊一
規模　12名
所在地　**静岡県富士市荒田島町8-16**
電話番号　0545-57-5571
https://www.kobo-lohas.jp
COMMENT
施工　誠実でこだわりの強い棟梁と現場監督で、適切な施工方法を教えていただきました。
コスト　適正価格だと思います。見積調整も前向きに対応をしていただきました。
素材　良質な地域材を使用しているので、安心して建主に説明ができました。（小泉誠）

House IT　三方吹抜けと密度
掲載：142-147頁

平田建築
代表　平田千春
今回の現場監督　平田典千
規模　7名
所在地　**愛知県名古屋市南区城下町2-34**
電話番号　052-811-2302
最近施工した作品
「Hut」葛島隆之（本誌1910）
「House NI 裏とオモテと境界」神谷勇机＋石川翔一（本誌1802）
COMMENT
施工　設計の想いを組んで一緒に思考し、最後まで妥協せずにつくり上げていただきました。
工期　当初の工程通り、遅滞なく進めていただきました。
コスト　コスト管理が重要なプロジェクトでしたが、減額案なども積極的に提案いただき助かりました。
その他　大工さんが全員平田建築の従業員のため、木工事は外注なしで施工してくださいます。
（神谷勇机＋石川翔一）

建築家情報
1. 今後予定しているプロジェクトや展覧会、講演会などの情報／ 2. Facebook、TwitterのURL
※1の作品名、竣工時期、展覧会、講演会情報は本誌発売時点での予定となります。

長谷川豪（はせがわ・ごう）
1977年埼玉県生まれ／ 2002年東京工業大学大学院修士課程修了後、西沢大良建築設計事務所勤務／ 2005年長谷川豪建築設計事務所設立／ 2015年東京工業大学大学院博士課程修了（工学博士）／ 2009～11年東京工業大学非常勤講師／ 2012～14年メンドリジオ建築アカデミー客員教授／ 2014年オスロ建築デザイン大学客員教授／ 2016年カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）客員教授／ 2017年、2019年ハーバード大学デザイン大学院（GSD）客員教授／ 2005年「森のなかの住宅」（『新建築』0612）でSDレビュー一鹿島賞、2007年東京建築士会住宅建築賞金賞受賞／ 2008年「桜台の住宅」（本誌0701）で第24回新建築賞受賞／ 2014年AR Design Vanguard ／主な著書に『考えること、建築すること、生きること』（2011年、LIXIL出版）『Go Hasegawa Works　長谷川豪作品集』（2012年、TOTO出版）『長谷川豪　カンバセーションズ』（共著、2015年、LIXIL出版）『a+u 556 Go Hasegawa』（2017年、a+u）『El Croquis 191：Go Hasegawa 2005-2017』（2017年、El Croquis）

▼建築家情報
1. 「ニセコプロジェクト」（北海道／ 2021年）「House S」（東京都／ 2021年）

長谷川豪建築設計事務所　〒162-0843 東京都新宿区市谷田町3-3　tel. 03-3268-9321　fax. 03-3268-9322
mail@ghaa.co.jp　http://ghaa.co.jp

中村拓志（なかむら・ひろし）
1974年東京都生まれ／ 1997年明治大学理工学部建築学科卒業／ 1999年同大学大学院理工学研究科博士前期課程修了、隈研吾建築都市設計事務所入所／ 2002年NAP建築設計事務所設立／ 2008年「Dancing trees, Singing birds」（『新建築』0802）で日本建築家協会賞受賞／「狭山の森 礼拝堂」（『新建築』1407）で2014年JIA優秀建築賞受賞、2016年ARCASIA建築賞Building of the Year受賞／「Ribbon Chapel」（『新建築』1407）で2015年LEAF賞大賞、2016年第57回BCS賞受賞／主な著書に『恋する建築』（2007年、アスキー）『地域社会圏モデル』（共著、2010年、LIXIL出版）『現代建築家コンセプト・シリーズ 微視的設計論』（2012年、LIXIL出版）『JA 114』（2019年、新建築社）

▼建築家情報
1. 「Tree full house」（神奈川県／ 2020年）「ZOZOオフィス」（千葉県／ 2020年）「聖マリア大聖堂　マニラ」（フィリピン／ 2021年）
2. Twitter：https://twitter.com/naparchitects　Instagram：https://www.instagram.com/hiroshi_nakamura_naparchitects

中村拓志&NAP建築設計事務所　〒108-0072 東京都港区白金5-6-18　tel. 03-6447-7702　fax. 03-6447-7798
press@nakam.info　http://www.nakam.info

大室佑介（おおむろ・ゆうすけ）
1981年東京都生まれ／ 2005年多摩美術大学環境デザイン学科卒業／ 2007年多摩美術大学大学院美術研究科修了／ 2007～09年磯崎新アトリエ／ 2009年大室佑介アトリエ/atelier Ichiku ／ 2015年私立大室美術館を開館／現在、私立大室美術館館長／ 2010年「Haus-000」でAR Emerging Architecture Awards highly commended ／ 2015年「私立大室美術館本館」（『新建築』1612）でMURO賞受賞

▼建築家情報
1. 「私立大室美術館新館」（三重県／ 2020年）「Haus-010」（三重県／ 2020年）「Haus-011」（三重県／ 2021年）「Haus-012」（三重県／ 2021年）

大室佑介アトリエ　〒515-2603 三重県津市白山町川口731 私立大室美術館
omuro@ichiku.org　http://ichiku.org

三井嶺（みつい・れい）
1983年愛知県生まれ／ 2006年東京大学工学部建築学科卒業／ 2008年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程（日本建築史）修了／ 2008～15年坂茂建築設計／ 2015年三井嶺建築設計事務所設立／「日本橋旧テーラー堀屋改修」（『新建築』1603）で2017年Under 35 Architects exhibition 2017最優秀賞、2019年第29回AACA賞奨励賞受賞／「柳小路南角」（『新建築』1909）で2019年WOOD DESIGN AWARD 2019、第15回木の建築賞、ウッドシティ TOKYOモデル建築賞最優秀賞

▼建築家情報
1. 「茶室 清風庵」（北海道／ 2020年）
2. Twitter：https://twitter.com/rmitsui0123

三井嶺建築設計事務所　〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-1-8 オーベル渋谷202　tel. 03-6805-1633　fax. 03-6800-3655
office@reimitsui.com　https://www.reimitsui.com

森田一弥（もりた・かずや）　**小寺磨理子**（こでら・まりこ）

（森田一弥・上）1971年愛知県生まれ／1997年京都大学大学院修士課程修了／1997～2001年京都「しっくい浅原」にて左官職人として修業／2000年森田一弥建築設計事務所設立／2007年ポーラ美術振興財団若手芸術家在外研修員として、Enric Miralles Benedetta Tagliabue Arquitectes在籍（スペイン、バルセロナ）／2011年文化庁新進芸術家海外研修員としてカタルーニャ工科大学バルセロナ建築大学校留学（スペイン、バルセロナ）／2020年～京都府立大学生命環境学部環境デザイン学科准教授

（小寺磨理子・下）1989年岡山県生まれ／2014年滋賀県立大学大学院環境科学研究科環境計画学専攻修了／2015年～森田一弥建築設計事務所／2020年～フリーランスとしても活動を開始

▼建築家情報

1.「紀伊田辺の住宅」（和歌山県／2020年）「キョウトグラフィービル」（京都府／2020年）「安満遺跡公園歴史拠点施設」（大阪府／2021年）

森田一弥建築設計事務所　〒601-1121 京都府京都市左京区静市静原町197　tel. & fax. 075-204-1489
http://morita-arch.com

椎名英三（しいな・えいぞう）　**椎名祐子**（しいな・ゆうこ）

（椎名英三・上）1945年東京都生まれ／1967年日本大学卒業／1968年宮脇檀建築研究室／1976年椎名英三建築設計事務所設立／2018年～椎名英三・祐子建築設計

（椎名祐子・下）1973年東京都生まれ／1996年日本女子大学家政学部住居学科卒業／1996年吉田研介建築設計室／2008年椎名英三建築設計事務所／2018年～椎名英三・祐子建築設計

1993年「HOTEL Y」で商環境デザイン賞受賞／2000年「光の森」でJIA新人賞受賞／2010年「宇宙を望む家」で日本建築家協会25年賞受賞／2011年「IRONHOUSE」（本誌0801）で日本建築学会賞作品賞受賞／2019年「林居」（本誌1708）でモダンリビング大賞審査員特別賞受賞

椎名英三・祐子建築設計　〒154-0017 東京都世田谷区世田谷2-4-2 SACRA TERRACE E2　tel. 03-6413-7890　fax. 03-6413-7893
atelier@e-shiina.com　http://www.e-shiina.com

川口通正（かわぐち・みちまさ）

1952年兵庫県生まれ／独学で建築を学ぶ／1983年川口通正建築研究所設立／2006～16年工学院大学非常勤講師／2008～10年、2018～20年NPO法人家づくりの会代表理事／2011年～NPO法人家づくりの会理事／1992年「草絲館」（本誌9108）でUD賞都市建築部門賞受賞／1999年「土庵」（本誌9507）で川口市都市デザイン賞受賞まちかどスポット賞受賞／「木竈」（本誌1001）で2012年軽井沢・緑の景観賞2011年度最優秀賞受賞、2017年第1回囲炉裏・薪ストーブのある暮らしデザインコンテスト薪ストーブ部門優秀賞／2013年「NPO法人家づくりの会・家づくり学校」で日本建築学会教育賞（教育貢献）受賞／2014年「迷迭香」（本誌1408）で第3回家づくり大賞審査員選定部門快適空間賞受賞／主な著書に、『狭い敷地での間取り』（共著、1996年、彰国社）『日本の住宅をデザインする方法』（共著、2011年、エクスナレッジ）

▼建築家情報

1.「U邸」（神奈川県／2020年）「M邸」（神奈川県／2020年）「M集合住宅」（東京都／2021年）「H寺プロジェクト」（東京都／2023年）

川口通正建築研究所　〒112-0003 東京都文京区春日2-24-15 ルミエール文京伝通院201　tel. 03-3815-9954　fax. 03-3815-3573
kawag@hkg.odn.ne.jp　https://www.wako-car.co.jp/michimasa

伊礼智（いれい・さとし）

1959年沖縄県生まれ／1983年琉球大学理工学部建設工学科卒業／1986年東京藝術大学美術学部建築科大学院修士課程修了／1986～96年丸谷博男＋エーアンドエー／1996年伊礼智設計室設立／現在、東京藝術大学美術学部建築科非常勤講師／2006年「東京町家 9坪の家」（本誌0510）で第5回エコビルド賞受賞／2007年「東京町家 町角の家」（本誌0610）で第6回エコビルド賞受賞／2013年「i-works project」（本誌1311）でグッドデザイン賞受賞／2014年「守谷の家」（本誌1005）でグッドデザイン賞受賞／2014年「高岡の家」（本誌1504）で第45回富山県建築賞優秀賞受賞／著書に『伊礼智の住宅設計法』（2009年、編集：新建新聞社 発行：アース工房）『伊礼智の住宅設計　標準化から生まれる豊かな住まい』（2012年、エクスナレッジ）『伊礼智の「小さな家」70のレシピ』（2014年、エクスナレッジ）『住宅建築家　三人三様の流儀』（共著、2016年、エクスナレッジ）『伊礼智の住宅デザイン DVDデジタル図面集』（2017年、エクスナレッジ）『伊礼智の住宅設計法Ⅱ』（2017年、編集：新建新聞社）『オキナワの家』（2018年、復刊ドットコム）

▼建築家情報

1.「上田の家」（長野県／2020年）「大型パネル工法・あさひの家」（千葉県／2020年）「三豊の家」（香川県／2021年）「西宮の家1・2」（兵庫県／2022年）
2. Twitter：https://twitter.com/satoshi_irei　Facebook：http://www.facebook.com/irei.satoshi1

伊礼智設計室　〒171-0031 東京都豊島区目白3-20-24　tel. & fax. 03-3565-7344
irei@interlink.or.jp　http://irei.exblog.jp

城戸崎博孝（きどさき・ひろたか）

1942年東京生まれ／1966年日本大学理工学部建築学科卒業／1966〜79年松田平田設計／1973年英国シェフィールド大学大学院修士課程修了／1979〜93年丹下健三・都市・建築設計研究所／1993年アーキテクトファイブ共同主宰／2000年城戸崎建築研究室設立／2009年「高台の家」（『新建築』0807）で日本建築家協会優秀建築選／2014年「八ヶ岳の家」（本誌1309）で日本建築家協会優秀建築選、モダンリビング大賞受賞／2017年「洗足池の家／MONOLITH」（本誌1701）で第27回AACA特別賞受賞、グッドデザイン賞受賞／2018年「軽井沢横内邸」（本誌1709）で日本建築学会作品選集2018／2019年「箱根富士見台」（本誌1807）でモダンリビング特別審査員賞、グッドデザイン賞受賞

▼建築家情報

1. 「軽井沢SPM」（長野県／2020年）「芳草居（茶室）」（長野県／2020年）「沖縄O邸」（沖縄県／2020年）「MAPLE TERRACE SHOTO」（東京都／2020年）「静岡I邸」（静岡県／2020年）「M邸」（神奈川県／2021年）「軽井沢N邸」（長野県／2021年）「元麻布L邸」（東京都／2021年）「熱海K邸」（静岡県／2021年）

城戸崎建築研究室　〒104-0061 東京都中央区銀座1-5-12PH　tel. 03-3562-2235　fax. 03-3562-2237
info@kidosaki.com　http://www.kidosaki.com

加藤渓一（かとう・けいいち）

1983年東京都生まれ／2008年武蔵工業大学大学院修士課程修了（現：東京都市大学）／2008〜10年MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO／2010年studioPEACEsign設立／2011年〜HandiHouse project／2014年第一回これからの建築士賞受賞（HandiHouse projectとして）

▼建築家情報

1. 「中野の庭付き平屋賃貸」（東京都／2020年）「厚木の木造平屋改修」（神奈川県／2020年）
2. Twitter：https://twitter.com/katoke_handi　Facebook：https://www.facebook.com/keiichi.kato.96

スタジオピース＋HandiHouse project　〒192-0046 東京都八王子市明神町4-9-1-904
info@handihouse.jp　http://handihouse.jp

小泉誠（こいずみ・まこと）

1960年東京生まれ／1985〜89年ジョイントセンター／1990年Koizumi Studio設立／2003年こいずみ道具店開設／2015年一般社団法人わざわ座設立／現在、武蔵野美術大学空間演出デザイン学科教授／2012年毎日デザイン賞受賞／2013年「こいずみ道具店」でJCDアワード金賞受賞／2015年「mageita stool」で日本クラフト展大賞受賞／2018年「能作本社」でJIDデザインアワード大賞受賞／主な著書に『デザインの素』（2003年、ラトルズ）『と／to』（2005年、TOTO出版）『地味のあるデザイン』（2015年、六耀社）

▼建築家情報

1. 「sumitsubo house」（大阪府／2021年）「伊藤家の住宅」（東京都／2021年）
2. Facebook：https://www.facebook.com/koizumidouguten　Instagram：https://www.instagram.com/koizumi_studio

Koizumi Studio　〒186-0003 東京都国立市富士見台2-2-31　tel. 042-574-1458　fax. 042-574-1469
koizumistudio@vega.ocn.ne.jp　http://www.koizumi-studio.jp

神谷勇机（かみや・ゆうき）　**石川翔一**（いしかわ・しょういち）

（神谷勇机・上）1986年愛知県生まれ／2009年三重大学工学部建築学科卒業／2010〜13年佐々木勝敏建築設計事務所／2014年1-1 Architects共同主宰／2014〜16年ジンバブエ ハラレ技術工科専門学校講師（JICA／JOCV）／現在、名古屋造形大学、愛知工業大学、名城大学非常勤講師

（石川翔一・下）1986年愛知県生まれ／2012年名古屋工業大学大学院修了／2012〜15年組織設計事務所／2014年1-1 Architects共同主宰／現在、名古屋工業大学非常勤講師

2014年「HC3」でSDレビュー 2014入選／「House NI 裏とオモテと境界」（本誌1802）で2016年SDレビュー 2016入選、2018年中部建築賞、2020年日本建築学会新人賞受賞／2018年「House OS 3つ屋根の下」でSDレビュー 2018SD賞受賞

▼建築家情報

1. 「House IU」（愛知県／2021年）「Hotel MM」（愛知県／2021年）「House ST」（愛知県／2021年）「House NH」（愛知県／2021年）「HC3」（ジンバブエ、ハラレ／2021年）「House GW」（愛知県／2021年）「House KJ」（愛媛県／2021年）
2020年10月16日〜26日「Under 35 Architects exhibition 2020」出展（大阪府）

1-1 Architects　〒448-0806 愛知県刈谷市松栄町3-6-16　tel. & fax. 0566-25-0335
info@1-1arch.com　https://1-1arch.com

執筆者

塚本由晴（つかもと・よしはる）
1965年神奈川県生まれ／1987年東京工業大学工学部建築学科卒業／1987～88年パリ・ベルビル建築大学／1992年貝島桃代とアトリエ・ワン共同設立／1994年東京工業大学大学院博士課程修了／2003、2007、2015年ハーバード大学大学院客員教授／2007、2008年UCLA客員准教授／2011年The Royal Danish Academy of Fine Arts客員教授、Barcelona Institute of Architecture 客員教授／2013年コーネル大学visiting critic／2015年デルフト工科大学客員教授／2017年コロンビア大学客員教授／現在、東京工業大学大学院教授

平田晃久（ひらた・あきひさ）
1971年大阪府生まれ／1994年京都大学工学部建築学科卒業／1997年京都大学大学院工学研究科修士課程修了／1997～2005年伊東豊雄建築設計事務所／2005年平田晃久建築設計事務所設立／現在、京都大学教授

増田信吾（ますだ・しんご）
1982年東京都生まれ／2007年武蔵野美術大学建築学科卒業／2007年増田信吾＋大坪克亘を共同で設立／2015年Cornell University Baird Visiting Critic／2019年明治大学特任准教授

篠原聡子（しのはら・さとこ）
1958年千葉県生まれ／1983年日本女子大学大学院修士課程修了／1983～85年香山アトリエ／1986年空間研究所設立／2020年～日本女子大学学長／現在、日本女子大学教授

藤本壮介（ふじもと・そうすけ）
1971年北海道生まれ／1994年東京大学工学部建築学科卒業／2000年藤本壮介建築設計事務所設立

大野博史（おおの・ひろふみ）
大分県生まれ／1997年日本大学理工学部卒業／2000年同大学大学院理工学研究科修士課程修了／2000年池田昌弘建築研究所／2005年オーノJAPAN設立／主な受賞に「RIng Aroung a Tree」（『新建築』1106）で2011年第6回日本構造デザイン賞受賞、2013年日本建築学会作品選奨、2016年「チャイルド・ケモ・ハウス」（『新建築』1310）で日本建築学会作品選奨、2017年「春日大社国宝館」（『新建築1701）で国土交通大臣賞耐震改修優秀建築賞受賞／主な著書に『ヴィヴィッド・テクノロジー』（共著、2007年、学芸出版社）『構造デザインマップ東京』（共著、2014年、総合資格学院）『構造設計を仕事にする』（共著、学芸出版社、2019年）

柳室純（やなぎむろ・じゅん）
1980年静岡県生まれ／2003年京都大学工学部建築学科卒業／2007年同大学大学院工学研究科建築学専攻修了／2007～15年満田衛資構造計画研究所／2015年柳室純構造設計設立

鈴木繁明（すずき・しげあき）
1951年新潟県生まれ／金塚中学校卒業後、親戚にあたる林棟梁のもとで修行／1976年独立して鈴木工務店を開業。本格的な数寄屋建築を数多く手がける。以来、住宅や数寄屋の仕事と共に、社寺関係の仕事も行っている。

久世安樹（くせ・あき）
1966年神奈川県生まれ／1989年お茶の水女子大学文教育学部卒業／2004年京都造形芸術大学ランドスケープデザイン学科卒業／2004～11年逗子ガーデン勤務／2011年NAYA設計室設立

井上健一（いのうえ・けんいち）
1987年岐阜県生まれ／2010年東京大学工学部建築学科卒業／2012年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了／2012年3月～2018年8月佐藤淳構造設計事務所／2018年9月～井上健一構造設計事務所

原尚（はら・ひさし）
1949年川崎市生まれ／1977年東京芸術大学建築科卒業／1977～80年山下設計／1981～82年ヨーロッパ遊学／1983～89年原尚建築設計事務所／1990年～株式会社原尚建築設計事務所／現在同事務所取締役社長

◎訂正
2020年10月号2-3頁の座談月評で表記に誤りがありました。
正：「三谷裕樹」
誤：「三谷祐樹」
訂正し、お詫び申し上げます。

住宅作品の投稿をお待ちしています。

［対象作品］
作品は、増改築を含めた住宅（戸建て・併用・集合・別荘）をはじめとして、まちづくりなど「住まうこと」に関わるすべてが対象です。

［送付形式］
氏名・年齢・所属・連絡先を明記のうえ、建物の概要が分かる下記の資料をメールでお送りください。
- **写真**（外観・内観を含めできるだけ多く）
- **図面**（配置・平面・断面）
- **建築データ**（所在地・主要用途・竣工年・規模・構造など）
- **設計主旨**（敷地条件など諸条件を簡単にご説明頂いたうえで、建築的にどのような解決策や提案を考えそれを実現したかについてお書きください。）

＊タイトルは〈住宅作品投稿〉として、図面はPDF形式にしてください。
添付ファイルにて5MB以内でお送りください。
＊投稿作品の掲載については、掲載を決定した場合のみ、こちらからご連絡します。採否のお問合せはご遠慮ください。

［送り先］ jt@japan-architect.co.jp

編集後記

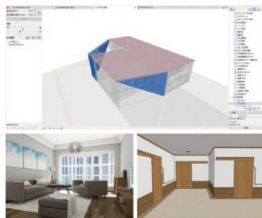
本誌では、建築家の文章、その中にある言葉を重要にしてきましたが、それは保持しながら、今月号では図面により深く向き合うことになりました。特集のタイトルは、冒頭に書いた通り、それぞれの環境に即したスケールとディテールには、建築家の発想と譲れない一線が見えてくる、という意図を込めました。そしてここでいう「ディテール」とは、単に物理的な詳細部分という意味ではなく、建築全体に関わる概念が集中する細部としてとらえています。そこには、それによって建築の風景が変わるような、建築全体のコンセプトが込められているのではないか。これが「スケール」という言葉を入れた理由です。今号に掲載するそれぞれの誌面には、その思想の骨格がいちばん表れる図面を用意してもらいました。
たとえば、伝統的な民家の工法や細部の工夫を見ていくと、土地の気候風土や環境に対応した暮らし方のあり様を推し量ることができます。その視点をそのまま敷衍するには現代の住宅はあまりに複雑で多様ですが、スケールとディテールという建築を決定づける極めて重要なものから、建築家の思考と挑戦を見ていただきます。
（A）

ショールームがリニューアル、「PHセプティマ」日本初公開
ルイスポールセンジャパン

所在地：東京都港区六本木5-17-1 アクシスビル3F。営業時間：平日11:00–18:00（当面の間短縮営業）、休業日：土曜、日曜、祝日。

ルイスポールセンは、「東京ショールーム」をリニューアルオープンし、それを記念して今秋復刻発売を予定している「PHセプティマ」を日本初公開した。ショールームには、ルイスポールセンのほぼすべての製品を展示する他、建築家の芦沢啓治氏がデザインしたライブオフィスで、実際に製品が使用されている様子も見ることができる。

ルイスポールセンジャパン
tel:03-3586-5341
https://www.louispoulsen.com

BIMソフト「GRAPHISOFT Archicad 24」発売
グラフィソフトジャパン

上：「モデル比較機能」で、複数のデザイン案や、参照している外部ファイルの変更を視覚的に比較できる。左下：インテリアライブラリを使用してつくったレンダリング。右下：日本仕様の建具ライブラリが強化された。

グラフィソフトジャパン（株）は、BIMソフト「Archicad 24」を発売した。設計の初期段階から意匠、構造、設備の担当者が同じBIMモデルを活用し、ファイル形式とソフトウェアに制限されず設計ができる。また、新しく搭載された「PARAM-O」および「Pythonパレット」により開発者の知識を必要としたカスタマイズが、一般ユーザーもできるようになった。

グラフィソフトジャパン（株）
https://www.graphisoft.com/jp

深澤直人氏デザインの「Tako」シリーズ発売
マルニ木工

左：ダイニングテーブル。サイズ：w2,200×d950×h700mm。
価格：540,000円（税別）。
右：アームチェア。サイズ：w600×d564×h775×sh449mm。
価格：148,000円（オーク材）、168,000円（ウォルナット材、共に税別）。

（株）マルニ木工は、深澤直人氏デザインの「Tako（タコ）」シリーズを発売した。背もたれからアーム、脚にいたる曲線が特徴のアームチェアは、曲木を使わず切削加工でつくり出した。テーブルは、縁が丸く薄い天板が特徴。同社が長年培ってきた、無垢の木を削り出す加工技術を応用することで実現したかたち。

（株）マルニ木工
tel:03-5614-6598
https://www.maruni.com

新たな海外ブランドの取り扱いを開始予定
コクヨ

Form チェア（ノーマンコペンハーゲン）。価格：42,000円〜（税別）。

コクヨ（株）は、海外家具ブランドの輸入販売「BRAND COLLECTION」で、新たなブランドの取り扱いを12月下旬から開始する。デンマークの「Normann Copenhagen（ノーマンコペンハーゲン）」、上海の「Stellar Works（ステラワークス）」、イギリスの「Camira（カミラ）」の3社を追加し、さらに現在取り扱っているブランドの商品も拡充する予定。

コクヨ（株）
0120-201-594
https://www.kokuyo.co.jp

折板カーポート「G-1」と「G-1ss」のバリエーション拡充
三協立山 三協アルミ社

施工イメージ。

三協立山(株) 三協アルミ社は、折板カーポート「G-1」と「G-1ss」のラインナップを拡充した。間口サイズに4,310mm、6,710mm、7,310mmの3タイプと、間口延長に1,800mmを追加。さまざまな用途に合わせた利用が可能になった。屋根材に「高耐久ペフ付き折板」、側面パネルに「たて長デザインタイプ」を追加し、機能性も増した。

三協立山(株)　三協アルミ社
tel:0766-20-2261
https://alumi.st-grp.co.jp

多機能加湿装置「ナノフィール」大能力タイプ追加
コロナ

多機能加湿装置「ナノフィール」。

(株)コロナは、1台で加湿、消臭、除菌、空気清浄ができる多機能加湿装置「ナノフィール」に、最大300m^{2}の空間に対応する大能力タイプを追加し、2021年4月から発売する。従来の据置型ナノフィールでは複数台の設置が必要であった広い空間も、大能力タイプなら設置台数を減らすことができ、配管工事などの設置に伴う費用も抑えることが可能。

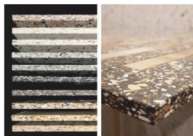
(株)コロナ
tel:0256-32-2111
https ://www.corona.co.jp/

クッションフロア見本帳「2020-2022 H フロア」発行
サンゲツ

収録点数151柄292点。

(株)サンゲツは、クッションフロアの見本帳「2020-2022 H フロア」を発行した。住宅用クッションフロアを中心に、店舗用やペット対応など暮らしの用途に合わせた商品全151柄292点を収録している。また、巻頭の「Have a Good Weekend」では、生活者の目線で好きなもののデザインを部屋の中に取り入れる楽しさを提案。

(株)サンゲツ
tel:052-564-3314
https://www.sangetsu.co.jp

「VENICE VILLA」発売
アークテック

表面の仕上げは、MattとPolishedの他、色により凹凸のあるStructuredとSabbiatoがある。

(株)アークテックは、イタリアFMG社のテラゾー柄タイル「VENICE VILLA(ベニスヴィラ)」を発売した。フルボディなので小口も美しく仕上げることができ、床や壁だけでなく、テーブルやキッチンの天板にも適している。チップの大きさが異なる「VENICE(ベニス)」と「RIALTO(リアルト)」のラインがあり、カラーバリエーションは各13色。

(株)アークテック
tel:03-5422-6491
http://arc-tec.co.jp/

さまざまなデザインに対応する洗面ボウル
デザインマネジメントシステム

デザインマネジメントシステムによるオリジナルのデザイン洗面ボウル。

デザインマネジメントシステム(株)は、人工大理石製のデザイン洗面ボウルを発売した。素材は、アクリル系樹脂の中でも優れた特性を持つMMA100%製。仕上げの美しさだけでなく、各種耐性やメンテナンス性に優れている。シャープなデザインや柔らかく優しいフォルムなどさまざまなデザインに対応する。特注対応可能。

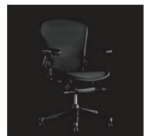
デザインマネジメントシステム(株)
0120-518-805
https://www.bravat.jp/

イタリアのアウトドア家具ブランドRODAの新製品発売
アルフレックスジャパン

EDEN(エデン)。

(株)アルフレックスジャパンは、イタリアのアウトドア家具ブランドRODA(ロダ)の新製品を発売した。チークとスチールの調和が特徴で、組み合わせによってさまざまなレイアウトが可能な「EDEN(エデン)」と、植物をモチーフにしたアルミフレームの曲線が特徴の「THEA(テア)」が新発売。他にも、5つのシリーズで新たなアイテムを追加した。

(株)アルフレックスジャパン
0120-33-1951
https://www.arflex.co.jp

「アーロンチェア ゲーミングエディション」発売
ハーマンミラー

アーロンチェア　ゲーミングエディション。
価格:195,000円(税別)。

ハーマンミラーは、「アーロンチェア ゲーミングエディション」を発売した。人間工学に基づいた設計で、ゲーマーの体型やゲームの種類に合わせ、チェアの細かい調整ができる。ゲームプレイ環境に合うカラーとして、オールマットブラックを「アーロチェア」シリーズとして初めて採用。優れた機能性とデザイン性が、プレイ環境を高める。

ハーマンミラー
info_storetokyo@hermanmiller.com
https://www.hermanmiller.com

マット仕上げの新色2色追加
セラトレーディング

カラー:ラバグレー。価格:77,000円(税別)。

セラトレーディング(株)は、FLAMINIA社の「MINI TWIN」シリーズに、マットホワイトとラバグレーの2色を追加した。「MINI TWIN」シリーズは、コンパクトなサイズと丸みのあるフォルムの手洗ボウル。既に取り扱っていた光沢のあるホワイトと合わせ、計3色をラインナップ。カラーの拡充により、インテリアのように居住空間に馴染みやすくなった。

セラトレーディング(株)
tel:03-3796-6151
https://www.cera.co.jp

新建築住宅特集11月号

広告目次

広告掲載企業

トピックス掲載企業
（50音順）
P.166-167

『新建築住宅特集』資料請求方法について

個人情報保護法に基づき、読者の皆様の個人情報保護を図るため、新建築社ではホームページ上に広告掲載企業を閲覧できるようにし、各企業のホームページをリンクいたしました。
資料請求をされる際は、各広告掲載企業へ直接資料請求を行ってください。

新建築社ホームページ　https://shinkenchiku.online

「新建築データ」からのお知らせ

『新建築　住宅特集』は試験的に、
データベースを無償公開しています。

アンケートを実施中です。
オンライン授業などにおける「新建築データ」の利用と、
『新建築　住宅特集』データベースについて
みなさまからのご意見をお寄せください。

←アンケート回答フォーム（QR コードからアクセスください）
新建築データにアカウントをお持ちでないかたもご回答いただけます。
ご協力いただいたかたには後日、結果の一部をご報告予定です。

・「新建築データ」のアカウントをお持ちでないかたは、新規登録をお願いいたします。すでにアカウントをお持ちのかたは、あらたに登録する必要はございません。
・データベースの公開予定は予告なく変更することがございます。あらかじめご了承ください。
・無償期間終了後は、自動的に無料アカウントに移行されます。
・開発と実装に関する詳細は「新建築データ」（shinkenchiku-data.com）のお知らせ欄、SNS、メールマガジンなどでご案内いたします。

・「新建築」閲覧サービスの有償化が8月1日より開始されます。一般とアカデミック(学生のみ)の2つのプランを用意しております。なお、アカデミックユーザは学校が発行するドメインのメールアドレスで登録いただき、契約時には学生証の提出をお願いしております。詳細は「新建築データ」のサイトをご確認ください。

無償公開の終了時期は
決まり次第、
みなさまへアナウンスいたします

お問い合わせ：contact@shinkenchiku-data.com